
パンツ脱いたら通報された

烈火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンツ脱いだら通報された

【Nコード】

N6663Y

【作者名】

烈火

【あらすじ】

俺はただ頭にパンツをかぶりながら散歩をしていただけなのに市民の平和を守るためとかなんとか言っちゃって、市民である俺を逮捕するとはこれいかに。あれだぜ？俺自身は無職だけど幼馴染なんて凄いいんだからな。19歳になっても少女で押し通してる凄いい人なんだからな。……まったく、管理局の人は話も聞かないのか……。これで逮捕されるの何回目だよ。

1・俺、無職

「時というものは残酷なものである。9歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。バリアジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。しかしどうだろう……10年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。あの純粹無垢だった幼馴染はいまは19歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑わないらしい。本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなってくるほどである。髪型にしてもそうだ、いつもはサイドテールにしているのにここぞというときにはツインテール。確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいかなものかと思う。極めつけはあのバリアジャケットである。あれっていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。いいのか、管理局。おまえらのエースこれでいいのか？」

「ニートの人には言われたくないんだけど……」

一人さびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているとどうやら口から出ていたらしくたったいましがた帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。ここ、俺の部屋なんだから……

「というか、この家は私とフェイトちゃんが一緒に借りたんだからね。あまり変なことしないでね？」

「変なことって、なのはやフェイトの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと？」

「ちょっとまって、いまの議題について3時間ほど話し合おう」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちよつとした冗談のつもりだったのだが、意外になのはは怒ってた。

「もう……そういう冗談は禁止だつて言つたでしょ？ まったく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなつていまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちよつとなんで知つてるのッ!？」

なんかすんごい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い詰めてくる。地味に首が絞まって痛いのですが……。それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思いますか、この可愛らしい女性、高町なのはと俺は幼馴染である。俺の親となのはの親 土郎さんと桃子さんがとても仲がよかったのである。その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていまもそういった関係が続いている。

「そういえばなのは、何しに来たんだ？ 今日19時に帰ってくるとメールがきたのを覚えているんですが」

「うん、その予定だったんだけどちょっと帰りが遅くなりそうだから」

「それを伝えようと思って」

「そんなことでここまで？ あいかわらずやることがすげえな。えーっと、帰りが遅くなるっていうとあれか、はやてが設立した部隊のこと？」

「そうそう、機動六課だよ。ようやくスタートしたし少しの間だけバタバタしそうなんだよね」

「いつもバタバタしてるじゃん。俺からバタなのなんて愛称で呼ばれてるし」

「うるさい。まあ、そういうことからだからちよつとの間だけ遅い帰りが続きそうなんだ。ごめんね！ 夕食用意しようとしてたんでしょ？」

「べ、べつにあんたたちのために作ろうなんて考えてないんだからねッ！？」

申し訳なさそうな顔でなのはが謝ってくるもんだからとりあえずツンデレ系で返してみることにした。恐ろしいほどに無表情でこちらを見返している。ゾクゾクするぜ……！

「まあ、事情はわかったよ。ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃がもたれないような夜食置いておくから適当にフェイトと食べておいてくれ」

「ふふっ、ありがと。それじゃ私行ってくるね」

「あいよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。さてさて……スーパーにでもいつて食材買って作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよね。一人分

10畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突っこんでから部屋を出た。

「あ、そっだ」

部屋を出たところとあることを思い出して戻る。机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かって優しく挨拶をした。

「行ってくるぜ、初 ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

1・俺、無職（後書き）

どども、烈火です。基本的に息抜き投稿にはなりますが、きちり仕上げていきたいと思います。

一話あたり2000文字くらいを目処にしていますのでさっくり読めるかと。

2・ちよつとこい

「しまった牛乳買うの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さっさとカップ麺を食った俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過ごしていた。画面内ではポニーテールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであつたのだが

「牛乳がないとなのはが怒るもんない。どんなに頑張ったところでフェイトの胸には勝てないというのに。あーでも行きたくないな」

その場でぐずぐずすること3分、とりあえずゲームをセーブしてしようがなく牛乳を買ってくることにした。落ち度は自分にあるんだししょうがないよな。

「あ、そうだ。このひよつとこ仮面を装着していかない」と

机の上に無造作に放り投げられていたひよつとこのお面をつける。そういえば昔はこれで泣いているのはに追い打ちかけたっけ。

ひよつとこのお面をつけた俺は寝間着に黒のコートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買つてこなければあんなことにはならなかつたのに……

「あ、あの！　なのはさん！」

「ふえ？」

ポツキーを食べながら仕事をやっていると、新人であるスバルが声をかけてきた。スバルは熱血という言葉がよく似合うボーイッシュな女の子だ。いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもっている。ちなみに私の直属の部下にもあたる。

「どうしたの、スバル。　もしかして書類仕事でわからないことでもあったかな？」

「いえっ……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちよつと言いにくそうにしていた。その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。自分より立場が上の人や目上の人と話すときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言うまで優しくほほ笑んで見守ることにした。やがて意を決したようにスバルはその口で大きな声でとんでもない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフェイトさんが男の人と同棲してるって本当ですかっ！？」

「ぶっ！？」

思いもよらない発言になのはは唾を飛ばした、というか噴出した。

そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。 その場で残って仕事をしていた面々は面食らったような顔をしてなのはとフエイトのほうを交互にみていた。 みるとフエイトのほうも驚きのあまり書類にいちご牛乳をこぼしたようで慌てて拭いている最中であつた。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！ もしそうだとしたら私はどうすればいいんですか!？」

どうすればいいのかはこっちが教えてほしい。 なのははそう思った。 一応、なのはの身内ならば彼のことを知っているのだが……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周辺のこの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思っていたのだが

「って、ちょっとまって！ どうしてスバルがそんなこと知ってるの!？ 誰から聞いたの!？」

「そ、そうだよ！ 私もなのはも喋ってないんだからこの中に犯人はいるはずだよ！」

いちご牛乳まみれになった書類をドライヤーにかけながらフエイトはこの場で仕事をしていた知人たちを振り返った。

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラ・はやて・リインフォースの計6人に視線を走らせるフエイト。 そして一人の女性に目を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちょっとまちいな！？　なんでいきなりうちって決めつけるん！？」

「だってはやてはなのはのポッキー食べようとして回避されてたじやん」

その一言ではやての体が固まる。　どうやら凶星のようだ。

「ちょ、ちょっとまってーな！　いずれわかることなんやし、1年間ともに過ごす仲間なんやで？　やっぱりあまり秘密にするものどつかと思って、私はスバルに言ったんや。　うちもスバルがあんな行動に出るとは思ってなかったんよ」

「ほんとに？」

「ほ、ほんとや！」

立ち上がりながら必死に弁解するはやて。　なのはとフェイトはそんなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座ることにした。

「まあ、いずれわかることだからいいのはいいんだけど……ねえ、フェイトちゃん」

「うん……それはいいんだけど……」

二人して溜息を吐く。

そのとき、フェイトの袖を誰かが引っ張る。　フェイトが引っ張られたほうに目を向けると自分の子どもたちであるエリオとキャロが

立っていた。

「どうしたの二人とも？」

「あのフェイトさん。もしかしてひよっこさんのことですか？」

キャラがそう聞いてくる。

「えーっと、うん。ひよっこさんだね」

苦笑いしながら答えるフェイト。確か自分が高校生のときに二人とも別々に彼に合わせたんだっけ。彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまうではないかっ』とかなんとかいいながら、そばに置いてあったひよっこのお面をかぶって会いにいったんだ。それが二人にも受けたのを覚えている。意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。そうそうその他にも思い返せばいろんなことが

「僕もひよっこさんに女の子がいつぱいいるゲームをもらったことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらったこと覚えてます」

いろんな悪夢よみがえってくる

そう、確かに彼は渡していた。もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折ったことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。……そして言い返せない自分が悲しい。　　というかもっと言ってほしい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。　　お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ユーノに至ってはしょっちゅうメールしてるみたいだし。　　母さんはお買いものまで一緒にいく始末。　　ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とりあえず、ざわざわしだしたみんなを落ち着かせるためになのはと二人で説得してみよう。

フェイトは目配せでなのはに合図して、みんなに着席を促した。

「君、その手に持っているブラを渡しなさい」

「そうやってクンカクンカする気だろう。　　貴様に嗅がせる匂いではない！　　去れ」

迂闊だった……。　　あるとき、家を出るときに気付くべきであった。

フェイトのブラを装着してたことを

何かがおかしいと思っていた。　　まず店内に入ってから他の客が俺のことを露骨に避けていた。　　そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……。　　もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺が来たことで騒いでるのかと思いきや……。　　まさか管理局員のおっさんに通報していたとはな。　　やることがえげつないぜ

「君ね、いまの自分の状況わかってる？　　俺も捕まえたくないの。」

今月で君のこと何回捕まえたと思ってんの？　こうやって俺と君が職務質問するの何回目か知ってる？　今月で10回目だよ？　なんで3日に1回は君のふざけたひょっとこお面を見なきゃいけないのさ」

「奇遇ですね、俺もなんで3日に1回の割合でおっさんと密室で過ごさなければいけないのかとずっと思っていたんですよ」

「それは俺だって同じだよ。　いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからさっさとこい」

おっさんは溜息をつきながら俺のほうににじり寄る。

そもそもなぜ俺がこんな目に合わなければいけないのか？　俺はひょっとこのお面をつけて黒のコートを羽織って、間違えてフェイトのブラをつけて牛乳を買いにきただけなのに。

おっさんの足に合わせてこちらも下がっていくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼ってあった。

『不審者に注意！！　黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶった下着泥棒が多発しております！　住民の皆様はみつけたらこちらの番号までご連絡お願いします！』

「ほーう……なるほどね。　こんなところに同志がいるとはな。もっとも下着泥棒はしないけど」

そしてこいつのせいで俺はおっさんと密室で夜を過ごすことになる

んだな。

俺は名前もしらない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

2・ちよつとこい（後書き）

あのふざけた顔が結構好きです

3・おっさんと過ごす夜

「はい、それじゃ椅子に座ってー」

健闘むなしくおっさんに捕まった俺は交番へやってきた。そこではおっさんと二人きり。みなさん、ちょっとだけ考えてほしい。深夜におっさんと二人きりだぞ？ なにか間違いが起こるにちがない。……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおっさんだつて深夜の密室という魅惑増量世界によつてその皮を脱いでしまうわけだ。

「あのな……いつもはお前に冷たい態度をとってるんだけどよ……」

「ちょ、まてよ。俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかつてる……！ だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよ！」

「おっさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。どした、なにか嫌なことでもあったか？」

おっさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。なんか死にたくなってくる。

「いえ、持病が発症しまして。もう大丈夫です」

「そうか。まあ若いときは色々あるもんだからな。恋しかり友

情しかり」

「おっさんが言うときモイですね。　そういえば、おっさんは結婚してましたよね？　娘さんもいた気がするんですが」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰ってくるまでの間、退屈しのぎにおっさんと話しをすることに。

「まあな、これでも結婚してるぞ。　娘は二人いる。　長女が16歳で次女が7歳だ」

「離れてますね〜。　でも長女はいい年ですから恋人の一人や二人いるんじゃないですか？」

「やつはお前もそう思うだろ！！」

いきなりおっさんが身を乗り出しながらこちらに近づいてきた。　近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんだ！　家に帰ってくるのだって19時だし、この頃は化粧もしてる。　それに服だってミニスカートやニーソとか萌え萌えで受けでいいのを買ってくるようになった！　これは絶対男がいる！　毎日毎日学校でプレイしとるぞ、絶対そうだ！　もしかしてお前か！　お前がその男か！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じってるぞ」

まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。　しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、どことなく士郎さん

を思い出す。 土郎さんもなのはのことになるとおかしかったからな。 授業参観のときや合唱コンクールのときだってはしゃいでたし。 父親というものはそういうものなんだろうか。

「だけど娘さんも１７歳なんですよ？ だったら１９時に帰ることや化粧なんて当たり前じゃないの。 ミニスカやニーソだって可愛いから履こうと思ったただけかもしれないじゃん。 あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ？」

「……この頃、口をきいてくれないんだ……」

「……ごめん」

頭垂れながら絞り出すように呟いたおっさんはとても小さく見えて、たまらずそう返してしまう俺であった。

「つまりや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちゃんとフェイトちゃんの奴隷みたいなもんなんや」

『なるほど』

フェイトちゃんと二人で説明すること３０分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちゃんと伝わらなかったらしい……

「やっぱりそうですよね！なのはさんは女の子が好きなんですから、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思っていましたんです。」

やはり奴隷用として置いておいたんですね！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないように話すスバル。
この子の中で私がどういった位置に存在しているのかとても気になるのだが……聞いたらず想通りの答えが返ってきそうで聞けない。

「ち、違うつてばスバル！ わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだって！ほんと奴隷みたいな扱いなんて断じてしてないから！ ねえ、フェイトちゃん！？」

「そ、そうだよ！ どちらかというと奴隷より主みたいだよ！」

確かにそれは間違っていないかも。我が物顔で家を占領してるし。
いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作るうとしてたし。あの奇行に慣れてきた自分もアレだけど。

「そんな……だったら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い詰めたい。

「やめなさいよスバル。なのはさんたちも困ってるでしょ。それになのはさんたちは大人なのよ？ 男性と同棲くらいするわよ」

「そんな、ティア！？ ティアまでそんなこというの！ ティアだってなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。けどね……だからってなのはさんたちに当たったら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツインテールにした女の子、ティアナ・ランスタール。この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きつとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。げんに、暴走しているスバルを正気に戻そうとしているし。

「だからその男性のほうをコロコロすれば私たちのなのはさんは戻ってくるのよ」

「その手があつたか！」

訂正、この娘も暴走していた。　　というかい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。　一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちょっとまってください、こういうことは部屋に入つた後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてなくていいよティア。絶対には思っていることと正反対のことという自信があるから。　あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」

「え？」

フェイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。 なにか間違ったこと言ったかな？

「なるほど、男性も女性もどちらでもいいけるというわけですね。 流石なのはさん……これがエースというものなんですネ……！」

「私勘違いしてました……！ やはり女の子もいいですけど、それなりに男性の方ともお付き合いしないとダメなんですネ！」

「とりあえずいまでエースのなんたるかをわかってもらわれたら困るんだけど？！ 二人とも私が言ったことちゃんと理解したの！？」

質問しようとした私だが二人ははしゃぎながら席に戻る。

「ねえ、フェイトちゃん」

「うん、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合わせて、ひしつと抱き合いながら二人で呟く

「「なんでわたしたちが女の子好きになってるの……」」

こんなの絶対おかしいよ

「ただいま〜って、なんだ二人ともまだ帰ってきてないのか」

おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが二人ともどうやら帰宅してないらしい。日付だって変わったというのにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒っちゃうぞ。

「と、いうわけで疲れているであろうあいつらを溺れさせるために風呂を沸かしました。温度は38°で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」

小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけったいなものが流行ったからだと推測する。それはともかく、目の前には熱々の風呂。何故、俺がこんなものを用意したかというと……

「まずあいつらを風呂に入れて溺れさせます。すると二人のうちどちらかが悲鳴を上げるはずです。そこで俺が颯爽と登場するわけですよ。介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがうらやましくなるようなことだってできてしまっわけである。流石だな、俺」

「ただいま〜、やっと帰れたよー」

「ほんと、大変だったよね〜……。あれから職場の空気がへんな空気になるし」

「ほんとほんと」

「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがったところで二人が帰ってきた。二人とも、いかにもぐったりとした表情をしていい具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもはいつてこいよ」

「うわー！ お風呂沸かしておいてくれたの！ ありがとう！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだから！ ただ、暇だったから沸かしたただけなんだからっ！」

「フェイトちゃん、早く入ろう！」

「うん！」

見事にスルーされた。

さっさと風呂場に行く二人。俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、胃もたれしない食べ物だから……うどんでもいいか」

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。ネギを刻んでうどんを茹でる。とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さかわってくるから意外に難しい。いまだに完璧なゆで時間にあったことがないのである。

キャーーーーー！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まっていた!!

火をとめ急いで風呂場へと直行する。あくまで人命救助である。

幼馴染が大変なことになっているんだ。俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか！ そうだといっしてくれ！」

ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・T・テストロツサがアヒルではしゃいでいた。……あれ？

「……なにしにきたの？」

「……知ってた？ 俺って前世アヒルだったからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そうなんだ」

「うん。あとさ……この状況でいうのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。ごめんね、フェイト」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひょっとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。というか、フェイトが指鳴らしながらこっちをみてるんですけど。だったらこっちも貴様も胸を凝視してやるよ。そう思ったところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残すことある……?」

「うどん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は目をつぶった。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。頭の
中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの
姿。

ああ……やっぱり俺にはミクちゃんが必要みたいだ。

3 おっさんと過ごす夜（後書き）

／ ・ ・ ・ （ ）
つ ・ ・ ・ （ ）
／ ・ ・ ・ （ ）

おっさんの使いやすさは異常です

4・無職の朝は早い

『おはよう、ひよつとこ。起きて、朝だよ』

「……んあ？……もうこんな時間か。せつかくミクちゃんにす巻きにされる夢をみていたというのに……」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジンエルの目覚ましを止める。おはようミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「さて……きょうはジョギングにしとくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手早く着替えを済ませ、玄関でランニングシューズを履き外へ出る。

うん、今日もいい朝だな。

突然だが無職の朝は早い。というより俺の朝は早い。まず起床時間からして頭がおかしいと思う。なんといつても5時起きだ。

といつてもこれにはちゃんとした理由があつてだな……まず幼馴染の二人が6時には起きてくるのだ。仕事だとぬかしながら。

お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだっただろうと言いたいところだが、これは成長の証なんだと思う。なのはの胸は成長してないけど。毎朝牛乳飲んでるのにな。まあそれはおいといて

……二人が6時に起きるものだから俺は必然的に二人よりも早く起きて朝ごはんの準備や弁当の準備をしなければならない。ならもう少しだけ遅くおきてもいいじゃないかと思うだろ？けどさ、体動かしておかないと太ったりするし、それが嫌なんだよね。だから

らこうやって5時に起きてジョギングしたり散歩したりしているわけですよ。

「おうおう……ひょっとこくんじゃないかえ……。　おはような……」

「じいさんおはよう。　そろそろ天国へのカウントダウンがはじまりそうだけど犬の散歩して大丈夫なの？」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのう……」

ワンワン！　ワンワン！

「……言ってるそばから犬逃げ出したぞ、じーさん。　じーさんが持つてるのリードじゃなくてTバックだからね」

「なんとっ！？　わしとしたことがうっかりばーさんのティーバックを持ってきてしもうた！」

ばーさん無理しすぎだろ。　流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまり無理しないように気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんでも軽く手をあげて走り去ることにした。　じーさんはじーさんで楽しんでるようだし。

「さて、シャワー浴びて朝ごはん作るか」

適当に走って帰ってきた俺は、汗でべたべたしているシャツとハー

パンを洗濯器にかけるとシャワーを浴びることにした。べつにシヤツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこうやって一人寂しく洗うことに。あ、なのはとフエイトの下着発見。とりあえず分泌液でもつけておくか……。

いや、さすがにそれはやめておこう。本人たちが見ている前のほうが気持ちいいしな。

「それにしても弁当どうすっかな。意表をついて逆日の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。どんな反応をするか楽しみである。

「というわけで台所につきました。まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているエプロンを着こなして台所にたつ俺。気分はすっかり奥さんである。

「さて……まずはなのはの弁当ですが、弁当箱いっぱい梅干しを敷き詰め中央に白米をそつと置いた愛情たっぷり逆日の丸弁当です」

作り始めて1分。これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフエイトの弁当ですが、ミートボールとからあげとポテトサラダにミニスパゲッティ、そしてごはんを敷き詰めます。とりあえずフエイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほど入れておきましょう」

作り始めて20分。　なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。　まあ、作り方は意外と簡単です。　まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。　コツはしっかりと粉吹きのとくに水分を飛ばすことと半熟卵のとりとろかのである。　これが意外と難しい。　それにジャガイモだって茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？　お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終えてお次は朝ごはんである。　食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちごジャムを取り出す。　お次はハムと目玉焼きを作って、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを3人分テーブルの上にのせる。　ふう……お次は二人を起こしにいかないとな

「ウルフ１１　目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの二人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいられた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。　こんな姿してたらそりゃ世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で二人して抱き合って寝ている光景をみながらそう呟く。　なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいってられない時間帯になってきた。　そろそろ二人

を起こさないと大変なことになる。

「ということで、官能小説を朗読しながら二人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持ってきたのは妹系女の子がのっている官能小説。
これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんっ！ 宗谷、もつとハゲしくう！』」

「……なにやってんの？」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとしたところで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。朝ごはんできてからさつさと食べるぞます。そろそろ時間帯なんだし、隊長二人が遅刻なんて恰好悪いぞ」

「うん、そうするよ。ほら、フェイトちゃん朝だよ」

「ううん……もっとう願い……」

「任せろ！ 『真奈美、僕も限界』」

「いや、そつちじゃないから」

フェイトからのアンコールに応えようとしただけなのにバタなのは本を取り上げてしまった。まったく、これで参考書が一つ消えてしまった。

なのはは寝ぼけているフェイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出ていこうとする　ところで振り返った。

「おはよう、今日も一日よろしくね」

「はいはい」

さて……送り出したあとは遊びに行くか

4・無職の朝は早い（後書き）

僕はマヨネーズをたっぷり使います。

そういえば活動報告にパンツ更新と書くのもアレなので、略語としてパンツを使うことにします。あまり変わったようには思えませんが

「さて、二人のパジャマと昨日の服を洗濯機にかけたので、この時間を利用して家の掃除をしたいと思います」

マイクを持ちながらリポーター風に言ってみる。

「さあみなさん。現在私がいる部屋はあの高町なのはとフェイト・T・テストロッサの部屋でございます。みてください、所せましとぬいぐるみが置いてあります。やはり女の子なんですね、とりあえずエロ本を置いておきましょう」

辺り一面にうさぎやカメ、猫に犬にカモメに白熊。どれもこれもチャームिंगな顔をしてやがる。こいつらが毎日毎日二人に抱っこされてると思うとうらやましくてしかたない。

「まあ、二人がいない間に物色するのもアレなんでさっさと掃除をしまおう」

クイックルワイパーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを拝借し、頬擦りする。その心地よさにうっとりしていると洗濯機が俺を呼んだ。まったく……可愛がつてあげないとすぐ鳴くんだから。

そんなこんなで1時間30分ほどで家事を終わらせる。さてと……
…今度こそ遊びにいくか

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様」

『お疲れ様です！』

「おつかれ、なのは」

「あ、フェイトちゃん。おつかれさま」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイトちゃんがやってきた。

「それでどうだったの新人たちは」

「うん、みんな光るものをもっているよ！」

まだ経験が少ないけど、きっと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになると思う。 私たちのように。

「あ、そうだ。みんなにこれ渡すの忘れてたよ」

「なんですか！？　もしかしてラブレターですか！」

「落ち着きなさい、スバル。まだ早いわ。もっと好感度が上がってから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しにくるはずよ。　ハア……ハア……テンション上がったわ……！」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は二人揃っておかしいのだろうか。

家には頭おかしいを通り越して狂ってる男性がいるというのに。

「それよりも、はいこれ。 今日から一年間使うノートです。 え
っと、これはですね」

「なのはさんの手垢！」

「汗が染みついてるわ！」

「ちょっと話を聞いてっ!？」

ノートに頬を摺り寄せる二人をヴィータちゃんが後ろから殴ってくれる。 ありがとう、ヴィータちゃん。

「こほんっ。 これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。
見る人は私とフェイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさん。
毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通というわけですね？」

「なのはさん……いじらしく可愛いです……」

どういった解釈をすればそこにいきつくのだろうか。 というか、
この娘たち絶対聞いてなかったでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出すること。 それでは解
散！」

「あ！ なのはさん、一緒にシャワー浴びましょう！」

「肌と肌をこすり合わせましょう！　大丈夫、なのはさんにならな
にされても大丈夫です！」

「ちょっとまって、私の意見は！？」

「わーい、フェイトさんお昼ごはんですよ！」

「うんそうだね、キャロ。　訓練でお腹すいてるだろうからいっぱい
食べようね！」

「はい！」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフェイトさんはお弁当なんですか？」

「うんそうだよ。　彼が毎朝作ってくれるんだ。　これがなかなか
おいしくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそう、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね」

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸」
間接キス。　間接キス……！」

「ちょっとまってスバル！？ なにいきなり私のお箸を舐めようとしてるの！？」

「スバル、まだ早いわ！ 食べ終わってからにしないと」

「あ、そうだった。ごめんね、ティア」

「あれ？ 私には？」

なのはも大変だよね、家にいても六課にいても誰かに振り回されるような気がする……

「さて……とりあえずお腹すいたしお昼にしようよ！ それじゃいただきまーす！」

パカッ

オープン 逆日の丸弁当

パタンッ

クローズ 逆日の丸弁当

「あの……なのは？」

「……フェイトちゃん。一応、聞いておくよ？ 今日のお弁当の中心身になかな？」

「えっと……からあげとミニスパゲッティとポテトサラダとミートボールだけど」

それを聞いた瞬間、なのはがものすごい勢いで携帯を取り出し誰かに電話をかけはじめた。

「ちょっと！ 逆日の丸弁当ってどういうことなの！？ なんでフイトちゃんのはちゃんとしていてなのはのは嫌がらせなの！」

「うわー、本当になのはさんのお弁当梅干しがほとんど占領してる」

「ここまでくると、中央にのせてある白ごはんが怒りを倍増させるわね」

「ちょっと聞いているの！ なんで逆日の丸弁当なのか聞いているの！ 私の質問に答えて！ って、留守電じゃん！？」

「落ち着いてなのは！？ 一人でノリッコミしてるよー！」

怒りのあまりなのはが変になる。 というか、彼は留守電になんていれてあるんだろうか？

「ん？ もう一つ箱がある。 あ、おにぎりが二つ。 それになのはが好きな具だ」

もしかして彼かな？ というか彼しかこんなことする人いないけど、それにしても

「許すまじ……！」

「なのはさん、私のごはんどうぞー！」

「むしろ私をどうぞ！」

タイミングが少しだけ遅かったかも

5・たのしいお昼（後書き）

なのは（＃・・）

フェイト（＊・・＊）

弁当を開けたときの二人の表情

6 おっさんで遊ぼう（前書き）

今回のお話で行われる行為は絶対にマネしないでください

6・おっさんで遊ぼう

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツツコミをしている頃だと思う」

なんでわかるかって？　だつてなのはだもん。　バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。　そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。　昔はね、愛玩動物みたいで可愛かったんだよ？　いや、いまも可愛いけどさ俺のこと殴ってくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。　帰ったら怒られそうだけど俺のトークスキルでなんとかしてみよう。　まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。　中央には噴水、そこから東にちよつといくと大きな芝生の遊び場があつて、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。　いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持ってきたサッカーボールでリフティングを開始する。　コ　ンくんにも負けないぞ！

「しかしこのままリフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。　ストラックアウトというものをご存じだろうか？　9つのマスを野球ボールやサッカーボールを使ってぶち抜くゲームである。　一昔前に流行ったような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。　いまだ6枚抜き記録は破られていないらしい。　いまの俺なら9枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。　いったいどうしたものか。

「しょうがない、この前を通った人にぶち当てよう」

俺の餌食になった者は運がなかったということだ。　顔がバレないようにひょっとこのお面もつけることに。

一人目……女子高生

「推定膝丈20cm、生足をいかんなく見せており寄せてあげるブラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。　高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。　現役という肩書が大事なのだ。　高校を卒業してしまうとどうしてもコスプレにしか見えなくなる。　そう……なのはやフェイトのように。　女子高生とはいわば熟したリンゴなのだ。　アウトかセーフかギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。　それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフェイト、はやてたちがババアだと言っているみたいに感じるがそんなことはない。　線香花火が終わったあと

にやってくるのが打ち上げ花火だからである。いろんな人と出会い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人になるまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじりにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。それが終わつたあとに彼岸の川で待っているであろう夫の元へと逝く。お別れのときには沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上をみる。それはまさしく打ち上げ花火と同じじゃないか」

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはずだ。残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことができたというのに。あ、ちなみにフェイトの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かってサッカーボールをぶつけるのはためらわれる。もつとこう……ぶつけても怒られなさそうな人はいないものか。ん？ あそこにいるのおっさんじゃね？ いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。なにやら書類を手に持っているぞ。

いや、まてよ？ おっさんって管理局員だよな、日本でいう警察官みたいなものだろ？ そのおっさんに向かってぶつけるということ、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。ただでさえブラックリストにのっている俺だ。こんなしょうもないことで捕まるのはいただけない。それにおっさんには何かとお世話になっているはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶつけることなんてできるのだろうか？

「それでも 男にはやらなければいけないときがある。こんなことしたくないけど、食らえおっさん！ 死にさらせー！」

『うおッ！？　なんだいきなりボールが　』

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

全力で蹴ったボールは吸い込まれるようにおっさんの顔面へと熱いキスをしにいった。　おあついねえお二人さん。　ひゅーひゅー

俺はそのままダンス練習をしていた大学生の中に突っこんでいく

「ついに全国制覇だぞ、おまえら！」

『うおおおおおおおおおおおおお！！』

「次は国際大会だ！　てめえら、気合は十分かッ！！」

『よっしゃあああああああああ！！』

「おい！　その中学生、胴上げするからちよつとこい！」

「えっ！？」

ノリのいい大学生に捕まって胴上げされる中学生。　なんか忘れて
いるような気がするがいまはこの幸せな気分を味わっておこう

「みんなありがとう！　みんなのおかげで俺はここまでこれた！
本当、おまえらは最高の仲間だったよ！」

「……そうかそうか、よかったな最高の仲間ができて。　大切にしろよ？」

「うん！」

「いい返事だ。ところで、なにか重要なことを忘れている気はないか？」

「いや全然！」

「そうかそうか、それなら教えてやろう。貴様の現行犯逮捕の瞬間だ、ひよつとこ！」

振り向くと鼻血を垂らしながら怒りのあまり角が生えたおっさんが立っていた。おっさんいつの間に人間の皮を脱ぎ捨てたん？

「ごめんなおっさん、足が滑って」

「嘘つけ！ 貴様のセリフは聞こえとったわあ！！！」

「きゃあああああああ！ おっさんが俺のケツ穴を狙ってくるうつつつつつつつつつつつつ！！」

「逃げながらお前は何言ってるんだっ！？」

そこからはじまるおっさんと俺の追いかけっこ。残念だったな、おっさん。それでも俺は50m走で5・7を叩きだした男だぜ？

「待てといっておるだろうがああああああッ！！」

アメンボ走法で走ってくるおっさんに恐怖を感じた瞬間であった。

6 おっさんで遊ぼう(後書き)

へ(、)(ノ
)(ノ
ノ

おっさんの本気走り

7・MとMと ときどきSと

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかった。鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かったぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことをふりかえる。道行く人が振り返ってただこれからのおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。今日の夕食はなのはが好きなものにします。でないと俺の頭からザクロが飛び出してしまうからです。ごめんねフェイト。絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入っておりなのはのノリツッコミがはいつていた。これはパソコンのなのは専用フォルダにいれておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。愛用の地底人エプロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこそばと煮物でいこうと思います。では助手のミクくん、説明を」

「はい！まずは材料の説明です！ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。お酒とお塩に包むための大葉と一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。あ、ベツにカイワレはなくてもいいです。そしてちよつとしたスパイス

として黒胡椒やわさびをいれるのもありますね。湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるのですが、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしましょう！豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいですね。ミクには関係ないですけどー！」

「はっはーミクちゃん。そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」

「そ、そんなっ！ て、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていきますが、シンプルに大根だけにしときましょう。 ipp そのことふるふき大根にするのもありだな」

ふるふき大根にするためには米のとき汁が必要んだけどたつぷりの水と少しのお米で代用しちゃうおう。

「わんこソバは二人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも二人が帰ってきてから最終段階にはいれればいいからもうやることはないな。 久しぶりに靴磨きでしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。 とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。 正直俺も取るこ

とができなくて焦っているのが現状だ」

さっさと読んでおけばよかった。

しゅこしゅここと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。　どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりんこ」

「ただいまん　あっ！　くくく！！」

フェイトが顔を赤くしながらなのは胸に顔をうずめる。　フェイト、埋める人選間違えてるぞ。　あまりの可愛さに写メってしまう。　今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当どうだった？」

「ごめん、嫌がらせしか感じなかったんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもつと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ」

「人の話聞いてたっ!？」

「ごめん、フェイトの胸見てた。　ほんとムッチリしてるよな」

見かねたなのはが手に持ったバックで顔を叩いてきた

「スーハースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！ リセツシュ取って！！」

「うん！」

「ちょっ！？　なのはかけるとこ間違ってる！　俺じゃなくてバツクだろ、そういうときは！？」

俺の存在をリセットしたいとでもいうのかこいつは。

「わゝ！　なのはが好きな料理だ！　やったあ！」

「へ、へゝ！　あんた、この料理好きだったんだ。　わ、わたしはそんなの知らなかったし……ほ、ほんとうよ！　し、知ってたら……も、もっと早くに作ってたわよ……」

「だ、大丈夫？　無理しなくていいんだよ？」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほらほら！　二人とも早く食べようよ！」

「うん、そうだね!」

「それじゃ手を合わせて、いただきます」

「「いただきます!」」

みんなでしゃぶしゃぶすることに。

「そういえば、この豆乳にはなにか隠し味入れた?」

「俺の分泌液」

「「……」」

「いや、冗談だから二人とも咽喉に指つつこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだろう。

それから今日一日のお互いのことを報告することに

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだ。 犯罪者とかバツバツと捕まえられるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの?」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。 私はインタビューでるときなんていえばいいのかな?」

「とりあえず友達未満他人以上の関係ということにしておこうよ」

「なんで俺が報道されること前提で話し合いをしようとするの？」

報道される奴は俺から言わせれば一流に決まってんだろ。そんなへま犯すものか

「それにしても六課って明らかな人選ミスじゃね？」

「君は人生ミスだけどね」

「そのドヤ顔やめろ」

湯葉巻きを食べながらキリツとこちらをみてるなのは。ちよつと誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したということわかってるのか？

「それにしても今日は疲れたからお風呂入ってもう寝ようかなー」

「そうだね、私もちよつと疲れたかも」

「それじゃ俺は二人のベッド温めてくる」

席を立ったところで二人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。疲れはどこいったんだ。

「後片付け、お願いね」

「まかせろ、舌で丁寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしれない……」

「フェイトちゃん！ 変態がいるっ！？」

「こっちに振ってこないでよ！？」

そんなに力いっぱい手で払わなくてもいいじゃないか。

「まあ、いつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまうのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの？」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねっ！？」

「ちなみにフェイトはSね。 自慢のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フェイトちゃん……」

「ちょっとまってっ！？ いまの話信じる要素どこにあるのっ！？」

フェイトがムキーってなってる間になのはが足を引っ込める。 パンツみえた！ パンツみえた！ 速報！ なのはの今日のパンツは水玉！

「それじゃ風呂はいつておいで。俺は片付けしてベッドの周辺に盗撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願いね」

「ま……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよっ!？」

一歩ごとに後ろを振り返る二人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはいるかな」

これも立派な後片付けだと思っている。

7・MとMと ときどきSと（後書き）

どちらかというと、なのはがSでフェイトがMな気がする

8・コイキングなのは

ピピピピピッ ピピピピピッ

静寂な空間に電子音が響く。

ピッ ピピッ

自己主張をするように鳴り響く目覚ましは誰かの手によってその主張をかき消された。眠たげな眼をこすりながら高町なのは体を起こす。栗色の髪にいちごパンツが特徴の女性である。時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班に所属しており役職は戦技教導官。わずか19歳にして魔導師ランクSの優秀な魔導師であり誰もが認める管理局の誇るエースである。

「フエイトちゃん、起きて。朝だよ?」

「フエイトだと思った? 残念! ひよつとこちゃんでした!」

パキッ

「指がッ!? 指がああああああああああ!」

なのはのすぐよこでカメラを回していた男性。ベッドの中だといふのに器用にひよつとこのお面をつけているこの男性は、高町なのは・フエイト・T・ハラウン、八神はやてらの幼馴染である。

黒髪で人類史上稀にみるうざさが特徴である。高町なのは&フエイト・T・ハラウンが借りた家に所属しており役職は家事をすること。わずか19歳にして二人に寄生していないと生きていけない

く、ミッドで起こる小さな事件の大半の元凶を占めているミッドが嘆くエースである。

「あれ？　そういえばフェイトちゃんはどうしたの？」

「べつの仕事だつてさ。　なんでもロリコン宗教団体の弾圧に向かったとか。　だから朝早くから出て行ったよ」

「へー、そうなんだ。　フェイトちゃんも大変だね。　それじゃ今日は一人で仕事にいくのか？」

「ああ、そのことなんだけどはやてからの伝言預かった。　昼の1時から出勤だつてさ。　昨日買ったゲームをしたいから朝はいきたくないらしい」

「六課は大丈夫なのっ！？」

なのはの悲痛な叫びが木霊する。

「それはともかく朝ごはんできてるぞ。　今日はフェイトに合わせサンドウィッチにしてみた」

「やったー！」

寝間着姿のまま、なのはは1階へと降りて行った。

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱい吸いながら我が家へと帰宅していた。朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。あの宗教団体が私をみたときに呟いた『あと10歳若ければ……』という言葉は忘れない。そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま、二人ともいま帰ったよ。って、どうしたの？」

「お、フェイトおかえり。サンドウィッチどうだった？」

「うん！　すごくおいしかったよ！」

「おかえりフェイトちゃん！　……そろそろ答えてくれないかな？　君」

「え？　なにが？」

「とぼけた顔しないでっ！　なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いているのっ！！」

テーブルを思いっきりなのはが叩く。フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひよつとこのところまでいき後ろから画面を覗き込むことに

なのは / コイキング LV 31

「ぶっ！？」

「あ~~~~！ フェイトちゃんいま笑ったでしょ！」

「ご、ごめんねっなのはっ!？」

「う~~~~！ ふんっ！ どうせフェイトちゃんもわたし同様にへんなポ モンに名前つけられてるもんっ！」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどっ!？」

寝間着姿のままなのはが彼に抗議する。 あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。 もしかして不思議なアメかな？

「それよりフェイトは仮眠する？ いまだったらオプションとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。 そのオプションはいらないかな。 う〜ん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オッケーオッケー。 ほんじゃなのはをサクッと倒すからその間にとつてくればいいよ」

「ちょっとまって。 いまのは聞き捨てならないかも。 なのはだつてずつとやってきたんだからね！」

「いつけー、なのは！ はねる！」

「えッ！？ えっと……こう？」

「なにしてんの？ コイキングに決まってるじゃん」

「だましたねっ！？」

今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ？ 二人の戦いは終わったの？」

「うん、俺の圧勝で」

「コイキングを手持ちにいれてる人に負けるわたしって……」

どうやらフェイトがゲームを取りにいつている間に二人の勝負は終わったみたいだ。

「うわああああん！ フェイトちゃんああああん！」

「だ、大丈夫だよ！ 次は勝てるから！」

「わーーーーい！ フェイトちゃんーーーーん！」

「ちよつと、近寄らないでっ！？ いやあっ！？ 質量のある残像残しながらこっちにこないでっ！」

あまりの恐ろしさにフェイトは泣き目になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違いは大変遺憾に思います」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ！ もっと二人とも俺に優しくしてくれ！ パフパフさせてくれ！」

「願望が漏れてるよっ！？」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ！？」

二人で抱き合つてるとその差がわかる。ミルタンクにフェイトとつけてもよかったかもしれない。

「んで、バタなのがポ モンやる気なくしたので俺とする？ 大人のゲームする？ つるのムチとか使っちゃう？」

「普通にパーティーゲームしよっか」

「あゝ！ それじゃなのはマ オテニスしたい！」

なのはの提案でマ オテニスをすることに。

「あっ！」

なのは 右へ

ボール 左へ

「今度こそ！」

なのは 前へ

ボール 後ろへ

「サーブなら！」

なのは ダブルフォルト

ボール ジュゲム回収

「っ、次こそは！」

ガッ！ コードをひっかける音

ビターン！ なのはが転ぶ音

「……」

「もうやめるもん！」

「な、なのはっ！？ つ、次こそはできるから！ 私と一緒に手伝
うからっ！」

「こいつスポーツゲームできなさもSランク並みだよな」

フェイトに泣きつくなのはをみながら思わずそう呟いてしまった。
とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

8・コイキングなのは（後書き）

僕は9歳のころより19歳のほうが好きなんです、なかなか賛同を得ることができません。

9・高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと二人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「なのはさん、これお願いします!」

「はい。二人ともお疲れ様」

すると自分の部下であるスバルとティアナが二人揃って一冊のノートを持ってきた。なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書くためのノートである。ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャラが二人揃って出しにいつてるところであつた。もともとこの感想を企画したのは理由がある。それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などをこのノートを通してみることによつてちよつとした意見交換会の役割を果たせればと思つて企画したのだ。少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思つていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。それがなのはにとって嬉しいのかどうかは別問題だが。

それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。どんな小さなことでもしっかり答えてあげようと思ひながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください!』

ティアナノート

『なのはさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか？』

「余計なお世話だよっ！？　なにこの嫌がらせ！？」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながら、なのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは？　隊長がそんなことじゃ新人に示しがつかないぞ？」

「あ、ヴィータちゃん！　ちょっとこれみて！　新人に示すどころか盛大に心配されてるんですけどっ！？」

「どれ……。……大丈夫、なのはより小さい人もいるからさ」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどッ！？」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。ヴィータは成長することがない（ひよつとこ命名・ロヴィータ）ので永遠に10歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることになっている。俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「そういえばはやてちゃんはどうしたの？　見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友である八神はやての姿は確認することができない。六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボってしまう！』そう言ってここに机を置いたはずなのだが……

「ああ、はやてならゲームしてるけど？　なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！ みんなとか関係なくサボってるじゃんっ！？
なんで、ゲーム>仕事なのっ！？」

「違うぞなのは。ゲーム>>>「越えられない壁」>>>仕事
だろ。はやての中では」

「なんのために六課を設立したのさっ！？」

今更ながらまともな友人が少ないことに頭を抱えるなのは。

「もういや……なんで私だけこんな目に……」

「なのはさんが泣いてるっ！？」

「スバルっ！ なのはさんの涙をビンに詰めて！ 一滴もこぼすこ
とは許させないわよ！」

「わかった！」

「それでなのはさん、どうしたんですか？ なにか嫌なことでもあ
ったんですか？」

「現在進行形で起きてるよっ！」

ヴー！ ヴー！

そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。名前を確認すると
彼の名が。何事かと訝^{いぶか}しむが、とりあえず電話に出ることに。

「はいもしもし?」

『おお、なのは。唐突にバナナ・マンゴー・ランドを作ろうと思ったんだけど、どう思う?』

「うるさいよッ!」

携帯を床に叩きつける。

「お、落ち着いてなのはっ!? 深呼吸、深呼吸だよっ!」

駆け寄ったフェイトに抱かれながら、なのははゆっくり深呼吸する。

「ふう……ありがとうフェイトちゃん。フェイトちゃんだけだよ、なのはの味方でいてくれるのわ」

「そんな……味方なら此処にだって沢山」

「スバル……なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ」

「甘いね、私はイッたよ」

「どこにいるの? フェイトちゃん?」

「……ごめんね」

なにかを悟ったように笑う彼女にフェイトはそう返すしかできなかった。

リンディ・ハラオウンは大型デパートの地下食料品売り場にきていた。隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃん怒ってたけど、大丈夫なのかしら？」

「はっはっは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。俺となのはの仲ですよ？ 困難な事件に立ち向かった俺たちですよ？」

「ふふっ、よく覚えているわよ。プレシア・テストロッサにシャンパンファイトしたあげくアリシア・テストロッサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あときは死ぬかと思いましたね」

「いつそ死んでもよかったのよ？」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなっただけというものの、彼はこうやってよく買いい物に誘ってくる。大半は食材の買い込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。正直なところ、彼が下着売り

場に行くと言備が最大級にまで上がるのでこちらとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それより、クロノのほうはどうですか？ 最近会ってないですけど」

「エイミィと絶好調よ」

「明日速達でBL本を送りつけてやる」

「まって、なんであなたが持っているのか問い詰めたのだけど」

「それは聞かないお約束で」

この子はまったく変わらないわね。初めて会ったときもいまでも、変わることはない。フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過ごしてきた彼はある意味凄いのかもしれない。

「ちなみに今日の夕食はなにかしら？」

「そうですねー、フェイトが好きなドックフードにしようかと」

「人の腕とは簡単に千切れるものなのよね……」

「ごめんなさいリンディさんっ！ 冗談ですから、冗談ですから腕を引き千切ろうとしないでくださいっ！？」

やっぱり、彼に限ってそんなことはないか。

9・高町なのはの憂鬱（後書き）

こうみえても僕はシリアスとか書くの好きなんですよね。けどこの作品ってギャグじゃないですか？　これはいかんと思ひまして、この作品でもシリアスを取り入れようと考えたんです。

けどいくら考えても、”おちんちんランド”意外のネタが浮かばないんですよ。

あれですか？　おちんちんランドでシリアスやれってことですか？　銀　だってシリアス回ときには真面目にやってますよ。それすら許されないんですか？　どうすればいいのかわかんないです。

皆様の紳士力のおかげで10万PV超えました。　ありがとうございます。　しょうもない作品ではありますが、クスリと笑って頂ける作品にしていきたいと思ひます。

10・白パン大好き スカリエッティ

仕事が終わりに就寝前ののんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでた。これでも花も恥じらう19歳。いろいろと思うところがあるのだろう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいてもだつてよ？」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だつてよ？」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ？」

フェイトの疑問によつてなのはは考える。すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひよつとこのお面を被った男だった。のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれって人間なのかな？」

「分類上人間に入るかな。残念ながら」

ずっと傍にいた……というのかもしれないが彼は恋愛対象にはいらないのではないだろうか。だって無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。バレンタインのチョコとか女子全員から貰ったって聞いたよ？」

「そのうちの9割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけだね。あときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの1割は？」

「遠くからアンダースローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に日頃の恨みを晴らしてるだけなんじゃないのかな？」

「少しだけ不憫に思うフェイト。」

トントントント

そんなとき、2階から彼が降りてくる音がした。あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか？

「ご機嫌な蝶になったから、きらめく風につて彼女の元へといってくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」

「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によって疲弊しており、うんざりした顔で手を振った。彼も19歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。そう思って振り向いた先に文字通り蝶がいた。

黒の触覚に黒い翅^{はね}。鱗粉を真似ているのだろうかところどころラ

メがはいっている。口には曲げたストローを咥え、足には黒のニ

ーソ。どっからどう見ても360°全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのっ！？ 捕まる気満々じゃんっ！？
というかそれ私の二ーソだよねっ！？」

「なのはただだと不公平だと思ってフエイトの髪を結ぶリボンで蝶
ネクタイを作ってみました。 蝶だけに」

「そういう問題じゃないからっ！ いままで一気に不機嫌になった
よっ！」

「それお母さんに買ってもらったのに……。 ひどいよ！ あん
まりだよ！ もう捨てるしかなかったじゃないのっ！」

「そこまでいくのっ！？」

流星のひょっとこも驚きのあまり声を上げる。 フェイトは泣き目
でなのはによしよしされている。

「もういいもん！ 二人が構ってくれないから遊びにいくもん！
このペチャパイ！」

「それ個人攻撃してるよね！？ 二人じゃなくて一人に言ってるよ
ねっ！？ というかペチャパイじゃないもん！ ちゃんとあるもん
！」

「っ、捕まっても引き取りにきてあげないんだからねっ！！」

「はっはー！！ そこの二流と一緒にするではない！」

そっいつてひょっとこは勢いよく玄関から飛び出したのだった。

「とはいったもののすることはないんだよな、これが」

深夜の道を一人で歩く。歩きたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、触覚フヨフヨ、うざいことこの上ない。

「ん？ あそこにいるのは誰だ？」

ひよっとこからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面を被った男がウロウロとしていた。じきにその男は家へと侵入し、白のフリルつきパンツを手にとって頼ずりする。どっかみても変態である。やがて何かに気付いたかのように男はそつと家を出てひよっとこのほうへと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひよっとこは声をかけた。

「まちな、あんた」

「……なにかね？」

男は足を止める。　その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけないな。　何故その横にある縞パンを取らなかった。　白と水色で可愛かったはずだ」

「ふんつ、縞パンだと？　君は何をいつているのかね？　そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じているのか？」

「なんだと……！」

ひよつとは思わず距離を詰める。　蝶ルックスで

「君のような者がいるから時代は足を前に出しあぐねているのだよ」

「ほう……その言い方。　まるでお前が時代を先取りしているかのような口ぶりじゃないか」

「当たり前だよ。　それでも私は天才なんだ。　時代を読むことなんて動作もないよ」

黒コートの男は一步詰め寄る。　白パンツを手を持ったまま

「何を言ってるんだ。　縞パンはその人自身を若干幼くさせ口元に魅せる効果があるんだぞ。　白パンときができると思っているのか？」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかっていない。　純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかっていないようだ」

「ふんっ、まだそんな段階とはな。その段階ならば俺は5歳のときに幼馴染がおねしょをしたことによって到達しているぞ」

「幼馴染……だとッ!？」

男の目の色が変わり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がッ！ モーニングでは勝手に自分の部屋にはいつてきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がッ！ 一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちょっと可愛い子に目がいつてると膨れっ面になって怒ってくる幼馴染がッ！ 夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の営みまで逝っちゃう幼馴染が君にはいるというのかねッ！」

「はっはっは、うらやましいか？」

「うらやましい!!」

なんとも素直な男である。しかしながら、この男が彼の現状を知ったらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、ここらへんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。あなたのような人がいるとは、あなたとなら趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもって同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなってくる。

「そういえば、あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「私の名前は、ジェイル・スカリエッティだよ。みんなからはアンリミテッドデザイア、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい？」

およそ正解とっていいのではないだろうか。

「して、君の名前は？」

「俺は正義のヒーローですからね。名前は伏せています、みんなからはひよつとこと呼ばれていますね」

「ひよつとこくんか。それではひよつとこくん、ともに道を極めていこうとではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そついつて、二人は固い握手を交わす。決して途切れることのない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。

「よかったな、ひよつとこ。お前にも友達ができて」

「それに趣味も合ってるからな。さて、今日は思いもよらない収穫もあったし俺は帰ることにするよ」

「そうかそうか、なら　ちょっと交番でお茶でもせんか？」

「おっさんって忍びの家系だったわけ？」

『はい、もしもし。　高町ですけど』

「あ、なのは？　俺だけど……」

『ん？　なんで家の電話？　って、携帯置いていったのか。それでどうしたの？』

「いや……うん。　大変言いにくいことなんだけどさ、交番まで迎えに来てくれないかな？」

『さよなら』

「まってええええええええええッ！　お願いだから電話を切らないでええええええええええ！」

深夜の交番にひよつとこの声が木霊する。

どうしてだ……一流の俺が二流のような失敗を犯すとは……！

隣にいる友、スカリエッティに目を向けると

「あ、ウーノかい？　そう、そうなんだ。管理局の人に捕まっ
てしまっ
てね。え？　いやいや指名手犯だからとかじゃないんだけ
どさ。えっと……白パンツを盗んじやって。あ、待ちたまえっ
！　ウーノ、これには深い訳があるんだっ！」

「パンツを盗むのに理由もなにもないだろう」

「そして俺が捕まったのにも理由はないんだがな」

「お前は存在するだけで理由になるからいいんだよ」

「……世界が俺の敵というわけか」

そんなこんなでおっさんとお茶を飲みながらまったりと過ごすことに

「どうもうちのバカがご迷惑をおかけしました」

高町なのは目の前にいる男性に深々と頭を下げた。連絡がきてから1時間。本気で来たくなかったのだがもしこなかったら交番の人にどれだけ迷惑をかけるか分かったもんじゃないので、嫌々ながらも引き取ることに。ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらで慣れたもんですからね。ただもう少しおとなしくなってくればこちらとしてもありがたいものですよ」

「とか言っちゃって、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろ？」

「黙ってて」

「ぐふうつ!？」

なのはのヒジがひよつとこのミゾに入る。体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでいる幼馴染を冷たい目で見ながらもう一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あの………すみません。私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまったようで………」

「いえ、こちらでドクターがそちらに迷惑をおかけしたようで………本当にすいませんでした」

「まともだっ! まともな人にやっと出会えたような気がするっ!」

「？」

女性の対応になのはは感動して手を取る。 目にはすこしだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があったのかわかりませんが、その……頑張ってください。 えっと、これも何かの縁ですし、お互いの連絡先でも交換しますか？」

「是非！」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「えーっと、ウーノさんですか。 なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、そちらもなのはとは可愛らしいお名前ですよ。 あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるほどの素質をもっていますからね」

「話に加わってこないでよっ！？」

「いや、さびしいじゃん」

「後で付き合っただげるからっ！」

「そんな……こんなところで告白なんて……」

「どんな思考回路してたらそうなるのっ!？」

いつきにペースを乱され憤慨するのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか？　なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『……せつかく取ったパンツなのに……ウーノ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。　それとパンツのほうはこちらで弁償することになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひよつとこくん……今日はもう立ち直れそうにないから話はまた後日にしよう……」

「お……おっ」

ひよつとこが軽く引くくらい意気消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか」

「とりあえずニーソは弁償してよね？」

「わかったよ。　それじゃこのニーソは俺が責任をもって処分してくよ。　……なのはのニーソ……ハア……ハア……」

「もう嫌だよ、この幼馴染っ!？」

きっかり二一ソを回収しながらのはは交番の前で叫ぶのだった。

10・白パン大好き スカリエッティ（後書き）

スカさん書いてて楽しいです

11・円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん？ どうしたのいきなり電話なんかしてきて？」

『うむ、ちよつと遊びにこないかと思ってさ。 君が喜びそうなものがたくさんあるぞ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。 内容は自分の家に遊びにこないかという誘いであるのだが、いまからエッチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あゝ、ごめんね。 いまから大事な用事があつてだな」

『その用事とはよもやエッチなビデオを視聴することではないかね？』

「スカさん、エスパーになれるよ。 アンタ」

『ふつ、君の思考回路からすればそんなことだろうと思っていたよ』

どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。 普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエッチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言つて、スカさんは電話を切った。

「いやいや、ス力さんの家の場所わからないって。……しょうがない、全知全能森羅万象の理を操るGoogle先生で調べるか」

「すいませーん、ス力さんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしておりました。こんにちは、ひよっこさん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること10分、あっさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。それでもバイクの免許持つてるんだぜ？ おっさんはねたりしてるけど。華麗にキリモミしながら飛んでいくおっさんはなんでいまも生きてるのか不思議でたまらない。

そして俺のことを出迎えてくれた女性はウーノさん。とっても優しくいい人みたいだ。（なのは談）ただ、こういう人ほどベツドで乱れると凄かったりする。

「ウーノさん、俺と一発やりませんか？」

「ごめんなさいね、私はドクターだけのものなの」

「スカリエッティ、出てこいやゴルアアアアアアアアアアア
ツ！」

いもので俺の中の何かがキレた。

俺がいろんなものに八つ当たりしていると、奥のほうからス力さんが出てきた。

「ちょッ！？ やめたまえッ！ そこらへんには私がウーノに内緒で隠した秘蔵の工口本がつッ！」

「ドクター、ちょっとお話しを伺ってもよろしいでしょうか？」

「ち、違うんだウーノっ! ? いまのは言葉のあやというやつでッ! ? 」

「あ、発見。とりあえず没収な」

スカさんがウーノさんにフルボツコにされてる間に秘蔵の工口本を
読むことに。スカさん、さすがにふたなりはどうかと思うよ？

「よくきてくれたね、我が友よ。それにしてもよく来られたね。
家の場所を教えてないというのに」

「G o o g l eで調べたよ」

「家の情報ダダ漏れではないかッ!？」

なにやらスカさんが慌てた様子でパソコンにつけ、何かを操作しは
じめた。 案外せわしない人なんだな。

「それでスカさん、なにをみせてくれんの？ もしかしてあの秘蔵
のエロ本のこと？ だったら持って帰るからもういいよ」

「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。 返してくれ
ないか？」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができると知ったいま、俺はスカさんに容
赦などしない。 つい先日男と男の約束をした気がしないでもない
けど。

「こっちはエッチなビデオ見ながらなのはやフェイトの下着を嗅い
で自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がいまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちゃんの方が縁を切ってもよさそうですね」

「二人に寄生しないと生きていけないからな。二人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。どうだ、うらやましいか？」

「誇ることではないぞっ!？」

「あなたのためにマダオという言葉がある気がします」

マダオ「まるでダメな男

「ま、まあ、いいだろう。それで今日君を呼んだのはほかでもない。これを見てくれないか？」

「ふにやちんですね」

「そこではないわっ!？」

そういつてスカさんは何かのスイッチを押した。すると大きな鉄の扉が開けられる。どうやら格納庫のようだ。ちょっとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があった。なんだこりゃ？

「驚いたかね？ これはガジェットドローンといってね。私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたしたらここまでのものが完成するのか。

格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。

「うつわ、ちょっとこれ面白そうじゃん！ スカさん遊ばして遊ばして！」

「あ、これっ！ こころへんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそこらへんを変に触ったら……」

ポチッ

ゴゴッゴゴゴゴゴゴッ！！ ガジェットたちが自爆する音

「……」

「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。円環の理に導かれて……」

「導いたのは君だろうッ!？」

スカさんが泣きながら訴えてくる。

「どうしてくれるのだっ！ 私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて！」

「まあまあ落ち着けよスカさん。ほら、エロ本やるからさ」

「それはもともと私のだろうっ!？ なに君が家からもってきたみ

たいになつてゐるんだっ!？」

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盗撮した秘蔵のファイルをあげるからそれで許してくれよ」

「……さっきの件は見なかったことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし？ 警察ですか？ ええ、ここに二人ほど変態がいるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「「やめてくださいっ!？」」

ウーノさんが連絡した直後、おっさんがものすごい速さでこちらに向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなっているんだっ!？」

「スカさん、おっさんの前ではそんなもの無意味に等しいっ! こは自力で逃げるしかないぞっ!」

「化け物にもほどがあるぞっ!？」

「おいっ!？ おっさん多重影分身してないかっ!？」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおっさん。 この人は管理局の影のエースと呼ばれているに違いない。

11・円環の理に導かれたガジェットドローン（後書き）

次話はちょっとシリアス風味にしていこうと思います

12・墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……………」

カシャカシャカシャッ！

「……………」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？ もうなくなったの？ ちょっとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより二人とも仕事してよッ！？　なんで上司の私が仕事してる横で平然と写真撮ってるわけっ！？」

「なのはさん！　その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、こっちにもお願いします！」

「フンガーッ！！」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。　今日も六課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。高校時代に、ひよつとこと色々やらかした伝説がある女性だ。はやては横でペロペロキャンディを頬張っている自分の家族であるロリっ娘ヴィータに話しかける。

「そういえば、スバルはなのはちゃんに助けられたからあんなに慕ってるのはわかるけど、ティアナはなんであんなに懐いとるかしつとる？」

「いや、全然。大方なのは萌えとかの狂信者じゃない？ ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういやおったな、あの変な団体。絶対に接触することなくなのはちゃんの危険になる存在であろう者たちを排除する、あの意味管理局の負の遺産やな。けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」

「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流石はミッドが嘆くエースだけある」

思い浮かぶのはなのはのパンツやフェイトのブラに命をかける男の姿。

「それにしても気になるな……」

はやてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやあああああッ!? ちょっと、それ私のリップ!?」

「か、間接キスに……！」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうだなによりやな」

はやては眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけようと写メをとった。

翌日

ティアナ・ランスターは一人なのはを待っていた。今日の服は黒の服に黒のタイトスカートというおよそ六課では似つかわしくない服装である。若干緊張気味に自分の上司を待つティアナのもとにコツコツと一つの足音を響かせながらとある人物がやってきた。

「あ、ティア。きょうは早いねって……その服装は？」

「あ、なのはさんおはようございます。その……今日はどうしても外さない用事があった」

そこまで言うとなのは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「そっか……月日が経つのは早いね。 うん、わかったよ。 あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね?」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆっくりと広がる。 そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後にした。

タクシーで目的地に着くまでの間、ティアナは昔を思い出す。 自分が変わった日のことを、なのはに出会った日のことを、そして兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えて
いる。そして変わることはない情報を前に崩れ去ったことも覚えて
いる。そこからはまるでタイムワープしたかのように一瞬に何
もかもが過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。しかし墓の
中にはいつている兄は可愛い妹の声に反応することはない。どん
なに呼んでも叫んでも自分が狂ったところで、兄ティード・ランス
ターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。自分
の頬から伝わる雫が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。

ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こ
えてきた。

「情けない」

その一言で関を切ったかのようにさまざまな人たちが兄に言われも
ない罵倒をしだした。なかには諫めようとした者もいたが、しか
しながらその全てが無駄に終わる。腹が盛大に出たいかにもな男
性がその全ての言葉をかき消すのだ。ティアナは幼いながらも悟
った。この人がこの中で一番偉い人なんだろうと。誰もが彼に
逆らえない。場を収めようとした男性もいまは黙って唇をキュッ
と結んで耐えているだけであつた。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとき、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませ〜ん。 ちょっと通してください。 あ、ダメッ！ そんなところ揉んだらアヒンツ！ おっさん、いい趣味してるじゃねえか……。 なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んどらんわ！？ いまの一瞬で私の地位を落としたことがわかってるのかね！？」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年はどこ吹く風で笑っていた。端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティード。 期末試験受けてる間になに死んでんだよ、ダッセーな。一緒に酒飲める年齢になるまで待ってくれるんじゃないのかよ……」

それはそこにいるもの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。ドボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へとゆっくり浸透していく。 やがて半分ほど減ったところで少年は注ぐのをやめ、かわりに自分が呷りあお

「おえッ！ 俺酒飲めないんだ……、おじさんその服かして……」

「ま、まちたまえっ！？ もう少し我慢するんだ、すぐにエチケッ

「ト袋をもってくるから！」

「もう無理……」

[illegible]

恰幅のいい男性の服の中にむかつて盛大に吐いた。

それから阿鼻叫喚の図であった。男性は急いで帰るし、それに付き従う形で参列者は帰って行った。何人か貰いゲロした人もいた。

「さて…… スツキリした。 士郎さん、 もっと度数が少ないのくだ
さいよ……」

「あの……」

「ああ、こないほうがいいよ。俺ゲロったから、臭いきついと思うし。それよりそこのおっさんは帰らなくていいの?」

少年が問いかけた先には、先程一人だけ場を鎮めようと頑張っていた男性がさっきと同じ位置にかかわらず立っていた。

「此処に市民がいる限り、俺はこの場を動くつもりはない。それより水をやるから口をゆすげ」

「おっさんが利くじゃん」

「おっさんじゃねえよ、まだ若いに決まってるだろ」

やがてこの二人がミッドの名物追いかけっこの主役を演じる二人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ」

その言葉に男性は答えない。 答えることができない。 少年もそれをわかつているのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……！」

「ん？ お、すまんすまん。 つい話し込んだじゃった」

少年はティアナの頭に手を乗せる。 そして子どもをあやすようによしよしとする。

「俺はティードにお世話になった身でさ。 ビックリしたぜ……いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。 違法魔導師との交戦でさ」

「そっか……」

「ちなみにどんなお世話になったんだ？」

「パンツ盗んだときにちょっと」

「お前これ終わったあと、交番までこい」

「そんなあっ！？」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティーター人だけ。

やがて少年は墓の前にどっかりと座りこむ

「なあ、嬢ちゃん。お兄ちゃんは好きか？」

「……はい」

「そっか」

隣に座ったティアナは小さく答えた。

やがてぐすぐすと小さな嗚咽が辺りを支配する

「悔しいか？ 大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」

「悔しいです……！ ものすごく！ お兄ちゃんは、優しくて強くて！ 私の憧れの人で……」

「俺もだよ。あそこでおどけてなかったらあいつらぶちのめすところだった。でもさ、そんなことティータは望んでいないんだよな。それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？ 言っとくが、俺が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。そんなことしたら、俺が幼馴染に殺される」

「……私は一人で生きていきます」

「金は？」

「なんとかします」

「一人はさびしいよ?」

「大丈夫です」

「今日のパンツの色は?」

「おまわりさん、この人です」

「おう」

「冗談ですからっ!?! 手錠取り出さないでくださいよっ!?!」

少年は慌てたように男性を静止させる。

「私……」

「ん?」

「私、大きくなったら管理局に入って……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……! 執務官になって……見返したいです!」

ボロボロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。

「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです!」

「いい心意気じゃねえか。 だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才つてのは99%の努力と1%の才能で成り立っている。それに引き替え凡人つてのは100%の努力で成り立っているものだよな」

「……そうですね」

「だったら、120%の努力をすればいいだけなんだよ。10%の才能をもつ奴には200%の努力をすればいい。50%の才能をもつ奴には1000%の努力をすればいい。100%の才能をもつ奴には10000%の努力をすればいいのだけの話なんだよ。理論上はこんな簡単なことなんだ。単純明快、ゆえに難しいんだだけだな。そもそも上限が100%なんて誰が決めたんだよ。そんなもん100%までしかできなかった奴が決めたことだ。俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくならないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどけることが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちよつと挑発する。

「できますー!」

その挑発にティアナは大声で宣言した。少年がニヤリと笑う。そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。もうなのはケーキだけタバスコ味に

したでしょっ！……っで、これは」

「よお、なのは。前に話しただろ？ ティーダさんのこと」

たったそれだけでなのははすべてを悟ったように深く頷いた。

「そっか……大変だったね」

「へっ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそっと抱きしめる。それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かった。なのはは抱きしめたまま、そっと自分のもっていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちゃうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かったなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊第5班 一等空尉の高町なのはです。故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハッ！ 時空管理局 首都航空隊 一等空尉 ティーダ・ランスターであります。死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。なお、犯人は捕まった模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいうと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！ ティーダ・ランスターに敬礼！」

「……え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！ あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！ ほんとうに、ありがとうございます！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かって真剣な表情で敬礼する。

そのことが嬉しくてティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから10分後、二人が帰る時間がやってきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの……」

「ん？」

「ティアって呼んでくれませんか……？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言っている

「うん！ それじゃバイバイ、ティア」

なのはひと撫でて立ち上がった。傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアナをみていた。

「お前つて、天然ジゴロにもほどがあるよな。まあ、それはさておき嬢ちゃん ガツカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰って行った。

これがティアナ・ランスターの記憶

全てが変わった日の出来事である

「お客さん、到着しましたよ？」

「あ、すいません」

過去を振り返っている間にどうやら目的地にはきたようだ。　　ティアナはタクシーを降りながら思う。

初恋の人は？　　そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろう。

一番の親友は？　　そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジマと答えるだろう。

一番会いたい人は？　　そう聞かれたら兄のティード・ランスターと瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になっている人は？　　そう聞かれたらティアナは、思案顔になりながらあの日に会った少年と答えるだろう。

あれから一度も会っていないのだ。　　しかしながら毎年毎年、ウイスキーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれることはわかる。

コツコツコツ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声が聞こえてきた。

何事か？　　そう思いながらティアナは少し足を速めたどり着いた先には

「悪霊退散ッ！　　悪霊退散ッ！」

ひょっとこのお面を被った男性が兄の墓に向かって塩を投げつけて

いた

「なにやってるんですかーーーーっ!?」

「おうわっ!？」

男性は驚き大きくのけぞる。 ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかつ! 訴えますよ!」

「ち、違っただよっ! スカさんから貰ったスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しようと思って」

「その前に私があなたを退治しますよっ!」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした〜……嬢ちゃんと鉢合わせするなんて」

「え?」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかった。

「あ、俺そろそろ行かないと。 スカさんとマ オカートする約束なんだよね」

「……へ?」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナ

から抜け出し来た道を戻る　　寸前でふと何かを思い出したように
振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？　あのとときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の
少年と重なった。

いまでも少年は心配しているのだ。　きっと、これからも心配する
のかもしれない。

だからこそ　　いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ち
を持っているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！　とっても幸せです！」

兄は失ってしまったけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒
にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そっか。　まあ体のほうはいまだガツカリボディだな」

「なっ！？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の
前から姿を消した。

「なんか……かわってないなあ」

「あれ？　ティア、まだしてなかったの？」

「あ、なのはさん！」

青年が消えたところから、大好きなのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしいって頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよ」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ？」

「あつ……そうなんですか」

というかこの人、さらりと幼馴染をヒドイ扱いしなかった？

「それより、ティーダさんがティアの報告を聞いたそうにまってるよ」

「あつ、そうでした！」

そうしてお墓の前でなのはさんと二人手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか？

私は元気でやっています。　かけがえのない親友と、好きな人。

厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。　いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。　だから、だから安心してください。

あなたの妹は、10000%の努力で頑張っています

カランッ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしゃぐ声
が。

12・墓前に捧げる一つの酒（後書き）

読了時間もいい具合なのでここで一つ真面目な話を

13・六課へおでかけ！

『ユーノ、飯食い行こうぜ！』

『うゝん……行きたいけど仕事で忙しいんだよねー』

『まじか……お前が欲しがってたケモナー御用達の写真集を手に入れたんだけど』

『命に代えても時間を作ろう』

「さすがユーノ、話しの分かるやつが友人で助かったぜ」

なのは達が仕事にいつている間に、暇だったのでユーノとメールすることに。ユーノは管理局の無限書庫で働いているエリートだ。そして俺は自宅警備のエリートだ。

「ひょつとこ君、ユーノ君とはどのような人なんだい？」

「えゝつと、ケモナーですね。小さい頃に俺が色々調教してたら変な方向に進んでました」

「ふむ……なかなか興味深い」

家に遊びにきていたスカさんがお茶を飲みながらそう呟く

「というか、スカさんは何しにきたの？ 言っとくけど、なのはのパンツとかフェイトのブラは俺のだから渡さないよ？」

「いまのセリフがどれほど矛盾するセリフかわかっているかね？」

「ドクター、人のこと言えませんか？」

ス力さんの横で紅茶を飲んでいたウーノさんが冷ややかな声で言う。
「どうしてス力さんにはウーノさんのようにきれいな人が振り向いているのに俺の場合はなのはとフェイトに魔力弾を撃たれているのだろうか。」

「それにしても暇ですね」

「暇だね」

掃除も洗濯も終わったのでやることがない。ポ モンのほうもあまり進め過ぎると二人が怒るし。 はっはっは、可愛いやつらめ。
俺がネタバレしまくったせいだろうけどな。 そういえば、フェイトにネズミをペンキで黄色にしてピカチューと嘘について誕生日プレゼントにあげたことがあったな。 バレてリンディさんにフルボッコにされたけど。 あまりにもボコボコにされたんでクロノは怒る気がなくなって逆に介抱してくれたっけ。 誕生日といえばアレだ。 なのはの誕生日ケーキにオリーブオイルかけまくって出したら美由紀さんが横から掠め取った事件もあったな。 あれ取った美由紀さんが悪いのにボコボコにされたし。

「……おれ、ボコボコにされた記憶しかないんだけど」

どうなってんだ、俺の記憶

「お暇でしたらなのはちゃんが務めているという仕事場に行かれては？」

「「それだッ！！」」

ウーノさん、ナイスアイデアですよ！　いまのいままで気付かなかったけど、俺はなのはやフェイトの仕事場に行ったことがなかった。これは……幼馴染として行っておく必要があるのではないだろうか！！

「そうときまれば早速電話しょ」

携帯を取り出しはやてに電話をかける。

『ぬーべんどらすていーら？』

「あいぬすとんぺりいーや」

『久しぶりやな、宇宙一のバカ』

「久しぶりだな、銀河一のアホ」

「いやいや、まちたまえっ！？　その前の不思議な呪文はなんなんだっ！？」

隣で聞いてたス力さんが指を突き付けながら問いただす

『ん？　なんや、誰かおるんかいな？』

「んー、友人がな」

『どんな関係なんや？』

「なのはとフェイトの関係かな」

『それは大変やで』

「いったい、はやての中であいつら二人の関係はどうなっているんだろうか？」

『それにしてもどうしたんや？ わたしいま仕事してんねん』

「はやてが仕事してる……だっ！？」

「おいおいおいおいおい、冗談は変態性だけにしとけ。 部隊長が嘘なんてみつともないぞ？」

『ほんとうにしてるんやって。 シグナムの喘ぎ声を編集集中や』

「zipでくれ」

『だったらなのはちゃんとフェイトちゃんのパンチラ画像と交換やな』

「くっ……！」

あの二人を人質にとるとは……いい度胸してるじゃねえか……！

「あの……ドクター。 何故彼がそんな画像もっているのかは訊いたらいけないのでしょうか？」

「彼だからだよ」

その二人、うつさい。

『まあ、シグナムの喘ぎ声はちゃんと送るで。それよりどうしたんや？ 捕まったん？』

「お前らつて、俺見るたびにそれ聞くよな。そんな頻繁に捕まるわけないだろ」

といいつつ、この頃のおっさんとの勝率はそこまで誇れるものじゃないのが現状だ。 どうしたものか。

「まあいいや。 いやまあさ、今日友人と六課に遊びにいかうと思ってるんだけどいいかな？ ちよつとサプライズ的な感じにしたい」

『サプライズ？ どんな感じで？』

「俺がニップレスだけ装着した状態で登場するとか？」

『うちは友人を一つなくすんやな……』

「一つと言ってる時点で友人のカテゴリーから逸脱してるだろ」

『性奴隷？』

「いやらしい牡犬ですっ！ 思う存分ぶってくださいっ！」

まあ、なんとか六課へ行く許可は下りましたとき。

八神はやては耳から携帯を離し終了ボタンを押した。

「ふう……久しぶりやなあ、アイツと会うんわ」

「ただいま〜！ ケーキ買ってきたよ〜！」

「おっ？　なのはちゃん、ちょうどいいところに」

ジャンケンで負けてケーキを買いに行っていた高町なのは他多数が帰ってきた。ちなみに六課は訓練0.5割、あとは好きなことと適当に書類仕事をする事になっている。何かがおかしい気がするが現状で外からの不満も内からの不満もないのでこれでいいだろう。そのかわり一人一人が訓練してくれるのはやフェイト、ヴィータやシグナムに質問しているようだし、なんとかなるだろう。

「ん？　どうしたの？　はやてちゃんが頼んだパフェならスバルがたべちゃったけど……」

「スバル、四つん這いになりいや」

「なにする気ですかっ!？」

愉悦を含んだ表情のはやてを前にしてスバルは恐怖を覚えなのはの後ろに隠れる。

「助けてくださいなのはさんっ!」

「そついいながら胸揉まないでよっ!」

わしづかみしようとするスバルの手を振り払う。

「おゝい、なのは。あとがつつかえるから早く入ってくれよ」

「あ、ごめんね。ヴィータちゃん」

後ろのヴィータに言われてようやく部屋に入る。その後ろからゾロゾロと新人や副隊長陣も。まるでカルガモ隊みたいだ。

全員が入って、席に座りシャルとなのはで人数分の紅茶を配り各々選んだケーキを食べ始めたところで、なのはがはやてに先ほどの続きを促した。

「それではやてちゃん。さっきの話なに?」

「いやあね、なのはちゃんとフェイトちゃんに会いたいつて人がいるんや」

「え? 私にも?」

チョコレートケーキをエリオとキャロにあげていたフェイトが驚きながら振り返る。

「そうそう、ちなみに男性やで」

「「男性ですとっ!!」」

男性の単語を聞いた瞬間にスバルとティアが席を立つ。

「ダメです、純粹で純白なのはさんに男性なんて似合いません！」

「そうですよ、なのはさんはランスターの名を継ぐんですから!!」

「継がないよっ!?! いつの間に決まってるのっ!?!」

「そ、それで……なんで急に?」

フェイトが少しだけ視線をキツくしてはやてを射る

「いや〜……うちは拒否したんやけど相手側が聞かなくて……うちの権力ではどうすることもできなかったんや……」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

顔を伏せるはやてになのはとフェイトは近づいてそっと抱きしめる。

「ごめんな、二人とも……」

「大丈夫だよ。相手側には私とフェイトちゃん断るから」

「うん、大丈夫だよ」

「そうですよ、なのはさんに何かしたら私とティアがぶちのめします!!」

その瞬間、部屋にいる皆の心は一つになった

「ちなみに、その人の職業はなんなの？」

「やっぱり、はやてより権力強いならそうとうだね……」

その二人の問いかけにはやては軽く涙ぐみながら答えた

「性奴隷や」

「「それ職業っ!？」」

その瞬間、部屋にいる皆の心は恐怖でいっぱいになった。

13 六課へおでかけ！（後書き）

ひょっとこはついに職に手に入れたのだった

14・コイキングの本気

機動六課 それは八神はやてがあらゆる知人の後押しによって作られた少数人数で動ける精鋭部隊である。SSランクの八神はやてをはじめエースオブエースの高町なのは、その相棒とまで言われているフェイト・T・ハラオウン、一騎当千の力を持つといわれる守護騎士などなど、おおよそ通常では考えられない高ランクの面々が揃っている。まさに管理局のエース部隊であり、看板ともいえるであろう。

というのは、建前であり実態は180。違うものだ。まず機動六課の立ち位置というのは一言でいえば“萌え担当”である。世界というのは驚くほど広く、その広さの分だけ犯罪は絶えない。そうするとどうだろう？ お偉い人たちは毎日毎日眉間に皺しわを寄せ、空気は悪くなるばかり、局員も人員不足によって疲労困憊のブラック企業並みの勤務時間。あぐくのはてには管理局員の身でありながら違法行為に走ろうとするバカも出てくる。

だがしかし そんな管理局にも楽しみというものがある。それが六課の部隊長である八神はやてが週一で発行する六課の新聞

『乙女の秘密を覗いてみよう』

である。何故週一かというと、単純にはやてが面倒なだけである。ちなみに六課の人達は知らない。理由は簡単、怒られるからである。ふざけている？ そう思う者もいるかもしれないが、これを取り入れたことによって管理局の中も大きく変わった。まず肥えただけのデブのお偉いさんの顔が優しくなっていたのだ。そしてダイエツトするようになった。後者はどうでもいいので前者

のことだけ述べると、激務の最中、ちよつとうたた寝してしまつたせいで書類が終わつてない管理局員Aさんは叱られるの覚悟でお偉いさんの所へと向かう。するといつもは怒鳴つてばかりのお偉いさんが菩薩のような笑みで失態を許し、あるうことかAさんの仕事すらも引き受けたのだ。お偉いさんの心境としては娘が頑張っているのだから、自分もがんばろうとかそんな感じだろう。

それだけではない。絶体絶命でいまにも瀕死の局員が新聞読みたさに生還してきた、なんて事例もある。

それに伴い犯罪者逮捕率はうなぎ上りだ。

さあ、ここで問題になつてくるのが当事者というか被害者になつている六課の面々なのだが、管理局員の全員が暗黙の了解・約定としてこう血判してある。

『イエス六課・ノータッチ』

たまたま出会つたときには話してもよい。しかしながらその体に触れた瞬間、社会的抹殺と身体的抹殺の二つがまっているということだ。そして驚くことに全員がこれに納得している。

本当に管理局は大丈夫なのだろうか？

「だ〜から〜、俺たちははやてから了承貰ってるんだってば！
このすつとこどつこい！」

「そうだね、私たちは正式な客人として招待されている身だよ。
君は門番程度の権力でたてつこうというのかね？」

「いや、ですから……そのお面を外していただかないかぎりにも
中へ入れることができないわけでありまして……」

目の前で繰り広げられている光景を見ながらウーノは溜息を吐いた。

正直なところ、この門番の言っていることは正しいと思う。

上半身裸でニップレスをつけた状態の男と白衣を着て頭に紙袋を被
った男を六課の敷地に通すのはとても危険すぎるだろう。

「なんでだよ！ズボンだつて履いてるだろ！」

その調子で服も着てくれるとありがたいのですが……

「いや、それはわかっているのですが……ここはあの有名な六課で
すので次元犯罪者が来る可能性も……」

「何を言っているんだね、君は。わざわざ管理局に突っこんでい
くバカな次元犯罪者がどこにいるのかね？」

ドクター鏡みてください。

ワーワーギヤーギヤーと騒ぎ立てる二人を横目にウーノは携帯を取
り出す。

「あ、なのはちゃんですか？　いま六課の前にいるんですが」

「えっ！？　俊くん六課に来てるのっ！？」

ウーノから電話をもらったなのはは思わず普段は口にしない幼馴染の名前を口にだした。

「なのはちゃんがあのバカの名前言うなんて……よっぽどのことやで……」

長年一緒にいるはやては冷静にそう認識する。　普段は名前すら言わないのだから。

そんなはやてをよそに慌てた様子でなのはは部屋を動きながら早口で電話の相手と話す。

「えゝ……ちよつと本当に困るってば……」

『すみません……私が提案したばかりに』

「えっ！？　いえいえ、ウーノさんなら大歓迎なんですけど……あのバカだと何やらかすかわかったものじゃなくて……」

なのはは、うゝん、と唇をとがらせて考える。

「ちなみにいまなにしていますか？」

まあ、六課の警備は厳重だからおとなしく待っているとおもっけど……

『警備員殴って侵入したところです』

「本物のバカがいたっ!？」

なのはの叫び声と同時にけたたましく警報が鳴り響く

「え？ え？ なになに、どうしたの？」

「いやいやフェイトさん、呑気に紅茶飲んでは場合じゃあないですってばっ！ 誰かが六課に侵入してきたんですって！」

クッキーを食べつつのんびり紅茶を飲んでいたフェイトにスバルが叫びながら答えるのだが

「うーん……なのはが指鳴らしてるから大体侵入してきた人はわかるかな。まあ、のんびりと紅茶でも飲みながらみてるといいよ。私となのはがお世話している相手がくるところから。……それより、なのはと私に会いたって人遅いね。一刻も早く断りたいのに」

そのはやてが言った男性が警備員を殴って侵入してきたバカだと知ったらフェイトはどうするのだろうか。

「は、はあ……お世話ですか？」

「うん、お世話かな」

納得したような納得してないような表情で頷くスバル

その時、やけに慌てたような声と足音。その後ろから何かを叫ぶふたり分の声が届いてきた。

なのはに視線を移すと、右ストレートを打ち込むために極限まで腰をひねっていた。

バタンツ！！

「みんな、大変だッ！！ 侵入者が出たみたいだぞ！！」

「アンタだよッ！！」

「ぶへあッ！？」

『ス力さーーーーーんッ！？』

「……え？ ス力さん？」

ドアを開けた瞬間、なのはは顔面に向かって打ち込んだ。それを食らった男性はわけのわからない声を出して部屋から消えたのだが、自分の予想した相手と違ったので、おそろおそろ自分が殴った相手を確認することに。

「ス力さんっ！ 大丈夫か、誰にやられたんだっ！？」

「ドクターっ！ しつかりしてください！」

みると泡を吹いて倒れている男性に必死に呼びかけている幼馴染。
泣き目でゆすっている友人。 幼馴染が自分の存在に気付いたのか、こちらをみていた。

「い、いらっしやい。 機動六課によっこそ」

「気をつけるー！ コイキングがギャラドスに進化したぞおおおおおおおー！」

「ち、違うもんっ！ 不可抗力だもんっ！！」

片足を上げウインクしながら指をピンつと立てて可愛らしく言ったのはに対して、ひよっとこはスカリエッティを抱きしめながら大声で叫ぶのであった。

14・コイキングの本気（後書き）

Bボタン連打

15・マスコット作戦

「えー……っ!? それじゃ、はやてちゃんがさっき言った私たちに会いたい男性ってコレ!?!」

「そうやで」

ス力さんがギャラドスによってKOされてから10分、俺は床の上で正座をさせられていた。こいつらがいうには反省の意味も兼ねてらしいのだが……真に反省すべきはなのはだと思うんだ。だってス力さん殴ったじゃん。泡吹いて鼻血流してたじゃん。流石の俺も警備員に鼻血は流させてないぞ。

「いや、おかげでなのはちゃんが本気で殴った映像も撮れたしよかったで」

「うう……あれは不可抗力で……その……本当はコレを殴るつもりだったのに……」

もじもじしながら怖いことを言わないでください。ス力さん、俺を救ってくれてありがとう。

「まあまあ、ええやないか。コレも本気でなのはちゃん達を心配してきてくれたんやで?」

「そうだそうだ! もっと言ってやれ、はやて!」

「ごめんな、下から必死こいてパンツ覗こうとしている奴を弁護できんわ」

地に伏せながらなんとかスカートの中の楽園を覗こうと土下座体制でなのは達をみているひよつとこにはやては冷徹な目を向ける。その視線に気づきひよつとこは瞬時に正座の体制へと戻る。そして周囲を2・3回見回した後、袖を拭いながら溜息をついた。

「ふう……危ない危ない、バレるところだったぜ……」

「もう遅いよ、なにもかも遅いよっ!？ はやてちゃんのセリフ聞こえなかったのっ!？」

「え？ どうしました、高町なのはさん。そんなに大きな声を出してはいけませんよ?」

「誰のせいだと思ってるのっ!？」

「ちなみに、そろそろいちごパンツは卒業しましょうね?」

「個人の勝手じゃんっ! というか、いつの間にパンツみたのっ!？」

「ごめん、当たるとは思わなかった」

「zzうえxr d c t y 9おいkじゅh y g rてs x d c f v g!？」

なのははバインドでひよつとこの両手両足を縛り、近距離から魔力弾を放つ。

「なんだか……なのはさん嬉しそうですね」

「これがそう見えるなら病院行ったほうがいいぞ、スバル。どうみてもあいつを抹殺しようとしてる途中だろこれ」

横にいるヴィータに話しかけるスバルだが、ヴィータはうんざりしたような様子で答える。もしかしたら、今回のようなことがしょっちゅうあるのかもしれない。

「けど……どうしよう。ねえ、ティア、あの人が同棲相手なら私たちはやるしかないんだよね……　　って、ティア？」

みると友人であるティアが指をワナワナ震わせてカタカタと体を動かす。

「あれ……もしかしてお兄さん……？　お面も一緒だし、声も一緒。え？　うそ？　あんな人類の最底辺をいつてるような人が私に気がなっていた人……？」

「あの……ティア？」

相方の様子がおかしいのに気が付き、そっと触れようとする　ところでティアがいきなりひよっとこのお面をつけている人に向かって駆け出した。

「あの！　お兄さんですよ、ティアです！　お墓で会った！」

「ちょっとまってくれ、いきなり妹感覚で話されても困る。君が妹を名乗るなら縞パンをはいてフリフリのスカートを履き、ネクタイで可愛らしくきめてからまたきたまえ」

「いや、そうじゃなくて……お墓の前で会いましたよね!？」

「会ってないよ、俺は。君が会ったのは俺とは別の人だと思う。もっと恰好よくてもっと優しい……そんな素敵な男性だろう」

荒げるティアにひよつとは冷たく引き離す。ティアはがっくりと肩を落とし、とぼとぼとスバルたちの所へ戻っていった。

「……よかったの？ 俊くん」

「いいんだよ、これで。嬢ちゃんの中では恰好いい男性なんてイメージが出来上がってるかもしれないしな。それを壊したくないんだ」

「でもお墓に塩撒いたんでしょ？」

「寺生まれのTさん直伝の方法だぞ」

「知らないよ、そんなの。もう……そんなことしちゃダメでしょ。次やったら私が塩撒いちゃうよ？」

「潮吹いてくれるの？」

「死を撒いてあげようか？」

レイジングハートを機動させながら俺の頬にペチペチと当ててくるなのはヤクザそのものです。ギャラドスからレックウザに突然変異したぞ、こいつ。とりあえずバインドを解いてくれたので、ひとしきり見渡すことに。

「なんというか……アレだよな。六課って女多いな」

「せやな、わたしがじきじきに選んだからな」

「ああ、なるほど。それは女が多くなるわけだ」

はやてなら無駄な男なんていらないし、いれないだろうな。

「しかしはやて殿、こう女子が多いとマスコットおなこなるものが必要ではないか？」

「マスコットならなのはちゃんがおるで。毎日毎日、かわいすぎて萌え死にそうや」

「まあ、なのはがマスコットなのは認めるかな」

「ねえ、それって喜んでいいんだよね？ ちなみにそのマスコットはどんな役をするのかな？ みんなに笑顔を振りまいちゃうとか……？」

「オチ担当かな」

「ひどいよ二人ともっ！？」

まあ、いいじゃないか。見てる分には面白いし。

「どうせ、アレやろ？ 自分がマスコットになりたいとかいうんやる？」

「べつにそんなこと思ってないけど、マスコットにしてください」

いかん、願望が少し漏れてしまった。

はやては溜息をつく。

「ほな、わたしが満足するようなマスコットの案をだしてみい。
それで判断するで?」

「こんなのはどうだろう? ひよっとこハム太郎とか」

「鳴き声は?」

「デウクシ」

「18禁verは?」

「ひよっとこハメ太郎」

「喘ぎ声は?」

「ヒギイツ!」

「うちの負けや、採用」

「大反対だよッ!」

はやてと互いに肩を抱き合いながら健闘を讃えているところではからストップがあった。やはりなのは遊ぶのはめっちゃくちゃ楽しい。俺も息子も嬉しすぎて反り返っている。

「ところでスカさん、目を覚まさないね」

「それだけなのはちゃんの右ストレートが強かったんや」

やはりギャラドスは伊達じゃなかった。

15・マスコット作戦（後書き）

なんか長くなりそうな予感がする。
あと土曜まで更新はなしです。

ス力さんいまだ起きないし。

16・「速報」 スカさんが生還した

「スカさんが気絶してから1時間。そろそろスレ建てようと思うんだけど」

「ほうほう、どんなスレタイにするん？」

「「コイキングの逆襲」 スカさん余命1時間 「はねるコイは竜になり飛翔する」 みたいなスレタイでいこうかなと」

「よし、うちが建ててくる」

「やめてよっ!？」

はやてとウキウキ気分でスレを建てようとしたところ、横から悲鳴混じりのなのはの声が聞こえてきた。

「え? どうしたの、なのはさん。 もといギャラドスよ」

「ちっ、ちがうってば! だ、だから……アレはそもそも間違いで……」

「ほんと俺を殴る予定だった?」

「うん」

「おい、スレ建てよろしく」

「あいよー」

はやてが自分のPCでスレを建てようとする　が、それをさせまいとなのはもはやての机に迫ってくるので後ろから俺が羽交い絞めすることに。

「もうよせ……！　戦いは終わったんだ……！！　お前は頑張らなくていいんだよ！」

「ここで頑張らなかつたら私は大変なことになっちゃうよ！？」

「胸揉んでいいっ！？」

「人の話し聞いてよっ！？」

「ハア……ハア……なのはタソのおっぱい……　って、あぶなあっ！？　後ろからレバ剣飛んできたっ！　おっぱい魔人がレバ剣飛ばしてきたっ！？」

「貴様を葬ればミッドの平和を守れるような気がしてな」

あながち間違いじゃないから反論できない。　そうこうしている間になのははやての元にいつて、PCの電源を切ってしまった。
くそっ……！　このおっぱい魔人め！

「俺となのはのスキンシップを邪魔するなっ！」

「それはセクハラというものだ」

「シグシグのおっぱいだってセクハラもんだろっが　謝るから、レバ剣を投擲しようとしないでっ！？」

昔から守護騎士たちは冗談が通じないんだよ。　とくにシグシグなんて全く通じないし。

ふいにフェイトと視線が合う。　逸らすフェイト、見つめる俺。

「……我が家のおっぱい魔人は俺と視線を合わすのも嫌なのか……」

「ち、違つよっ！？　でも、ここで視線を合わせると面倒なことに巻き込まれそうだったしっ！」

そついいながら、キャロとエリオを後ろに庇うフェイト。　お前は
どんだけ警戒してるんだよ。

「べつにー、ちょっとシグシグにフェイトの胸囲の脅威を教えてあげようと思ったただけなのに。　なー、ロヴィータ」

「ここであたしに振るのは宣戦布告と受け取っていいんだな？」

守護騎士一のロリっ娘は俺に向かってアイゼンを構える。

「まあまで、ロリにはロリの魅力があると高校時代に　もう言わないから振るかぶらないでくれ」

ブンブンと空を切り俺の頬にまで届いてくる風を受け、両手を上げ降参の構えを取る。

「そついえば、お前はさつきからコイツのこと“ス力さん”って呼んでるけどダレなんだ、結局のところ」

そういつてスカさんを指さすヴィータ。人に向かって指を指しちやいけないって習わなかったのかコイツは。

「こーら、ロヴィータちゃんダメでしょ。人に指を指しちゃ」

「うるさい」

ボキッ

「指があああああああああ！？」

おかしい、あいつ絶対おかしい。思考がなのはと一緒だもん。絶対おかしいぞ。

急いでシャル先生の元へ

「シャル先生、助けてくださいっ！ おっぱいとロリの相乗効果が襲ってきます！」

「ま、まあ……二人とも会えて舞い上がってるだけです。たぶん……」

「ロリ巨乳なんて認めないんだよっ！！」

「そういう話じゃないですよね？」

困惑しながらもシャル先生は指を治してくれる。やつべえ……シャル先生、便利すぎ。シャル先生いればフルボッコにされても大丈夫なんじゃね？

シャマル先生から治してもらい、いまだに構える二人に向かってしゃべる

「スカさんはスカさんだよ。 下着泥棒してるんだ」

「おいちよつとまで、その紹介文がすでにおかしいだろ」

「発明者なのかな？ なんか家に行ったとき大量のロボットがあった。 全部壊しちゃったけど」

「よく仲良くできてるよな」

まあ、変態同士だからな。

ロヴィータの隣にいたシグシグが疑惑の念を向けながらスカさんを見る。 どうしたんだろう？

「どしたの、シグシグミシル」

「今度言ったら前歯折るからな」

「お前らは苦痛以外で俺とコミュニケーションができないのかっ！？」

絶対アレだ。 はやてがアレなせいで守護騎士たちも頭がアレになってるんだ。

「けどよ…… “スカ” って聞いたら次元犯罪者のジェイル・スカリエッティを思い出すんだよね」

ロヴィータの眩きにウーノさんの肩が一瞬ビクリと動く。　ロヴィータはそのまま視線をフェイトのほうに

「そういえば、フェイトはスカリエッティのことにに関して調べてるんだよね？」

「う、うん」

「まじで？　フェイトタソちょっと教えてよ」

「あ、ちょっとまって」

フェイトは自分の机に戻ると大きなファイルを引出から取り出し、戻ってくる。それは大きく大きく膨れ上がっておりそれだけでフェイトがこれに真剣に取り組んでいるのだとわかる。　ロヴィータはスカさんのことを次元犯罪者だと言っていたが……あのスカさんがそんなだいたいそれたことできるのだろうか？

フェイトはファイルを一枚めくって紙に書いてあることを読み始めた。

「えーっと、ジェイル・スカリエッティ・・・google検索で、間抜けな次元犯罪者は？　っと打ち込むとgoogleさんからもしかしてジェイル・スカリエッティ？　と質問される。　ミッド調べ　俺でも捕まえられそうな次元犯罪者　殿堂入り。　つい笑ってしまう次元犯罪者調べ　殿堂入り。　ワンパンで捕まえられそうな次元犯罪者　殿堂入り」

『ぶふうっ！？』

そこにいた全員が思わず笑ってしまった。なのはとはやてに至っては痙攣を起こしてるほどだ。かくいう俺も笑いを抑えられない。いや、流石にgoogle攻撃は卑怯すぎるだろ。

なのはが痙攣しながらフェイトに問いかける

「フエ、フェイトちゃん……それを追いかけてるの？ あ、ダメ、笑いすぎてお腹痛い……！」

「う、うるさいなあっ！ 私だってこんな人だとは思ってなかったよっ！？」

むしろそんな奴がどうやったら次元犯罪者になれるんだ？ フェイトが調べてるってことはアレ関係かな？

脳裏に浮かぶのは黒髪で俺のことを坊やと呼んだ女性。手を伸ばし、掴んだはずなのにそれを振り払われた女性。俺たちをフェイトに会わせてくれた女性であり、一瞬なほどの痛々しいほどの娘への愛情を魅せていた女性。あれからどうなったか分からない……けど、きつと幸せな夢を見てるんだと思う。娘さんと一緒に。

「どうしたの、気分悪い？」

「へ？ いや、なのはとフェイトとやってるところを想像してたんだ」

「頭力チ割るよっ！？」

「なにいつてるんだよ。 あんなにも可愛い声で鳴いてたじゃないか」

「それ夢のことだよねっ!?　なんで夢のことを現実であつたかのように話しちゃうのっ!?」

みるとフェイトのほうも、必死に誤解だと主張している。ほんとこいつらの困った顔をみるのは面白い　けど、脈がないというのも考え物だ。　ここで一発イケメンなところを魅せないといけないのではないだろうか?

ということは置いて、どうやらみんなには気付かれてないようで安心した。　ほら、なんか主人公みたいになっちゃうじゃない?

ウーノさんが顔を赤くして俯いている。　そりやそうだよな、スカさんの世間に対するアレが180°別ベクトルで有名になってる人だしな。　ウーノさん頑張れ!

皆が笑っている最中、突然ドアが開いて声が室内を支配した。

『大変です!　ミッド郊外にて犯罪者が出た模様!　なお犯人は六課に対する侮辱を行い、六課が出動するのを狙っている模様です!　どうしますか?』

「侮辱って具体的にどんなことなん?」

冷静に聞くはやて。　流石は部隊長

『はい、六課はババアが多すぎる!　とのことですよ!』

「全員、出動用意!　塵一つ残さへんで!」

『了解！！』

声を荒げながら叫ぶはやて。 流石部隊長、目が殺意に満ちている。

俺が女性たちの並々ならぬ殺意に震えていると、その殺意に当てられたかのようにスカさんが起きてきた。

「ん……ここは？」

「おはよう、スカさん。 いまから六課による犯罪者公開リンチが始まるけど、どうする？」

「……どうやってたら管理局の萌え担当を怒らせることができるんだい？」

「まあ、乙女には色々と踏んではいけない地雷があるんだよ」

ギャラドスなんか逆鱗に触ったようなもんだからな。

とりあえず比較的冷静だったシャマル先生に頼んで、見学すること。

「スカさん、そろそろ紙袋取ってくれない？ 袋全体に血がこびりついてて怖いんだけど」

いまのスカさんは下手なホラーより怖いです。

16・「速報」 スカさんが生還した（後書き）

今週のめだかボックスが面白かったので、やっぱ更新する。

安心院さんかわゆす。 江迎は善吉とお幸せに

17・キレルはやてにご用心

なんでもシャマル先生から聞いたところこれが六課初の出勤みたいだ。まあ、管理局の萌え担当だしふつうは出勤とかないよな。

ほんでもっていま俺とスカさんの目の前で繰り広げられている光景はなのはから新人達に贈るデバイス贈呈みたいなもんだね。このデバイスたちがこいつらの相棒になるわけだ。

「はい、これでみんなデバイスは渡ったね。これからはそれが相棒になるからみんな大事にしてね!」

『はい!』

……なんだろう、この幼稚園に訪れたような感覚は。

とりあえずみんなデバイスをもらってはしゃいでいるので、俺もなのはに近づいてデバイスをもらうことに。

「ねえねえ、なのは。俺のデバイスはないの?」

「丁度いいのがあるよ。はい」

つ綿棒

「これでアル開発しろっていうのかよ!」

「まったく違うよっ!?! どうして皮肉がつうじないのっ!?!」

「フェイト！ 優しくお願い！」

「きゃ ああああ ああああ あつ！ こっちこないで ええええええ
ええええええ ええええええ えつ！？」

ムーンウォークでフェイトに迫る俺。全力で逃げるフェイト。またしても求愛行動は失敗してしまった。

「おい、そろそろ行くぞー」

部屋の入口でロヴィータがみんなを呼ぶ。ロリのくせにだいふ偉そうだな。一発ガツンと言いたいところだがこちらが一発ガツンとアイゼンで打たれるのでやめておこう。

そろそろとなのはの後ろを歩く新人たち。 そんなカルガモ行進を
みながら六課に喧嘩を売った犯罪者がどんな人物なのかワクワクす
るのであった。

犯罪者は使われていないビルに閉じこもっていた。窓ガラスはところどころひび割れており、扉は錆ついてて閉められそうにない。そんなビルの3階で犯罪者は叫んでいた。

『かかってこーい、六課のババア！　へーい、六課はビビってる、へいへいへい！』

「……あいつ頭トチ狂ってるんじゃないの？」

「うん、普段の俊くんを見てるようだよ」

正直、俺がコイツと同レベルとか納得いかない。俺のほうがギリギリ下回ってるだろ。

「それにしてもフェイトちゃん。俊くん抱いてて大丈夫？ 重くない？」

「うん、大丈夫だよ」

なのはが俺を抱いたまま空中制止してくれてるフェイトに声をかける。フェイトはそれに笑顔で答える。

「ごめんなー、フェイト。どうしても近くて見たかったんだよ」

俺はこんな時じゃないとこいつらの活躍とか仕事ぶりとか見ることできないしさ。フェイトもそれがわかってくれてるのか笑顔で首を横に振った。

「うっん、きにしないでいいよ。けど、あんまり無茶はダメだよ？ バリアジャケット着てないんだし」

「ユニクロのジャケットなら貸してもらったんだけど、それじゃダメなの？」

「いや、根本的に間違ってるから。ジャケットならなんでもいいわけじゃないから」

「というか、9歳の頃から俊くんジャケットがつけばなんでもいいと思ってるよね。ほんと成長しないよね」

「お前の胸もな」

「フェイトちゃん、落としていいよ」

謝るんで本気で離そうとするの止めてください。

「それよりさ……はやてどうにかしろよ」

右に視線を移すと、齒ぎしりと憎悪と怒りで暗黒化してるはやてがいた。 いや……まあキレるのはわかるんだけどな？ 下手したらこいつ犯罪者殺しかねんぞ。 せつかく、非殺傷という素敵なものがあるんだし部隊長が殺しなんてしたら目もあてられん。

「あゝ……ちよつと危ないね」

「危ないにもほどがあるぞ。 幼馴染から人殺しが出るなんて御免なんでどうにかしたほうがよくね？」

「たしかに、ちよつとかけあつてくるね」

なのははそのまま水平移動してはやての近くまで行く。 あー……はやて言語失つてるわ。 とりあえずちよつと時間がかかりそうなんでフェイトとおしゃべりすることに。 新人たちとスカさんたちはヘリの中で見学。 デバイス渡した意味くない？

「ところでフェイトタソ。 エリオとキャラは元気にしてるかな？ せつかく会えたのに話しをしてないけど」

「うん、大丈夫だよ。 エリオもキャラも素直でいい子だし、結構

会えるの楽しみしてたみたい」

「え？ まじで？ それじゃ婚姻前の挨拶に行こうぜ」

「“それじゃ”の使い方が絶対あってないよねっ!？」

リアクションとるたびにフェイトタソのおっぱいが当たって俺のザンバーがフルドライブしそうだ。

「おまたせ、はやてちゃんと交渉してきたよ。私が代理で執行することになった」

「犯罪者 ！ いますぐ逃げろおおおおおおおおお
お！ はかいこうせんがとんでくるぞおおおおおおおおおおお
おおおおお!！」

「ちよっ!？ やめてよっ！ ギャラドスじゃないっていつてるで
しょ!？」

いや、お前は危険すぎるだろ。

「ほら、犯罪者なんか命乞いしだしたぞ」

「ちよつとーーーー!？ なんて私が執行になった途端土下座して
るのーーーーっ!？」

「……人間は賢い生き物だからな」

「納得いかないよおっ!」

もう！　なんで私だけいつもからかわれるのかな。　だいたい女の子に向かってギャラドスとかおかしくないっ！？　わたしまだ19歳だし、あんなに怖い顔してないんだけどっ！

なのはは一人犯罪者と対峙しながら幼馴染に憤慨していた。　後ろからはフェイトとひよっとこの能天気な会話が聞こえてくる。

だいたいなによ、ちょっとフェイトちゃんのアレが大きいからってフェイトちゃんに抱っこされちゃって。　ニヤニヤしちゃって。

そんなに私は嫌なんですかー！　すいませんねー、大きくなくてー！　って話だね。　それはアレだよ？　フェイトちゃんより大きくないけどはやてちゃんよりかはあるもん。　絶対平均だと思うもん。　それなのになにかにつけて私のこと苛めてきてさ、ほんつと小さい頃から変わってないんだから！　3歳の頃からずっと一緒なんだよ？　もっとこう……私に頼ってくるものじゃないの？　無職なんだよ？　普通私のことを頼ってさ、こう……『お願い、なのは！』　みたいな感じじゃないの？

釈然としない思いがなのはの中でふつつつと沸いてくる。

高町なのはという女性は俊がはじめて女の子と遊んだ相手である。　そしてそれからもずっと付き合いが続いている関係だ。　だからこそ知っている。　世界で一番彼のことを知っているのはだから知っている。　彼の泣き顔も怒り顔も笑い顔も膨れっ面も死のうと思っていたときの顔も絶望の中にいた顔も　全部知っている。

だからこそ、俊は自分を一番に頼ってくると思ったのだが　蓋を開けてみればそうでもなかった。それは幼馴染として嬉しいことであるのだが……どうにも面白くなかった。

あー、止め止め。　あんなデリカシーのない相手のことなんて考えでも無駄だよ。　さっさと終わらせてシャワー浴びよ。

なのは気付いていなかった。　溜息をついている隙に犯罪者が泣きながら聖母に祈りながら魔力弾を撃ったことに。

「避ける！！　ナツパ！」

「へっ？　うわあっ！？」

後ろからの声で現実に戻ったのは目の前の魔力弾を慌てて避ける。　これでもエースオブエースだ。　これくらい造作もないことだ。

ズガガガガガガガガガガガガッ！！　　ひよつと全弾命中

『アンタが当たるんかー！ーっ！？』

「……………わ、私は悪くないよ？」

遠巻きに見ていた新人たちの突っこみと、後ろを振り向いて冷や汗を流すのは。

やがて煙が晴れ、顔を下に向けているひよつとこと困惑したまま抱きかかえているフェイトが姿を現した。

ひよつとこは何もいわずフェイトの肩を叩き、シャルマルがいる地点を指さす。

シャルマルの所に降ろすフェイト。シャルマルは既に治療の準備をしていた。

『え？ 本当は恰好よく避けて、ベータみたいになのはに言うつもりだった？ けど、フェイトと喋ってたらタイミングを逃して当たった？ そう……それは大変だったわね。予想以上に痛かったの？ ユニクロ訴える？ うん、確実に負けるからそれはやめましょうか』

どうやら本当に痛かったようでその後もシャルマルが通訳のような形で会話することになった。

『そもそもなのはが避けるとは思わなかった？ へっぽこの癖に？』

「……わたしも魔力弾当てちゃおっかな……」

小さくつぶやくなのはに聞こえないはずのひよつとこが小刻みに肩を震わせる。

それが少しだけ面白くて、なのははひよつとこに聞こえるようにしゃべりだした。

エースオブエース 高町なのは。 犯罪者すっぱかして幼馴染に日頃の恨みを晴らすことに専念する。 これが本当にエースオブエースで大丈夫なのだろうか？

一方犯罪者は

「誰かババアが言ってみいや！　おお？　はよ、いってみい！　言った瞬間わたしがその唇引き裂いてミンチにしてぼっこぼっこにしたるで！！」

キレたはやてにフルボッコにされていた。

17 キレるはやてに用心（後書き）

ちよつとだけ意地悪な、なのはでしたとき

18・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！

六課の初出勤が終わり、ほとんどなにもしていない新人達や一方的に犯罪者をフルボッコにしたはやてたちがにこやかな笑顔を浮かばせながら職場で菓子を食っていた。

「いやゝ、初出勤もちゃんとできて六課も幸先がええなゝ」

「お前が一方的にボコって、新人たちはそれをみていただけだな」

「そういう俊くんは自滅して、シャマルさんに泣きついてただけだけだね」

……出勤から帰ってきてからというものの、どうもなのはからキツイ言動が飛んできると。あれか？ りゅうのまいで攻撃力でも上がったのだろうか？

俺がシャマル先生に泣きついたことはかわらないのでここは黙って受け取っておくけど。

「にしてもあれだよな。魔力弾ってやっぱ痛いわ。19歳になったからもう大丈夫だろうと思ってたけど……これは成長するとかの問題じゃないよな」

「俊くんの頭は成長しないけどね」

……俺にはサッパリ理由がわからない。しかし……しかしだな。こつ……好感度が下がっているような気がするのには確かなんだよ

な。

そつばを向くのはにどうしたもんかと頭を悩ませていると、トッポを独り占めしていたはやてが急に顔を上げた。

「そや！ みんなで祝賀会やらへん！？ 初出勤達成おめでとう祝賀会や！」

『おおー！ 部隊長がはじめて真面目なこと言った気がする！』

「ちよつとまちいな。 わたしはいつだって真面目やったで？」

『……』

「なんで黙るっ！？」

それはまあ、普段のお前がおかしいからに決まってるだろ。

「でも、祝賀会ってどこでやるの？ 私たちは19歳だからまだ大丈夫だけどキャロやエリオはまだ子どもなわけだし……お店を貸し切ってやるのは反対だよ？」

「大丈夫や、フェイトちゃん。 場所はなのはちゃんとフェイトちゃんの家でやる！ 二人のペットが一匹おるけど大丈夫やろ」

「おい、誰がペット。 もっとこつ……愛玩動物とか別の言い方があるだろ」

「いや……そういう問題じゃないよね？ 遠まわしに俊は人間じゃ

ないって言われてるんだよ？」

フェイトが可哀相な目で俺を見てくる。

「はっは、君と一緒にいられるのなら俺は人間なんてやめてやるさ」

「でも人間じゃないなら結婚とかできへんで？」

「やっぱいまのナシでお願いします」

それは困る。めちゃくちゃ困る。どれぐらい困るかというところの息子が勃たたないくらい困る。この頃使ってないから最近スネてるんだよな、こいつ。

「というか、okを出すのは俺じゃないからなんともな。フェイトとなのはがok出すのなら俺は何もいわないよ」

あくまで俺は居候の身。色々部屋を改造したり至る所に盗撮カメラを仕込ませたりしてるけど家長はフェイトとなのはだ。

「うーん、私は別にいいよ。キャロとエリオも行きたかったらうし。なのはは？」

「そうだね、私も別に」

『なのはさんの部屋に侵入できるなんて！！ やば、私この場で絶頂しそう！！』

『落ち着くのよ、スバル！！ まだ早いわ！ なのはさんが使っている枕やベット、小物用品で絶頂したほうが遥かにイけるわよ！！』

『流石だよ、ティア!』

「……わたしとフェイトちゃんの部屋に行くのは禁止でお願い。というか一階だけ開放ということだ」

「……打倒なところやね」

狂喜乱舞中の新人二人を見ながらはやはり溜息をついた。

「え〜っと、なのはとフェイトとはやてとシャル先生とロヴィー
タとシグシグとザッフィーと新人4人にスカさんとウーノさん。
うひゃ〜……結構な量を作らないといけないのではないか」

場所は移動して我が家の台所で、俺は人数を確認して悲鳴を上げていた。

家に帰るまでの間にも色々と問題が起こったのだが面倒なので省略することに。

後ろのほうではパーティーゲームで盛り上がっている女の子たちの声が聞こえてくる。

『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』

『えっ!?! そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!?!』

あ~~~~~!」

『ぐふふふ……さあ、脱ぐんや!』

「その役目、俺が受け持とう おい、なんで部屋に結界張ってんだよ!! これじゃ見れねえじゃねえか!!」

鍋とか皮抜きとか千切りとか料理のこと全てを投げ出してエプロンを投げ出しズボンを脱ぎパンツを脱ぎ捨てながら部屋に突撃したところ、はやてがそれを先読みしていたかのように結界を張っていた。

「うおおおおおおおおおおお! 燃えろ、俺の小宇宙^{コスモ}!」

力いっぱい殴るが結界はビクともしない

『さあさあ、フェイトちゃんも脱衣の時間やで~~~~!』

『ちょ、ダメええええええ!』

「なんで俺には魔導師としての力がなかったんだ!! なのはとフエイトが裸で俺のことをまっっているというのに……! こんなことじゃ、男失格じゃないか!」

「その前に人間失格じゃないのかね」

「服を着ろ」

「ひよつとこさん……」

結界の前で全裸になったまま膝から崩れ落ちていると、傍で呆れ声

と悲しそうな声が聞こえてきた。　前者はスカさんとザッフィー。
後者はエリオである。

「ああ、結界張る前に追い出したんか。　そこらへんはぬかりないんだな」

「まて、全裸のままこちらにくるな。　ぶら下がっているモノが左右に揺れて気持ち悪い。　まず人間として最低限の誇りを取り戻してからこちらにこい」

「そついえばザッフィーの毛でオ　ニーしたらどうなんだろう？」

「話を聞け馬鹿者っ!？」

ワンコ姿のザッフィーに怒られた。　あとザッフィーの毛でオ　ニーしたらチ　コが絡まって大変なことになるかもしれない。　こう……飲み物を飲んだときに対外に出す所からスルリと毛がはいってきそつだよな。

脱ぎ捨てたものを拾い履く。　流石衣服。　聖母マリア様に包まれているような気がして落ち着くぜ。

「にしても久しぶりだな、エリオ。　元気にしてた？」

「あ、はい!」

赤髪のエリオは子ども特有の笑顔で俺の質問に答える。　うんうん、この笑顔を見る限り大丈夫そうだな。

「ところでエリオはなに食いたい？　夕食作るの俺だし、特別に食

べたいもの作ってあげるよ」

「えっ？ いいんですかつ！？」

「うむうむ、可愛いエリオのためならお兄さん頑張っちゃうよ」

「あの……それじゃ……」

少し恥ずかしいそうに顔を赤くするエリオ。　「ごめん、エリオ。
俺、そっちの毛ないんだ。」

やがてエリオは何かを決断したように言う。

「僕、お肉がいっぱい食べたいです！」

「そっかー、肉かー。俺も好きだよ、肉。　うまいもんな」

もしかして肉を沢山食べたいことを言うのが恥ずかしかったのかな？

「うーん、それじゃ手羽先とトンカツにでもするか。　おっし、お兄さんに任せなさい！」

ドンと胸を叩く。　それを聞いてエリオが嬉しそうな声を上げる。

まあ、流石にそれだけでは健康に悪いので洋風パスタやカルパッチョとかも作ってみようかな。

「ところでエリオ。　ここにゴスロリ服とウィッグがあるんだけど……ちよつと着てみない？」

一瞬にしてエリオの顔が戸惑いの表情に変わる。

「いや、ちょっとだけちょっとだけ。ほんと数秒でいいから、ね？」

「あの……ひょっとこさん、顔が怖いんですけど……」

右手にゴスロリ服、左手にウィッグをもってハアハア言いながらエリオに迫るさまは立派な犯罪者である。

「いやさ、なのはやフェイトに着てもらおうとわざわざ買ったのにあいつら俺の前ではきてくれないしさ。このさい、エリオに着てもらおうかと」

「ザフィーラさん、助けてください!」

ザフィーラの助けもあえなく、ひょっとここに捕まったエリオはゴスロリ服を着せられたのだった。

18・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（後書き）

とりあえず男子パート

19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！（裏側）

時は少し前に遡る

「いや、ありがとうな。　なのはちゃん、フェイトちゃん」

「べつにこれくらい大丈夫だよ。　私もフェイトちゃんもこういうことしかかったし」

「うん、こういうのって面白いよね！」

ひよつとこが台所で食材の確認をしている頃、大きな部屋に集まってはやてはなのはとフェイトに頭を下げていた。　三人のほかにもエリオやキャロ、ティアナやスバルや守護騎士の面々、そして何食わぬ顔で参加してきたスカリエッティとウーノがいた。

「それにしてもみんなお疲れ様！　初出勤は全員怪我もせず終わってよかったね！」

「……なのは、ひよつとこのこと忘れてねーか？」

「え？　何言ってるの、ヴィータちゃん。　そんな人いないに決まってるじゃん！」

にこやかな笑みを浮かべるなのはにヴィータはそれ以上なにも言えずに黙るだけだった。

「もしかして、なのはさん怒ってるんじゃないの？」

「……それはあるかもしれないよ。　どうしようティア。　なのはさんの機嫌がよくないと部屋に侵入する機会チャンスがなくなっちゃうよ」

「いや、それより雰囲気自体が暗くなっただな……」

新人二人とヴィータがコソコソと集まって会議をする。　他の者は困ったように苦笑い。　そんな空気をどうしようかと思案するはやて。

「あ、気にしないで。　普段もこんな感じの扱いだから」

そして事実を告げるフェイト

『もう少し扱いよくしましょうよっ！？』

「一般人のランクにまで上がったら私たちも扱い方をかえるんだけどね」

どうやら高町なのはという女性の中では彼の人間性は一般人以下のランクに位置しているらしい。　といってもそれはなのはだけに限ったことではない。　おおよそ、ここにいる女性陣は彼のことを一般人ランクだとは思っていないだろう。　せめてミカヅキモランクが打倒なところだ。

「けど、ひよっとこさんってなのはさんやフェイトさんのことが好きなんですよね？」

「どうせ口だけだよ、口だけ。　私がなんと俊くんの口車に乗せられたか」

「そういえば、なのはって子どものうちにビスコ食べてたら魔力量
が上がるって嘘話を一人だけ信じてたよね」

「うつ……フェイトちゃん。それはいわないでよぉ……」

顔を赤くしながらフェイトを睨むのは。その視線を受けて自分
がどれほど迂闊なことをしたのか悟ったフェイト。

「なんですか、その話っ！ 詳しく聞かせてくださいっ!!」

『私たちも聞きたーい!!』

ハイエナのようになのはの周囲をまわりながらインタビュアーのよ
うに手をマイク代わりにして押し付ける新人に、困った顔をしながら
もなのははかわす。

「ふゝむ……それならちよつと試してみる？」

『ビスコを?』

「いやいや、ひよつとこのことや」

頭に?マークを浮かべる全員にはやてはどこから取り出した伊達
メガネを装着して女教師のように説明しはじめた。

「あのバカは夕食の準備をしている最中や。そこでわたしがこの
部屋全体に結界を張る。当然魔力を持たないアイツは結界に入る
ことができないわけや」

「あれ? でも俊くん微量だけで魔力あるよ?」

「大丈夫大丈夫、あれは“ある”うちに入らんで。ランクにすらできんし。説明を続けるで、その結果の中であたかもパーティーゲームをしているふうにみせかけるんや。そしてあいつが私達の楽しそうな声に気付いた瞬間に一芝居うつ！ 私がなのはちゃんやフェイトちゃんに脱がそうとする芝居や！ あ、もちろん芝居だから声だけでええで。もつとも……脱ぎたいなら別やけど」

『ぬーげ！　ぬーげ！　ぬーげ！　ぬーげ！』

「ちよつ！？　脱ぐわけないよつ！　しかも仮にも上司に向かってそれはあんまりじゃない、スバルとティアっ！？」

なのはの脱がない宣言に絶望しきった表情でフローリングを転がるスバルとティア。　　いったい彼女たちはどこに向かおうとしているのだろうか。

「まあ、そんなわけで演技に色をつけるために男には退散してもらうで。　　もつとも、退散しなかったらあのバカが厄介なことになるけど」

「ふむ、同士を怒らせるのは私としても反対なのでね。　　ここは素直に従っておくでしょう。　　では……エリオ君にザフェーラ君いこうか」

「さて貴様、いま卑猥な単語を口にしなかったか？」

スカリエッティに手を引かれながら部屋の外へ出ていくエリオと自分の名前の一文字が変わっただけで卑猥な単語に早変わりしたザフェーラがスカリエッティを睨みながら出て行ったのを見届けてはや

てが結界を張る。

「さーて、まずは……本当にパーティーゲームしよつか！」

演技をするのにも限界がある。今回は音をあちらに届けないといけないのでどうしても本当にゲームをする必要がある。

「それじゃス ブラやろうよ！ 私強いんだよ！」

やる気満々なのはにはやては挑発的な笑みで返す。

「ほ……なのはちゃんがねー。まあ、それならわたしが軽く捻ってあげようかな」

「へー、はやてちゃんかなのはに勝てるとでも？」

バチバチと火花を散らす二人。

かくしてパーティーゲームのはずが二人の真剣勝負へとかわっていった。

3分後、そこには自分のゲームの弱さを痛感しているエースオブエースの姿があった。

「えげつねえ……いつさい手を抜かなかったぞ……」

「……なのは涙目じゃないか……？」

「な、泣いてないもん！」

うつすらと目元に雫をためながらなのはが言う。

「な、なのはは頑張ったよ！ うん、すっごく頑張った！」

なのはの姿をみてフェイトがさかさずフォローする。なのははそんなフェイトの胸に飛びついていく。頬に当たる豊満で豊潤な胸。それを顔面全体で味わいながら、なのははそつと自分の胸に手を当てる

「フェイトちゃんの裏切り者っ！」

「ええっ!？」

「ちょっとまで、なのは。なんであたしの所に真っ先にきた。自分の一部の膨らみを確認してからこっちにきたよな？」

「ヴィータちゃんがいるからまだ大丈夫だもんっ！」

「どういう意味だコラッ！」

自分より下の者のところにいく。人間の賢い知恵である。

「まあ、それはそれとして。そんじゃ実験はじめようか」

「そういえば、この実験でなにがわかるの？」

「……あいつの人間としての最低度かな」

その時、この場にいる誰もが思った。

『元から最低の部類だけだな……』

その空気を肌で感じたのかはやてが努めて明るい声でなのはに呼びかける。

「ま、まあなのはちゃん。とりあえず実験しとこか。色々面白いもんが見れるかもしれないし」

「え……それじゃあ」

「おっし、いくで」。『なのはちゃん、負けたら脱衣やで!』
はい、このセリフ」

「う、うん。『えっ!?! そんなこと聞いてないよ! あ、ダメ負けちゃう!? あ~~~~~!』 えっつと、これでいいの?」

「おっけおっけー、上出来や。それじゃ、結界でこちら側だけ見れるように操作してあいつがどうしてるか見物しよか」

はやてが軽く指パッチンする。

そしてクリアになる視界。映し出される幼馴染の姿

オープン

ひょっとこ パンツを脱ぎ捨てようとしている最中

クローズ

「ごめんみんな！ あいつ予想以上にバカやった！！」

一瞬で結界をもどしたはやてがみんなに向かって土下座する。それはまさに視界に映し出された化け物。凶器を持ちながら狂喜し幼馴染の裸を見れるということで狂気した変態の姿。それは弱い少女たちを絶望へ恐怖へどん底へ叩き落とすには十分であった。

ある者は自分の母の元へと飛び込み涙を流した。ある者はハンマーを取り出して彼の息子を叩き折ろうとしていた。ある者はこれにかこつけて最愛の人の胸を揉みだこうとしていた。ある者は顔を赤くしたまま自分の幼馴染がここまでの男だったのかと嘆き、悲しんでいた。

そうして彼が知らないうちに彼女たちの彼の認識が評価がかわっていった。

19・犯罪者フルコンボ達成祝賀会 もう一発遊べるドン！

（裏側）

（後書き

ス力さんが逮捕されないのが不思議です。

真面目回をそろそろ入れるべきかどうか迷いますね。

50万PV達成したみたいです。 ほんとうにありがとうございます。
した。

20・スカさんとお話し

大人三人がゆうに入れる台所で、男性3人とゴスロリ服を着た男の子1人の声が聞こえてくる。

指示を出しているのは黒髪に日本男子の平均身長をわずかに超えている男性である。その男は自分も手を動かしながら淀みなく他の者に指示を出していた。

「スカさん、トンカツ用の肉にはハチミチを塗っておいて。そうすることによって冷めてもおいしく出来上がるから。ザッフィー、手羽先は二度揚げでよろしく。エリオはパスタもってきて」

自身はサーモンのカルパッチョを作りながら指示を出すと、そこに恐る恐るといった感じで、スバルとティアが近づいてきた。

「あのー……はやてさんが手伝ってこい、というので来たのですが……私達にできることがありますか？」

「ああ、それはちょうどいい。それじゃ、このカルパッチョを運んでくれ。おーい、そろそろテーブルのほうに移ってくれー！」

『はいー！』

「うわあっ！ ティア、このカルパッチョおいしそうだよ！」

「ほんとだ……！」

あくまで男性との距離を取りながら皿を受け取ると、二人は喜色満

面でテーブルへと皿を運んでいく。男性から呼ばれた者たちはゾロゾロとテーブルへと席についた。普段はなのはとフェイトとひよっとこしか座らないのでそこまで大きいのを買っておらず、テーブルには6人しか座れないのだが

「えーっと、来客ようにもう一つだそっか。フェイトちゃん、どこにあるっけ？」

「え？ 私知らないよ？」

『なのは、右奥の部屋に来客用のあるから取ってきてー』

「あ、はい！」

二人でクエスチョンマークを台所から男性の声が飛んでくる。その声でようやくどこに置いたのかの場所がわかり慌てて取りに行くことに。

「……なんで自分の家のことなのにわからないんだ？」

「まあ、家のことは大抵アイツがやってるし。アイツのほう詳しいやろ」

ヴィータの呟きにはやてが答える。

「おまたせ、テーブルもってきたからみんな座ってー！」

「ところで、なのはちゃん。席順はどうするん？」

「あっ……どうしよっか」

ここでもうやくなのははその考えに至った。主席のテーブルは6人までしか座れない。そして今日来ている者たちは合計で14人。引き算すればわかると思うが、半数以上の者が主席テーブルには座れないのだ。

「まあ……こういうときは大抵年上に主席を譲るのが当然なんやけど……」

「なのはさんの横がいいです!」

「なのはさんの上がいいです!　もしくは私がなのはさんの下で!」

「といってるように、新人二人が譲らんなのでな」

はやて自体はこのことを嬉しく思っている。六課は自分の身内で固めた部隊だ。隊長陣たちは身内なので仲がいいのは当たり前なのだが新人たちとの温度差がはやてには気がかりだったのだ。それもいまでは雲散霧消しているわけだが。なのはには悪いが、なのはに感謝しているはやてである。

「えっと……とりあえずティアとは一緒になりたくないかな」

「ひどいなのはさんっ!?　あの一夜はなんだったんですかっ!?」

「どの一夜っ!?!」

ティアがなのはに突撃して抱きつく。

そうこうしているうちに、ザフィーラとスカリエッティが料理がの

った大皿を運んでくる。

『おおー！』

思わず漏らす感嘆の声。

「へー、前みたときより結構レベル上がってそうやな」

「あいつ、料理にかんしては真剣に勉強してたもんな」

テーブルに置かれた料理をみながらはやたとヴィータが話し合う。

「……もしかして、ここまでの料理が作れるひょっとこさんて凄い人なんじゃ……？」

「うん……それは思ってきた」

新人二人が料理をみて呟くと、何人か首を縦に動かして同調する。

「こ、これっ！ か、カルボナーラです！」

『おいしいぞー、エリオ。 カルボナーラだよ』

「あ、カルボナーラです！」

若干緊張気味でぎこちない足取りで、エリオがカルボナーラを運んできた。

ゴスロリ衣装を身に纏いながら

「……もしかなくても、ここまで見境ないひょっとこそさんって頭がおかしい人なんじゃ……？」

「うん……それは知ってた」

新人二人がエリオの姿をみて呟くと、全員が首を縦に動かして同調した。

ひとまず料理を作り終えたので俺もテーブルに着くことに。

「……あれ？ 俺の席がないんだけど」

「ああ、あっちにあるぞ」

律儀にみんなが待っている中で、ヴィータが窓の方を指さす。

そこにはダンボールで作られたテーブルがポツンと置いてあった。

コップに入ったお茶と一人分取り皿に乗せられたご飯が哀愁を誘う。

「いやいやいや、せめてそっちのテーブルに……」

『こないでくださいっ！』

「ええっ！？ 俺なにかしたかなっ！？」

料理を手にとってなのは達が出したテーブルに移動しようとしたところで、そのテーブルに座っていたキャロ・フェイト・ヴィータ・エリオ・ウーノさん・スカさん・ザッフィーに却下された。……あれ？ いまさっきまではここまで拒絶されてなかったのに。

そんなことを思っている間にはやてから、いただきますの音頭が行われる。それを皮切りに各々が嬉しそうに料理を食べてくれるのだが

「……うゝん、スバルとエリオの食欲は予想外だな」

勢いよく食べる二人を前に、俺が作った料理がどんどんなくなっていく。料理がなくなること自体はともうれしいことだ。なんと、たつて、料理は食べられてこそ意味があるんだし。しかしながら、ここまでの勢いで食べられると……

「……料理を作るほうに徹しようかな」

すでに消えつつある料理を眺めながら台所へと向かう。今回の主役は六課の面々だし、楽しんでもらえるならそれでいいや。

食べる側から作る側に早々シフトチェンジした俺のところにスカさんがやってきた。

「どうしたの、スカさん？ 酒とかタバコとかないよ？」

「いや、そういうわけじゃないんだがね。君一人では大変そうなので手伝おうと思ってね。それに、色々とあそこにいたら私も危ない身なのだよ」

「窃盗したから？」

「もっと大きなことさ」

そういいながらスカさんは隣にたつて、俺のかわりにジャガイモの皮をむいてくれる。それにしても窃盗より大きなことつてなんだろう？ 盗撮？ それとも小さい女の子に声をかけたとか？

手を動かしながらも思案する俺の頭の中に、スカさんの声が届く。

「君からみて、フェイト君やエリオ君はどうみえるかい？」

「どうみえるって？」

「こう……なんといえいいのだろうか。その……人生を謳歌している、みたいな感じで」

「そうだなあ……二人の表情を見ればわかると思うけど、毎日楽しそうに過ごしてるんじゃないのかな？」

「そうか……」

スカさんはそれだけ言って、作業に徹する。先ほどまでとスカさんの態度が違うのでこちらとしては驚くばかりである。何か悪い食べ物でも食べたのだろうか？

「スカさんどうしたの？ なにか悪い食べ物でも食べた？」

「いや……ちょっと思うところがあつてね。君は考えたことないかい？ “もしここでゝならば違う生き方もできたんじゃないのか

”と。 今日、六課のみんなを見ていたらそう思ってしまったね」

「まあ、それは考えたことあるけどさ」

そんなこと考えていても、仕方がない気がするけどね。 セーブやロードがついてるような生易しいゲームじゃないんだから。

「そんなこと言ったら前になんか進めないよ。 それに実際、神様が出てきて『君は不幸な人生だったね。 私が昔に戻してあげるから、いまよりよりよい未来になるように、よりよい人生になるように頑張りたいまえ』なんて言われても困るよ。 単純に面倒くさいし、思い出補正もなくなってしまう」

「ふむ……そんなもんかね。 それにしても、君にも思い出というものがあるのかね？」

「失敬な、これでもなのは達と過ごしてきたんだ。 色々な思い出はあるよ。 嬉しかったこととか、悲しかったこととかね」

「ほう……差支えなければ教えてもらうことは可能かい？」

冗談なんか一切ない気配でス力さんが聞いてくる。

「よしてくれよ。 野郎の過去話ほどつまらないものはないさ。 どうせ聞くんだったらお話し大好きな女性陣の過去話でも聞くことだね。 ぶっ飛ばされる覚悟は必要かもしれないけど」

肩をすくめながらおどける俺にス力さんは苦笑を漏らす。 さすがのス力さんもあの女性陣のお話に突撃するようなことはしないみたい。

「確かに野郎の男性の過去話なんて私たちにはそこまで関係ないことだね」

そのとき、ウーノさんがスカさんと呼ぶ声が聞こえてきた。　どうやらウーノさんが質問攻めにあってるみたいだ。　流石は女の子だよな。

「ほら、ウーノさんがお待ちかねだぜ。　頑張ってくるんだ、スカさん」

「ううむ……私はこういったことにあまり強くないのだが……」

トボトボと歩くスカさんの背中はいくぶんだけくたびれたような、ゲソツとしてるように感じた。

広い台所に一人きり。　後ろには華やかな女性陣の声。

もしも神様がいたら、神様は管理局の局員以上に忙しい身なんだと思う。　だからこそ、あのときだって忙しかったからこそ、あんな事件が起こったのだ。

いまでも覚えている、モノクロ白黒の世界から色を取り戻してくれた彼女の笑顔。

いまでも覚えている、元気に手を振りながら飛行機にのった両親のことを。

21・初恋語

『白黒の世界でも、彼女だけは変わらずに俺の前で笑っていた』

祝賀会も時間が経つにつれ、終わりムードに達してきた。　　というか、一部の者から眠たいという意見が出たのでなし崩し的に終わりをむかえた。　　まだ眠らない者たちはゲームをしたりトランプをしたり好き勝手にしている。　　俺はそれを背中で感じながら食べ終わった食器を回収し、片付けることに。

今日はなんだか一人芝居をするのも面倒なので、ちょっとだけ昔のことを思い出してみよう。　　べつに誰に話すことでもないの、どこかにいる宇宙人に怪電波でも飛ばしながら。

突然だが魔法使いつて信じるか？　　少なくとも俺は信じるね。

俺の両親は魔法使いだっただ。　　正確にいうと父親が。　　“魔法使い”、そう言ってもなのはやフェイト、はやてのようにデバイスで魔法を使えるわけでもなく、かといって漫画のような不思議な超常現象を起こせるわけでもない。　　誰もが持っている、誰もが出すことができる魔法　　ありたいにいえば笑顔なんだ。

父さんは色んな国や色んな世界の人達を笑顔にしていた。　　紛争

地帯でもパンツ一つで突っこんでみんなを爆笑の海に巻き込んでく
だらない争いを止めさせてきた。いつも豪快に笑って失敗したと
きだって手を叩いて笑っているひとだった。そんな父さんが俺も
母さんも大好きだった。

当然、父さんは世界中のスターであつたのでその分嫌われてもいた。
戦争が起ることとで儲けが出る者や、戦争を引き起こした連中か
らみれば当然のことだろう。父さんは目の上のたんこぶなわけな
んだからな。

父さんはそんなことを気にするほどの心を持ち合わせていないので、
“好き勝手にやらせればいい”。そう言っていた。

そんな時らしかった、土郎さんと出会ったのは。父さんも母さん
も土郎さんも詳しく話してくれなかったからわからないけど……結
果的に土郎さんの説得もあつて俺たち家族は海鳴に引越すことにな
ったんだ。はじめてきたときは驚いたのを覚えている。ほど
ほどに自然があつて空気がうまくて人柄の良い人たちが集まってい
たのだから。

引越してからすぐ、俺たち家族は高町家族に挨拶にいった。
その時だよ、なのはと出会ったのは。

「こ、こんにちは……高町なのは……です」

「え？ なに？ 聞こえないんだけど？」

「ひゃうっ……」

「怯えさせてどうすんだよ、バカ」

父さんが俺の頭を叩いてくる。　いやいや、まじで声が小さくて聞こえないんだって。

「ごめんなー、なのはちゃん。ビックリさせちゃったよな。こいつは俺の息子で俊っていうんだ。　なのはちゃんと同じ4歳だから仲良くしてくれるかな？」

「う、うん……」

父さんは、腰を下ろしてなのはと呼ばれた女の子と目線を合わせた後に頭をなでながらゆつくりと話す。　なのはと呼ばれた女の子のほうも小さく頷いていた。

「えー、俺男の子と遊びたいよ。　こくらへんにも男の子いるんでしょう？」

「男ってのはそくらへんにでも転がってるもんだが、女の子ってのは手を伸ばさないと届かないものなのさ。　いいからお前も大事にしとけ」

ニヒルな笑顔で俺の頭をぐしゃぐしゃ撫でる。　この大きな手が俺は大好きなんだ。

「はっはっ、まあ俊君も遊びたい盛りなんだろうな。　俊君、うちの恭也と遊んできたらどうだい？」

向かい側にいた静観な顔つきのカツコイイ人が後ろに立っていた兄

ちゃんを前に出しながら問う。

「恭也、俊君と遊んでくれるかい？ 私たちはちょっと話し合いをしてくるから」

「はい、わかりました」

「あー、だったら私もなのはと一緒に遊ぼう。ねえねえ、みんなで遊ばない？」

恭也と呼ばれた兄ちゃんの隣でニコニコと見守っていた女の人が、あの小さい女の子の肩を抱きながら話しかけてきた。

「ん？ まあ、べつにいいが。俊君もそれでいいかい？」

「うーん、まあいいよ」

正直なところ、俺は恭也さんと男だけで遊びたかったけどここで俺だけが反対しても空気が悪くなるだけなので止めておいた。そして俺たちは何やら真剣に話す親たちを横目に公園に行って遊ぶことにしたんだ。

「もーいーかい？」

『まーだだよ！』

公園に遊びに来た俺たちはなのはのお姉ちゃんだという美由紀さん提案の元、かくれんぼをすることになった。

「もーいーかい？」

恭也兄さんの声が響いてくる。 早く隠れ場所を見つけないと……！

そう思いながら辺りを見回すと、中が空洞になっている可愛らしい猫の遊具を見つけたので急いで入ることにした。 絶好の隠れ場所だ。

「……あ？」

「あーっと……ごめんなさい、高町。 すぐ出ます」

「あ、いいよ。 もうおにちゃんさがしはじめてるし。 いままでたらつかまっちゃうよ？」

どうやら、美由紀さんがサインを出したのだろう。 きよろきよろとしながら恭也さんが公園内を散策していた。 俺はそれに目を離さないように注意してゆっくりと遊具の中にはいった。

「お邪魔します……高町」

「あ、うん……」

高町が座っていたところに座る俺。 二人とも何も喋らず、喋ろうともしない。

どれくらい時間が過ぎただろうか。 ふいに横からか細い声が聞こえてきた。

「ねえ……なのはってよんで？」

「え？」

「おなまえで……よんでほしいの」

……ああ、苗字じゃなくて下の名前で呼べということか。確かに考えてみたらそうだな、今後とも家族ぐるみでのお付き合いをしそудし、それなのに高町なんて呼んでたら誰がだれかわかんなくなっちゃうもんな。

「ああ、ごめん。その……きづかなくて」

「う、ううん。べつにいいよ。その……こんどからきをつけてくれるなら……」

「お、おう」

会話終了

この町にくるまでは全くといっていいほど女友達がいなかったのが祟ったのかまったくこの子との会話ができない。

焦る俺。なんとなくこの空気が嫌で状況を打破しようとなのはのほうを見る。なのは胸の前で大事そうに猫のぬいぐるみを抱えていた。耳は茶色で全身の色は白と黒で統一されている、可愛いけどちょっと配色がおかしくないか？ そう言いたくなるような猫だった。

「あのさ……猫、好きなの？」

勇気を出して聞くことに。　もしかしたらここから会話が広がるかもしれない。

俺の願いが叶ったかのようになのは大きく頷いた。

「うん。　このねこちゃんはね、ママとパパがなのはの誕生日プレゼントに買ってくれたの。　かわいいでしょ？」

猫のぬいぐるみを俺のほうに持っていき手を足をふりふり揺するなのは。　ぬいぐるみはふわふわの毛並をしていてこれを抱いて寝たらさぞ気持ちよく寝れるんだろうなー、というのが率直な感想。

「うん、かわいいね。　なんかふかふかもふもふしていて気持ちよさそう」

「でしょ！　なのはもいつもこれ抱いてねてるんだ」

「へー、そうなんだ。　名前とかあるの？」

「しろちゃん！」

「……どこらへんが？」

俺の疑問を無視してなのはは口を軽快に饒舌に動かす。

「あのねー、このしろのところが、ふかふかつとして、もふもふつとしてるからしろちゃんなの。　かわいいでしょ？」

「……せやな」

それからものはのしろちゃん談義は続いた。やれ、どこらへんが可愛いだの、ここが気に入ってるだの。正直、同じことの繰り返しだったけど、嬉しそうにはしゃぎながら、楽しそうに笑いながら喋る姿をみているのはとても心地よかった。それと同時にこの子といると自分の心が温まるような、そんな……不思議な感覚にも陥った。

やがてなのはの談義が一段落すると、砂ジャリを踏みしめる音が聞こえてきた。見つかった……！ そう思ったときには時既に遅し。美由紀さんと恭也さんが優しい眼差しで俺たちを見つけていた。

「みつけたぞ、二人とも。これでかくれんぼもお終いだ」

「あう……みつかった」

「まあ……しょうがないよ」

あれだけはしゃいでいたんだし。見つかるのもしょうがないような気がする。もしかしたら恭也さんは俺たちの話をずっと傍で聞いていて頃合いをみて出てきたのかもしれない。そう子ども心に思ってしまった。

それから俺たちは4人で手をつなぎながら帰った。恭也さんと美由紀さんを端に置きなのはと二人で仲良く手をつないだ。

公園での一件いらい、俺は高町家族が好きになった。父さんの友達である土郎さんは剣道？ 剣術？ をやっているらしく、恭也さ

んと美由紀さんもそれを習っていた。何度も何度も、俺となのは通い詰めた。というか、なのはの場合は俺が引っぱりだしたんだ。木刀を振り交差に交わる姿は素直に恰好よかった。憧れてもいた。士郎さんはそんな俺の心境に気付いたのか、よく誘ってくれた。自分にはそんなことできないよ。そういう俺に士郎さんは笑いながら『できないのは当たり前だ。練習しなければ、握ってみなければできるかどうかなんてわからないからね』そう言って背中を押してくれた。恭也さんと美由紀さんが模擬戦をしている横で一生懸命見よう見まねで木刀を振ったことを覚えている。はじめは振り方すら満足にできず木刀を落としたことも覚えている。それでもなんともなんともなんともなんとも挑戦して、ようやく振れたのを覚えている。振れた瞬間に士郎さんの拍手、恭也さんと美由紀さんからの言葉。なのはのはしゃぎ方、そして少し前から観戦していた父さんと母さんの笑顔を覚えている。

いつまでも、こんな日が続くと思っていた。

家では父さんと母さんと遊んで笑っておしゃべりして、朝になって家にまで迎えに来たなのはと公園で遊んで家で遊んで、士郎さんや恭也さん、美由紀さんと一緒に稽古して夜には両家族一緒に夕食を食べる。

そんな幸せがいつまでも続くと思っていた。

ただ、運命は残酷で小さい子どもの些細な幸せもいと簡単に奪ってしまった。

それは唐突に呆気なくなんの連絡も知らせもなく合図もなく準備も

なくやってきた。

遠い国で飛行落下事故、乗客全員行方不明

そんな文字に起こすと19文字程度の文で、幸せは音を立てて音もなく見る隙も与えず見せびらかしながら崩れ去った。

5歳の誕生日を迎えるときだった。

この瞬間、俺は孤独になったのだ。

なにもが茫然と佇んでいる間に終わった。遺体なんて見つかるはずもなく、葬儀は形だけ執り行われた。それでも、葬儀にはいろんな人が駆けつけてくれた……みたいだ。ありえないほど多くの信頼関係と交友関係をもっていた父さんは色んな人に悔やまれながらお墓が建てられた。

そして問題は俺をどうするか、という議題になった。

正直どうでもよかった。父さんと母さんがいない世界なんていてもなくても同じだった。その証拠に俺の世界は白と黒で染まっていた。モノトーン越しから色々な人が俺に言葉を投げかけてくれた。そのどれもが醜悪で醜くて見境なくて穢れていて俺は首を黙って横に振るだけだった。子どもはピンカンに何かを感じれるときがあると聞く。まさに俺はそのときその状態だったんだと思う。

そんな俺の肩を強く離さないように抱いてくれた人がいた。全てを取り仕切ってくれた士郎さんだ。

士郎さんは一言

『くるか?』

そう言ってくれた。それに黙って頷いたのを覚えている。

「やだよ、士郎さん。家に残りたいよ！」

士郎は困惑しながらも冷静に俊に悟らせる。

「俊君、君の気持は痛いほどわかる。けどね、君が高町家にくるということはあの家には住めないということなんだ」

「なんで? ねえ、なんで? 俺があの家に残っていないと父さんと母さんが困っちゃうよ?」

小さい子どもは一つ一つのことを理解しても前後の繋がりを理解していない場合が多い。まさに俊がその状態である。

自分が高町家に行くことはわかっている。しかしそれが家にいられなくなる。ということにつなげられないのだ。お泊り会のときと同じように思っているのだ。2・3日行けば家に帰る。そう頭の中で作られているのかもしれない。

士郎はゆっくりと優しく俊の目線に合わせてしゃべる。

「いいかい、俊君。君のお父さんとお母さんはもういないんだ。この世にはいないんだ。世界中どこをさがしたってもういない。

君もみただろ？ 葬式を」

「けど父さんも母さんもお墓の中にはいなかったよ……？ それに約束したもん、父さんも母さんも必ず帰ってくるって。ほら、このひょっとこのお面をもって待ってれば帰ってくるって」

士郎は思わず目をそらす。 非常な現実には耐えられない子供に自分はとうとう説き伏せればいいのか。 このギリギリのところでは正気を保とうとしている子供になんとはいえいいのか。

『俊を頼むわ。 俺はちよっくら笑わしてくるからさ』

そう言っ出て行った友人。 自分だって友人を失ってしまったんだ。 だが、この子の場合は家族を失ってしまったんだ。 一人で独りになってしまった子どもに自分はなんと声をかければいいんだろう？ なんと声をかけることが正解なんだろう。

「……そうだね、そう……しろうか。 お父さんが帰ってくるまでしばらくは高町家にいよう」

「うん！」

答えなんて出せるはずがなかった。 こうして騙すことしかできなかった。 大人は騙す生き物だ。 昔TVで言われた言葉だったが、今日ほどこの言葉がしみ込んでくることはなかった。

父さんと母さんがいなくなってから世界がおかしくなった。 机もテレビも電柱も車も食器も床もガラスも色画用紙も本棚もミカンも

ゲームもなにもかも、白黒の世界になってしまった。会う人会う人、白と黒でできていてまるで化け物と会話しているような気分になった。士郎さんも桃子さんも恭也さんも美由紀さんも 全て平等に均等に化け物だった。

やはり自分は守られていたのだ。偉大な父さんと母さんに。だからその二人がいなくなつて守ってくれる人がいなくなつて、世界は弱い自分に牙を剥いてきた。

子どもながらにそう考えていたのを覚えている。

なにもかも嫌になった。いつそ死にたいと思った。自分には辛すぎる。独りで生きていくのは辛すぎる。

だからひょつとこのお面片手に部屋の中でうずくまつた。こうしていれば、父さんと母さんが来てくれるかもしれない。優しい目で俺のことを抱きしめてくれるかもしれない。

士郎さんは喫茶店を作ると言っていた。桃子さんたちが喜んでいたのを覚えている。自分には関係ないことだ。

コンコンと誰かが自分の部屋をノックする。返事は返さない。

正確にはいうならば返事を返せない。ここのとこぞ喋つてなかったので、すっかり声の出し方を忘れてしまった。どうやったら声を発することができるのか？ どうやったら横隔膜を震わせることができるのか？ 今の自分には全くわからなかった。そして興味もほとんどなかった。人間と人形の違いは“形”か“心”の違いだけと聞いたことがある。もしそうならば、いまの自分はまさに人形だろう。

ゆつくりと瞼をおろす。 今日もまた眠ってしまおう。 そうすれば夢の中で二人に会えるかもしれないから。

そのとき、下を向いていた俺の前に白と黒で体を統一された、茶色の耳の猫が現れた。

「にゃーにゃー、こんなところでねっていると風邪をひくにゃ？」

「……」

「どうしたにゃ？ だいじょうぶかにゃ？」

それは調子はずれの声だった。

その娘は、白黒の世界にいてもなお あのとときの姿のまま、俺に笑顔を見せていた。

変わらない笑顔で不変の笑顔で、どんな闇も明るく照らすようにどんな氷も溶かしてしまうように、笑顔で俺の正面に座っていた。

「……あ……」

「どうしたにゃ？」

「なんで……」

「ん？」

「……なんでかわらないの？ なんてなのはだけは……かわらないの……？」

死んでいた声が驚きによって戻ってきた。もう発することができないと思っていた声に戻ってきた。

なのは首をかしげる。

「かわらない……？ 俊くん何言ってるの？」

「だって……だって……」

この世界はモノクロで、全てが化け物になっていて生きる希望なんてなくて

震える手が、なのはへと近づく。その存在を確かめたく、その存在に触れたくて震える手でなのはへと近づく。そんな俺の手をなのははゆっくりと抱きしめてくれた。離さないように、守るように、強く強く握ってくれた。

「どうしたの？ なんで泣いてるの？ どこか痛いのか？」

「ううん……大丈夫……大丈夫だから……もう少しだけこのままに……」

なのはに触れるたびに触るたびに、暖かいものが体に浸透していく。

世界に色が満ちていく

世界が鮮やかに染められる

なのはを強く抱くたびに、握るたびに、感じるたびに、世界に色が

戻っていく。

零れ落ちる涙のしずく

溢れ出る想いの結晶

もう届かぬ親へと愛情

その全てがぐちゃぐちゃになり泣くという行為に終着される。

それでも、なのははずっと抱きしめた。泣き叫んでも喚いても黙って相槌を打ちながら聞く。

どれほど泣いただろうか、目は赤く腫れ声はかすれ鼻水で汚れている。やがてどちらからでもなく、そっと体を離す。

「おちついた？」

「……うん」

今更ながら恥ずかしくなつて顔が赤くなるが、それを悟られたくない一心で顔を下に下げる。

「そのひよつと」……」

なのはが指を指す先には父さんからもらったひよつとこのお面。
いまならすんなり受け入れることができる。父さんと母さんは行方不明になったんだと。

決して死んだわけじゃない。だから、いつか会えると待っている。

「そのひょつとこ、面白いよね。　なのは好きだよ、そのひょつとこ」

「そうなんだ。　でも、おかしくない？　例えば……俺がお面つけたりしても？」

「ううん、まったくおかしくないよ。　だって、そのお面だけで笑える人がいるんだもん。　それって、とってもすごいことだとなのは思うの。　笑えるっていう行為は簡単なようでもとっても難しいの。　その難しいことをこんなに簡単にできるんだもん。　それって一種の魔法みたいだね」

「魔法……」

『いいか、俊。　俺たちはな、魔法使いだ。　人が幸せになったとき、そこには笑顔が発生する。　だが、笑顔つてのは存外難しいものなんだ。　自分では笑顔を出すことは難しいんだ。　だからこそ、俺みたいなのが必要なんだよ。　シリアスだってコメディーに変えて悲劇だって喜劇にかえる。　そんな奴が世界には必要なんだ』

昔、父さんが言っていた言葉を思い出す。

いまならわかる。　父さんの言いたかったことが。

いまの俺にはそこまでの技量なんてないけども

「魔法使い……なってみようかな」

「うん！　なのはもねこちゃんといっしょに応援するよー！」

せめて目の前にいる、初恋の相手くらいは笑顔にしようと思った

と、まあこれが俺の思い出であり、高町なのはという女の子を好きになった瞬間なんだよな。　なのはは覚えていないかもしれないけど、俺の中では大切な思い出の一つでもある。

君の中の正義のヒーローはだれか？

そう聞かれたら俺は迷わず、『高町なのは』そう答えることができる。　それくらいのことをしてくれたんだ。　例え気まぐれだとしても、彼女が俺を救ってくれた事実はかわらない。

「あれ、俊くん。　まだ洗い物してるの？」

「結構な量をみんな食べたしな。　もうしばらくはかかるかもしれない」

「ふ〜ん……手伝おつか？」

「まじで？　それなら頼む」

ゲームをしている連中から抜け出してくれたなのはありがたい申し出をしてくる。　ちよつと洗い物が多いのでこれは素直に嬉しい。

カチャカチャと食器を洗う音だけが二人を支配する。

「なあ、なのは？」

「ん？」

「昔持ってた、猫のぬいぐるみってまだ持ってる？」

あのときから、猫のぬいぐるみを見る頻度が少なくなり、ついには見なくなってしまったからな。　いまなにしてるんだろっか？

「ちゃんと実家のほうに飾ってあるよ。　誰かさんの涙と鼻水でべとべとになってるけどね」

振り向き笑顔を浮かべるのは。

「白ちゃんも大変だな」

「まったくだよな」

お互い顔を見合わせながら、どちらからともなく肩をすくめる。

やっぱり、この思い出はスカさんに話すのは勿体ない思い出だな。

21・初恋語（後書き）

ねこかわいいよ、ねこ。

22・幼女ヴィヴィオ

わたがし雲が青色の海を悠々と泳いでいる。海には鳥が自由に滑空しており燦々と降り注ぐ太陽が肌を焦がす勢いで容赦なく襲ってくる。

俺はそんな太陽を眺めながら、庭で洗濯物を干していた。

「今日も二人のパンツはかわいいなあ……一つくらいとってもバレないのではないだろうか？」

この頃は色々と不幸が重なり、なのはとフェイトの警戒が強くなってきた。のだが、それをかいくぐって得られる下着こそ興奮するというものではないだろうか。そうに違いない。しかしここにあるものは既に洗濯してしまった下着だけ。こんなものでは俺の進るパトスを抑えることなんてできやしない。そう……使用済みの下着でない……！ 溢れ出るパトスは抑えることはできないのだ……！

そうと決まれば早速行動である。残りの洗濯物は自分のものだけなので適当に干す。ある程度シワを伸ばして洗濯バサミを使って物干しざおにかけたら、さっそく二人の部屋にいくことに。

ヴーヴー

「ん？ スカさんからじゃん。なんでこんなタイミングで。はい、もしもしスカさん？ いまから世界の滅亡よりも大事な用事があるから後にくれる？」

『おお、ひよつとこ君。突然だが少女に興味はないかい？』

「詳しく聞こうか」

スカさんから興味をそそる単語が聞こえてきたときには知らないうちに口が開いていた。

『うむ、ちょっと電話ではあれなので私の家に来てほしいのだが……』

「んー、オッケーオッケー。すぐ行くよ」

スカさんの声が少しだけ重かったけど、どうしたんだろうか？

家の戸締りを済ましてからバイクに跨りスカさんの家へとやってくる。

インターホンを押して数分、いつぞやと同じようにウーノさんが出て迎えてくれた。

「お邪魔します、ウーノさん。スカさんはなにしてるの？」

「ちょっと外せない用事がありました……」

スリッパを差し出してくるウーノさんに頭を下げながら、ス力さん
って暇人じゃなかったのかと考える。 おかしいなあ……俺と同じ
無職だと思っただけだ。

ス力さんの部屋へと移動中、別の部屋から大きな丸メガネをかけた
女性で困った様子ででてきた。

「あ、ウーノ姉様。 私の一人亀甲縛り用の縄知りませんか？ ど
こかにいってしまったんですけど」

「クアットロ、お客様の前ですよ。 そういった発言は控えてくだ
さい」

「これは失礼しました。 あまり他人のことなど気にしない性格な
ので」

「そんなことから、真夜中に一人亀甲縛りを路上で大変なこ
とになったのでしょうか」

ウーノさんが溜息とともに額に手をおく。 なのはやフェイトが俺
のときにやる仕草と同じだ。 それが意味すること、それは『ダメ
だ、こいつ』というわけである。

「この方がドクターがよく話に出す男性ですか。 ……なんだか無
職のような顔をしていますね」

「そつちこそ、DMっぽい顔してるな。 調教でもしてやろうか？」

「ご心配なく。 あなたじゃ役不足ですわ」

「まあまあ、そこらへんにして。 ひよつとこさん、ドクターがお待ちですよ。 クアットロ、あなたは夕食の買い物にでも行ってください。 縄は私が探しておきますから」

ウーノさんの言葉に納得した様子で、クアットロと呼ばれた女性は玄關のほうへと歩いて行った。 まさかウーノさんにあんな妹？がいたとは……。

「ではひよつとこさん、行きましょう」

ウーノさんの言葉に頷きながら、スカさんの部屋へ歩いていく。

スカさんの部屋の前につくと中から1オクターブほど低いスカさんの声が聞こえてきた。

『レジアス、これ以上人造魔導師や戦闘機人の戦力運用はやめにならないかい？』

『何を言っているスカリエッティ。 これ以上地上の戦力がなくなっていると思っているのか？』

『地上の戦力が危ないことは知っているよ。 でも……ほんとうにこれでいいんだろうか？ これが正しいことなんだろうか？』

『何を世迷言を。 貴様がそれを言える立場にあると思っているのか』

？ 私利私欲のために動いたお前が』

ここからでは誰と会話しているのか、どんな会話をしているのかわからないが……真剣な様子であることだけは声の低さでわかった。

ほんとうに入っているのだろうか？ 思わず躊躇ってしまう俺とは反対にウーノさんはトビラを軽くノックし、ス力さんに俺がきたことを伝える。

『おお、ひよつとこ君。 入ってくれたまえ』

「お邪魔するよー、ス力さん。 ……どしたの？ なんか疲れているみたいけど」

「これくらい、盗撮目的で完徹して作り上げたガジェットのとこと比べればどうということはないよ」

そういうス力さんの表情は少しだけ暗かった。

「ふーん、そつか。 それでさ、電話の件なんだけど」

「おおっ！ そうだ、そうだ！ そのことなんだけどね。 君に……というよりも六課の人達を信じて頼みたいことがあるのだ。 簡単に言ってしまうえば、幼女を一人預かってほしい。 いや待ちたまえ、ひよつとこ君っ！？ そのいますぐプッシュしそうな携帯電話をまずは置くんのだ！」

ス力さんから幼女の単語が出た瞬間に、携帯を取り出しおっさんの携帯にかけようとしたのだが……そこはス力さん、俺が打ち込むよりも早く制止させる。

「えゝ……だってアレだろ？ 俺に犯罪の片棒を担がせようという魂胆だろ？」

「いやいやいやっ！？ 君は私が幼女を誘拐してきたというのかねっ！？」

なにを当たり前のことを。

『ねーねー、チンク。 あそこにいる人だゝれ？ なんだか仕事してなさそうな顔してるね』

『いくら無職そんな顔をしているからといって、指を指しながら言うのはどうかと……』

「……スカさん。 もしかして俺を攻撃するためにわざわざ呼んだの？」

「いや……そういうわけではないのだが。 チンク、ヴィヴィオ君と一緒にこっちにきてくれないかい？」

『はい』

俺とウーノさんが出入りした扉から小さい女の子の二人組が入ってきた。 赤と翡翠色の厨二チックな目の色をした天真爛漫という言葉が似合いそうな幼女がどたと俺のほうに向かってくる。

「こんにちは！ ヴィヴィオです！」

「こんにちは、ひょっとこです。 えらいねゝ、自分のお名前が言

えるなんて」

ついつい頭を撫でてしまう。 ヴィヴィオと自己紹介してくれた幼女は気持ちよさそうに目を細めて笑っている。 なんだか小動物とコミュニケーションをとっているような気分になる。

「えーっと、ウーノさんの妹かな？」

「そのチンクはウーノの妹だけど、君がいま撫でているヴィヴィオ君は違うよ。 そしてこの娘がいまさっき話題に出した女の子だ」

「この娘が？」

「うむ。 あまり長々と話しをしたくないので単刀直入にお願いするよ。 この娘を預かってくれないかね？」

その時のスカさんの目にはいつも遊び心なんて微塵も感じなかった。 スカさんは真剣なんだ、真剣に俺に対してお願いしてきたのだ。 やがて頭をゆっくりと下げる。 それにつられる形でウーノさんたちも頭を下げる。 正直、なにがなんだか全くわからない。 一人だけ感じる疎外感。 俺だけがフィールドに立っていないような…… そんな感覚を覚える。

「なあスカさん。 理由は話してくれないのか？」

「いまはまだ……話せない。 ただ 私達といるよりもよっぽど幸せになれると思うんだ。 だって私は犯罪者なんだからな」

「幸せの定義なんて人それぞれだと思うけど。 それに俺だってなのはとフェイトがok出さないことには無理だよ。 あいつらの

ことだから、絶対にok出すだろうけどさ。それにこの娘自体はそれに納得してるのか？」

「それは大丈夫だよ。なにも会えないわけじゃないんだ。会おうと思えばいつでも会える距離にいるんだしね」

どうにも要領を得ない会話が続く。ス力さんが何かを隠したい気持ちは伝わってくるのだが……

「ねーねー、ヴィヴィオお腹すいたー」

「ん？ あー、わるい。ビスコしか持ってないんだけど」

ポケットからビスコを取り出す。それをヴィヴィオは嬉しそうに受け取ると思いつきり袋を開けた。ことによってビスコが床へと落ちる。

止まる刻

ヴィヴィオの頬に伝わる一筋の涙。

あ、もう決壊寸前だ。

ここで泣かれても困るので予備にもってきたビスコを袋から破って手渡すことに。嬉しそうに受け取るヴィヴィオ。やはり幼女の笑顔というのは何よりも勝る宝である。

それにしてもどうするか……。これは俺一人では決めることができないし、一度帰ってから三人で話し合うとしよう。

「ちょっとだけ時間をくれ。三人で話し合うから」

腰かけていた椅子から立ち上がったところで、なにかが自分の手を引く張る違和感を覚えて振り返る。

「ねーねー、かえるの？ ヴィヴィオもつと欲しい」

「あー、ごめんな。それ家にしかないんだよ」

「だったらヴィヴィオもいく！」

「……………ん？」

なんだろう……いま三段飛ばしくらいで話が進んだような気がする。

「えーっと、君が欲しがってるビスコは家にしかないのはわかるよね？」

「うん！」

「それじゃ、俺が一旦家に帰ることもわかるよね？」

「うん！ ヴィヴィオもついていく！」

「まって、そこがおかしい。俺が君を連れて帰ったりなんかしたらおっさんが瞬時にやってくるから。撲殺どころの話じゃなくなるから」

流石のおっさんも釘バットで治せないから。

なんとかして言い聞かせる。　しかしそこは子ども特有の力、話をまったく聞いてくれないパワーで俺が根負けしてしまうことに。

どういう教育をしたらこんな娘になってしまった。　この娘の将来が本気で心配になってきた。　とりあえず、なのはとフェイトの二人に電話することに。

フェイトは仕事なのかつながらないので、なのはにかける。　1
コールの後に口になにかを入れたままの幼馴染の声が届いてくる。

『もふえもふえ？　ほうしたの？　仕事中心ふあんだけど』

「菓子を食うのが仕事である意味すごいな。　まあ、それはいいとして大変なんだ、なのは。　真面目に聞いてくれ」

『へ？　あ……うん。　どうしたの？』

「目の前に将来が心配で心配でたまらない子がいるんだけど」

『現在が詰んでる俊くんよりかは大分マシだね』

「はあ……」

『えっ！？　なにその溜息っ！？　溜息つきたいのは私とフェイトちゃんのほうだよっ！』

「誰のおかげでお前らの下着が盗まれずに済んでると思ってるんだ？」

『誰のせいで私たちの下着がなくなってるか知ってる？』

たぶん家出でもしてるんじゃないだろうか？ 俺の部屋に

「まあ、それは置いておいて。今夜は少しだけ早く帰ってきてくれ。ついでにビスコも買ってきて」

『あー、うん。それじゃなるだけ早く帰ってくるね』

通話終了ボタンを押して一息つく。

なのはたちが帰ってくるまでビスコもつかないかな？

22・幼女ヴィヴィオ（後書き）

今回はそこまで暴走してないです。たまにはこんなのもアリということで。

あと、少しだけ休憩していいですよね？

23・恐怖するヴィヴィオ！　ギャラドスなのは黒い影っ！？

携帯の通話終了ボタンを押しながら、私はたったいままで会話していた人物を思い浮かべる。真面目な話だから帰ってきてほしい……そう言っていたがいったいどうしたんだろう？　もしかしてついに就職する気になったのだろうか？　いやいや、彼に限ってそんなことはない。　だとしたらなんだろうか？

「うゝん……大事な話しかゝ。　もしかして私達に関係することかな？」

私達に関係することならば大分絞られてくる。　夕食のこととか、月1で開催される大掃除とか、実家に帰ってゆっくり過ごすとか。

でも……声色からしてそれはないと思う。　それにそれらのことから家に帰ってきたときに言えばいいのだし。

「うむむ……余計にわからなくなっちゃったよ」

「ねゝ、なのはちゃん。　カービーのエ　ライドせえへん？　丁度いい暇つぶしになると思うんやけど」

「わゝ！　やるやる！　　って、違うよねっ！？　　ついつい流されそうになったけど、仕事場にゲーム機持ってくるなんておかしいよねっ！？　　」

「ぼゝっと携帯のディスプレイ眺めてたなのはちゃんに言われたくないで」

「眺めてないもんっ！ 誤解を招くような言い方やめてくれるっ！」
ゲーム機をセットしながらからかうはやてに、なのはは思わず席を立ちながら否定する。

『な、なのはさん……困りますよ。 お仕事の最中に私が写ってる待ち受け画像をみるなんて……』

「顔を赤くしながらこっちにこないでよっ！？ 私そっちの趣味がないっていつてるでしょっ！？」

「大丈夫です。 私が教導してあげます！ 愛の共同作業で教導しましょう！」

書類を投げ捨てて迫ってくるスバルに、なのはは全力で逃げる。
ドタバタと慌ただしい音が仕事場に響く

「ただいまー、いま帰ったよ」

「フェイトちゃん助けてっ！」

執務官の仕事から帰ってきたフェイトに勢いよく飛びつくなのは。
フェイトは全身の体のバネを使いながら必死に受け止める。 顔を上げたなのはには若干ながら涙を流した痕跡が残っている。 エースオブエースに涙を流させるほどの部下の迫力と真剣度。 なぜこれを訓練で発揮しないのか甚だ疑問を覚えるフェイトである。

「ど、どうしたのなのはっ！？」

「もういやだよー！ おうち帰りたいよー！」

「なのはさんの泣き顔カワユス……。　　ぺろぺろしていいですかっ！？」

「落ちていてスバル！？　　それもつ犯罪者の域に達しようとしてるから！」

「フェイトちゃん、おうちかえろっよー！」

フェイトの胸に顔を押し付けるなのは。　　ふとみると、はやては面白そうに自前のカメラでこの様子を撮っている。　　ここにその他の者がいなかったことだけがなのはにとつての救いだったかもしれない。　　もしこんな姿をみられたら　　べつに見られてもいままでと変わらないかもしれない。

幼子のようにフェイトに抱きつくなのはに、　　フェイトはトドメの一撃を食らわせた。

「でも、家に帰ったら俊がいるよ……。？」

フェイトの　　かいしんの　　いちげき

エースオブエース　　高町なのはは　　たおれた

「さすがフェイトちゃんや。　　なのはちゃんに向かって効果抜群の一撃をためらいなく与えるなんて……。　　恐ろしい娘やつ！」

倒れたなのはを必死に介抱するフェイトをみながら、はやてはそう呟いた。

なんとか管理局員に見つかることなくヴィヴィオを家に迎えることができた。 いや、ほんとうはダメなことだと思っただけど。

「わあゝ！ お家おつきいね！」

「だろゝ？ なのはとフェイトが頑張ってくれてるからな！」

「それじゃあ、おにさんはなにしてるのお？」

「おにさんは夢を追っかけているんだよ」

いまだたどり着かないどころか、見えてこない夢だけど。

それでもヴィヴィオはこのフレーズが気に入ったらしく、手を叩いて喜んでくれた。

「ヴィヴィオも夢をおいかけろゝ！」

「ヴィヴィオ、夢つてのは追いかけるものじゃないんだよ。 叶えるためのものなんだよ」

「でもおにいさんはおいかけてるんでしょ？」

「俺の夢はツンデレだからな」

いまだにデレを魅せてくれたことはないのだけど。

「まあ、夢はいいじゃないか。それよりビスコ食べるか？ うまいぞ、ビスコ」

「たべるたべる！ ヴィヴィオ、ビスコ大好き！」

「そうかそうか。ビスコを食べるとなのはみたいになれるからな。頑張るんだぞ！」

「ん？ なのはってだれ？」

ビスコを口に含んだまま、ヴィヴィオが首をかしげてる。こういった仕草が似合うのもこの娘のすごいところだな。しかし、なのはがダレなのか、か。これは難しい。なんといっても自慢の幼馴染である。下手に貶してイメージをそこねたくないし、夕方には会うことになるのだからここはヴィヴィオが喜ぶような内容に脚色しないと……！

俺はゲームを取り出しボ モン図鑑を選択し調べる。 幼馴染のイメージを貶すわけにはいかない……！

「えーっと、タイプは水・ひこうで入手方法はすごいつりざおかコイキングから地道に育てるのもアリかな。ものすごく凶暴でヴィヴィオみたいな娘が悪いことをすると、どこからともなくやってきて全身を引き裂いて帰っていくんだよ。 口からはビームが出て

きて、そのビームはミッドを破壊するほどの力をもっているんだ」

なのはのイメージを貶すことなく、どちらかというと持ち上げる形でヴィヴィオの目線に合わせて話したのだが　話し終えた瞬間にヴィヴィオに泣かれてしまった。

ごめん、なのは。　ヴィヴィオが求めてたのはギャラドスなのはじやなくて、高町なのはだったみたい。

23・恐怖するヴィヴィオ！ ギャラドスなのは黒い影っ！？（後書き）

ほのぼのストーリーっぽくていいですね。

24. それでも俺はやってない。　　というのは嘘だ

ヴィヴィオに色々な服を着せて遊んでいたら我が家のお姫様二人が帰宅する時間が近づいてきたので、すぐ隣で楽しそうにお絵かきしているヴィヴィオに確認を取ることに。　　なんの確認かというと、これから行動する予定の確認である。

「ヴィヴィオー、さっき言った通りにするんだぞー」

「うん！　えっと、金髪のお姉ちゃんのところに駆け寄ればいいんだよね！」

「そうそう。　決して栗色の髪のお姉ちゃんには近づくなよ。　触れた瞬間溶けるからな」

「あう……ヴィヴィオきをつける……」

ヴィヴィオの中ではすでになのはが、空を飛び街を破壊し目と目が合った者を虐殺していくクリーチャーへと変貌していた。　幼馴染の俺としては小さな子どもにこんな恐ろしい誤解などしてほしくないのだが……しょうがないよな。　俺もたまに殺されそうになるし。

ヴィヴィオが俺のズボンを掴んだところで携帯からメールを受信する音が聞こえてきた。

『もうすぐかえるよー！　あと3分くらいかな』

「よーし、それじゃヴィヴィオは先に玄関先で待機しておいてくれ。俺は着替えてくるから」

「はい！」

手をあげて元気よく駆け出すヴィヴィオ。　　やっぱ少女はかわいいな。

そんなヴィヴィオを見送りながら俺は衣装部屋へと移動して、金髪長髪のカツラに青色のカラコンをつけ黒と白のフリルつきミニスカートを履き、黒ニーソで絶対領域をつくる。

ちなみにカラコンは目を悪くするので長時間つけることはオススメしないからな。

次に軽くファンデーションを塗り、口紅で可愛さを増していく。

つけまつげで目を大きく魅せて、最後にゴムでツインテールにする。

よくツインテールにすれば“ロリ”なんて言い方をしているが俺は絶対に認めないからな。　　おまえらだよ、18禁ビデオの出演者たち。

さてさてそれは置いて、俺も準備ができたので玄関に向かうことに。

「じゃーん！　　どうだ、ヴィヴィオ！」

「うん！　　すっごくきもちわるい！」

ですよねー。　　若干ながら俺も思っていました。　　だってべつに女顔でもなんでもないからね。　　イケメンだって何しても似合うわけじゃないもんねー。

ニコニコ笑顔で言葉の暴力を飛ばしてくるヴィヴィオに、冷静にな

りながら返事を返す。 あかん、股間に変な汗かいてきた。

その時、グッドタイミングなのかバッドタイミングなのか分からないが、玄関の向こう側から二人の話し声が聞こえてくる。 とても楽しそうな声だ。 その声を聞いただけで俺の心は温まってくる。

ドアノブが回る音がして二人の女性が顔を出した。 一人は可憐な光翼、フェイト・T・ハラオウン。 六課のアイドル担当だ。 としてももう一人は恐怖の権化、高町なのは。 六課のオチ担当だ。

「わ〜〜〜い！ おかえり〜〜〜！」

「えッ！？ な、なに！？ なんなのいきなりッ！？」

「わ〜い！ 会いたかったよ〜！」

「ええッ！？」

フェイトが見えた瞬間に駆け出し飛びつくヴィヴィオ。 フェイトはヴィヴィオをしっかりと柔らかく受け止めながらも盛大にテンパっていた。

「ママー！ ママー！」

「えっ！？ ちょっと！？ ど、どうなってるのっ！？」

テンパりながら回りをわたわたと見回すフェイトは、そのまま待機していた俺と目があつた。 俺はそれを確認して、目に涙を浮かべながら『よよよ……』と泣き崩れる。

「かなしいわっ、フェイト。 私達の隠し子を忘れるなんて……私とともに過ごした情熱でイスカンドルな一夜を忘れたというの！」

「な、なのはっ！？ どうすればいいのかなっ！ も、もしかして迷子とかっ！？」

「うん……迷子なのかな。 でもこの娘、フェイトちゃんに懐いてるみたいだけど」

「あなたは私の大切な初めてを奪ったのよっ！ その罪、償ってもらうしかないのよっ！」

「ちょっと、まってよなのはっ！ ほんとうに私はこんなの知らないくて……」

「うん……ねえ、もしかしてママとパパとはぐれちゃったのかな？」

「ひいっ！？ 触ったら、ヴィヴィオ溶けちゃう！ 助けて！」

「……………そのバカ、いったい何をこの娘に吹き込んだのかな？」

「シカトされたあげく、いきなり俺が犯人扱いされるの！？」

渾身の演技を全て無視されたあげく、勝手にヴィヴィオに吹き込んだ犯人にされてしまった。 まったく……なのはも仕事で疲れてるんだな。

フェイトに飛びつき抱きついたヴィヴィオはフェイトの足に引っ付

いて離れず『ママ！　ママ！』そう連呼し、フエイトはフエイトでそんなヴィヴィオに対して慌てふためくだけであった。　そんなフエイトをみてなのは助け舟を出したわけだが差し伸べた手を触れるどころか避けられて怒りの矛先がこちらにきている。

「まあ落ち着け。俺とお前の仲じゃないか。可愛い可愛いひよつとこちゃんからのラブコールなんだから笑って済ませるくらいの度量を調子こいてすいませんでした！　お願いですからバインドで磔にするのは勘弁してくださいっ！？」

外国人のようにスマイル満点で足を踏み出した瞬間になのはのバインドによって両手を左右に広げ足を投げ出してように広げられた状態のバインドにかかった。

「……フェイトちゃん。その娘と一緒にリビングに行っててくれるかな？ 私はお話しするからさ」

「ああ、うん。わかったよ。えーっと、とりあえず行くのか？」

「うん！」

「おいちよつとまてよ！ お前のその肯定で一人の市民の命が風前の灯になつてゐるんだぞ！？ それでいいのか管理局！ それでいいのかマシユマ口おっぱい！ あ、ごめん謝るから！ マシユマ口おっぱい謝るからいかないでええええええええええええ！」

バンドで縛られている状態なので顔だけでも必死にフェイトと距離を詰めようと努力するひよっとこに対して、フェイトは無視を決め込みヴィヴィオを伴ってリビングへと入っていった。

必死に弁明してる彼の声をBGMにしながら私はこの女の子に話を聞くことにした。

「えーっと、私はフェイト・T・ハラオウンです。あなたのお名前は？」

「ヴィヴィオ！」

「そう、可愛い名前だね。それで、どうしてここにいるのかな？」

「えーっと……おにいさんにつれてこられたの！」

「なのは！ 俊を完膚なきまでに叩きのめして！」

ヴィヴィオからおおよそ聞きたくない内容を聞きだしてしまった私は、ここからなのはに聞こえるほどの音量でそう頼んでしまった。

『それ絶対に誤解だから！？ 内容とかまったく聞いてないけど1000%誤解だって断言できるから！』

既に犯罪者の言葉など私の耳には届かない。俊ならいつかやあると思っていた……。だからこそ、なのはと二人でそれを止めようとしていたのに……。最低な人間だよ、俊は！

「ちよっ！？　なのは先生、往復ビンタめっちゃ痛いから、アンパンマン並みに顔面腫れあがるから！　ごめんなさいっ！　もうしません！」

ここまで聞こえてくるのはのびんたと俊の絶叫。

「てめえ！俺だつてこの痛みを快感に変換する術をもつてるんだぞ！それを使用すればお前のビンタを変換して俺の股間のデバイスからホワイトブレイカーを撃つことだつて可能だ！下着もスボンも突破して貴様にかけるぞ、この一撃！」

痛みのあまり彼がへんなことを口にしはじめた。

「ねえねえ、ホワイトブレイカーってなに？」

「うん、もうちょっと大人になったら教えてあげるからね。」

よしよしと頭を撫でると、猫のように気持ちよさそうに目を細める。

『はっはっはっはっはっ、流石のお前も女の子、これで近づくことができなくなっただろう……！……ちょっとまって、タイムアウト！ この距離からの魔力弾は洒落にならないって。ただでさえ、魔力弾がトラウマになりそうなんだから。マジゴメン。なのはちゃん世界一可愛いから許して！ いたいいたいっ！？ これ以上食らったら俺の中の何かが天元突破しちゃうっちゃうっちゃうっちゃうっちゃうっちゃうっちゃう！』

「ねえねえ、天元突破ってなに？」

「使い方が正しいと銀河を守るほどの力と恰好よさがあるんだよ。アレは完全に使用例が間違ってるから、マネしちゃダメだよ？」

「うん！」

ヴィヴィオが可愛く元気に頷く。

そんなヴィヴィオを片手であやしながら、この娘が何故家にいるのか後で聞いただそうと思う私であった。

24・それでも俺はやってない。　　というのは嘘だ（後書き）

カラコンで目がより一層悪くなりました。　　カラコンは僕には合
わなかったのかな。

25・デッドorデッド

現在俺たちは夕食のすき焼きを食べていた。俺の顔はアソパソマン並みに腫れあがっており手なんて肩から上にあがらない状態になっている。おかしい。絶対におかしい。幼馴染というものは素敵でエロエロな展開になると相場が決まっているはずなのにこの二人はデレというものが一切ない。これは俺がエロエロなことをするゲームの世界ではなかったのか？

だがそんなことを言ってもはじまらない。いまにこのテクニクでこの二人が乱れる姿が目に見えかぶ。そう……俺に懇願する姿がな！

「白菜の追加はまだかな？」

「あ、いますぐにもってきます」

……もう少しだけ、もう少しだけの辛抱だ……！

冷蔵庫から白菜を取り出して食べやすい大きさにカットし、食卓へと戻ってくる。

「白菜もってきました」

「ねえ、たまごもないんだけど」

「あ、少々おまちください」

向かい側のなのはがテーブルでコンコンと卵を割る仕草をしながら、

低い声で言ってくる。俺はその声に反応してすぐさま冷蔵庫に向かい卵をとってくる。

「どうぞ、なのは大明神さま」

「……はあ。ちゃんと反省してるの?」

「それはもう、猛反省してます。フェイトの砂丘よりも高く谷間よりも深く」

「……君の中の反省が何なのか知りたい」

卵を受け取ったなのは頼杖をつきながら上目使いで俺を見てきたのに対して、俺も誠心誠意答えたのに溜息が返ってきた。あんまり溜息ばかり吐くと幸せが逃げるぞ?

「はいヴィヴィオ。熱いから気をつけてね?」

「うん! ヴィヴィオ、きをつける!」

なのはの隣にいるパツキン二人が仲良しそうにする光景が視界にはいる。パツキン(大)がパツキン(小)のお椀をとって鍋の中から肉と野菜を均等によそって渡す。パツキン(小)はそれを両手で受け取りながらニコニコ笑顔で復唱する。なんとも微笑ましい光景である。

「完全にハブられてるな」

「は、ハブられてないもん! ちょっと君の相手をしていただけであって……本当は私にもこれくらい懐いてるもん」

「ほぐ。 さつきは溶けるとまで思われていたのに？」

「そ。それは誤解だから大丈夫なの！ みててよね！ ヴィヴィオく、私が卵割ってあげるよ？」

「あう……あ、ありがとう……」

ニコニコ笑顔でヴィヴィオのお椀に俺からもらった卵を割ろうとするのにはヴィヴィオはお礼を言いながら、少しかお椀を自分のほうに引き寄せた。これが意味すること、それはヴィヴィオがなのはから卵を受け取りたくないということだ。

ヴィヴィオの態度を見て、笑顔を張りつかせたままなのははゆつくりと体を引いた。 まあ、あんな態度みせられたらしょうがないよな。

「……いまの光景は見てなかったことにしたいらいいの？」

「……うん」

消沈したまま首を縦に動かすなのは。 ちなみにフェイトはそんな二人のやりとりをみてオロオロするばかりである。

そもそも席順からして避けられてるということに気付かないのか？

いまの席順はこのようになっている。

俺

ヴィヴィオ・フェイト・なのは

どう考えてもヴィヴィオはなのはを避けているだろ。俺？俺は安定の一人だよ。みんなどう思う？家という空間で考えるなら両手に華だよ。でも横という空間で考えるならスッカラカンだよ。

まあ、そんなことは置いていて。

「エースオブエース破れたり、だな」

「こんな負け方嫌なんだけど……」

具が何も入っていない空のお椀をカツカツと刺しながら、なのはは一人で愚痴り始めた。

とりあえずそつとしておくことにして、冷蔵庫からうどんを取り出してくる。

「そもそも、俊くんがヴィヴィオにへんなことを吹き込まなければこんなことにはなっていないだよ。そう考えると私の不幸はいつも俊くんが絡んでるような気がするんだ。ううん、べつに俊くんを責めるつもりなんて全くないんだよ。でもさ、たまに思うよね。俊くんはなんでなのはをイジめるんだろうって。毎日毎日、人の下着盗んでさ。頭おかしいよね。ううん、でも俊くんが頭がおかしいのは知ってるよ？子どもの頃からの付き合いだからね。一番長い付き合いだもんね。でもさ、たまに納得いかないことってあるんだよ。こっちにも意地つてものがあるしね。これでもね、大変なんだよ？あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、怒ってもヘラヘラしちゃってさ。どれだけ私がディバイン・バスタ

「撃とうと思ったことか。 けど、俊くんはそんなことおかまいなし。 そもそもデリカシーがないんだよね。 いまどきデリカシーのない男なんてモテないんだよ?」

台所から戻ってきたところで、ちょうどなのはの愚痴が一段落したみたいなので声をかけることに。

「なのは、うどん食う?」

「たべる!」

さっきとは打って変わった表情で目をキラキラさせながら肯定するのは。 うんうん、わかるぞその気持ち。 すき焼きのうどんって美味しいよな。 ところで愚痴ってどんな愚痴なんだろうか? どうせ俺に対する嫌味なんだろうけどさ。

うどんを三玉いれて蓋をすることに。

その間に俺は二人に話しをすることにした。 もちろんこれからヴィヴィオをどうするかについての話だ。

「さて、二人とも。 まずはヴィヴィオがここにいる理由を話す。 そのうえでこれから俺たちのする行動を決めていくことにしたいんだけど、異論はないよな?」

「うん」

二人が肯定する。 ヴィヴィオだけは器に残った食べ物に一生懸命で話に参加していない。 けど、それが一番いいのかもしれない。

「それじゃ、まずなんでヴィヴィオがいるのかだが」

かいつまんで、要約してわかりやすく話していく。スカさんから預かったこと。ビスコの魔力でここについてきた。案の定、なのはもフェイトもビスコ辺りでもって微妙な顔をしていたのだが。

「まあ、俺が話せることはこれくらいかな。俺自身もスカさんからそこまで聞いてない、っていうか聞こうとしてもダメだったよ」

「もしかしてスカさんって多忙な人なのかな？ てつきり俊くんと同じ無職だと思ってたけど」

「というか、スカさんってスカリエッティに似てるよね」

「フェイトの気のせいじゃない？ それって次元犯罪者なんだろう？ スカさんにそこまでできるとは思わないけど」

「……それもそうだね」

「とにかく、ヴィヴィオは此处で預かるってことで異論はないんだよね？」

俺の問いに二人とも頷く。わかってはいたけど……ほんと二人とも優しいよね。

だがここで大きな問題が一つでてくる。

その問題とは

「士郎さんやリンディさんになんて説明すればいいんだろうか……」

「「あつ……」」

預かっているだけとはいえ、ヴィヴィオはここで生活していくことになるんだ。スカさんは期限については何も述べなかった。ということは、最悪の場合、一生なんてことにもなりかねない。だとしたら様々な問題が出てくる。

やはり早めに話しておくべきだろうか……。

「やっぱり、話しておかないとまずいよね。最悪でもリンディさんには話しておかないと」

「いやいや、リンディさんだけじゃダメだろ。士郎さん達だって俺たちのこと心配してるんだから。だからこそ、俺たちはしょっちゅう海鳴にも帰って無事であることを伝えてるんだし」

「でも……お母さんになんて説明すればいいの？」

フェイトの言葉で軽くシュミレートしてみることに。

「あら、なのはちゃんとフェイト、久しぶりね。ついでに無職の君も」

「いつも思っているのですが、俺にはリンディさん厳しいですよね」

「あなたが死んでくれたら優しくするわよ」

まったく意味ないですよ、それ。

玄関の前で軽くはない世間話をする。　なのはとフェイトのおかげで若干リンディさんの顔にも優しさがある。　俺単体のときは般若のような顔してるのにな。

「それで？　なにか困ったことでもあったのかしら？　三人で訪ねてくるなんて」

「あ、そのことなんだけどね、お母さん？　ちよつと話しておきたいことがあつて……」

フェイトのよそよそしい態度にリンディさんもなにか違和感に気付いたようだ……フェイトが喋っているので口を挟まないようだ。

「えっと　子どもをね、紹介しようと思って」

「死ぬな、俺が」

「うん、俊は死んじゃうね」

「フェイトちゃんの言い方も悪いとは思うけど」

三者三様の言葉を述べながらも俺たちが到達した答えは一つ。　俺がリンディさんに殺されるという結末だ。　俺自身もそんな未来が容易に想像できるわけで、死ぬしかないわけで、なんとも困ったことになった。

「それじゃなのはのほうは？」

「うちもダメだと思うよ？　ねえ、俊くん」

なのはが俺に振ってくる。　俺はそれに大きく頷いた。

「そもそも髪からして違うしな。　それにもしそんなこと言ったものなら、俺は士郎さんと恭也さんに殺されるよ。　なのはのこと溺愛してるし。　ヴィヴィオの年齢はだいたい5歳くらいだろ？　逆算すると14歳だぞ？　そんなこと士郎さんや桃子さんが許すはずないだろ。　どこの14歳の母だよって話になってくる」

「……それじゃいつそのこと、話さないっていう選択は？」

「それはもつとダメだよ、フェイト。　俺たちはまだ19歳。　日本では未成年の部類に入ってしまうから、やっぱり士郎さんやリンディさんには話したほうがいいと思うんだ。　ヴィヴィオはペットとは違うんだ。　やはりそれなりに報告とかも必要になってくるよ」

「うゝゝゝん……でも、報告した先に待ってるのは俊くんの死」

そこが一番の悩みだよな……。　もつとこう……ギャルゲやエロゲみたいに簡単にいけばいいんだけど。

「くゝゝん……」

三人が悩む中で、当人であるヴィヴィオだけが

「うどん食べようよー！」

元気に発言をしてるのであった。

25 デッド・オーダーデッド（後書き）

次回は甘々にしていきたい。

26・聖水

『子どものサインはとても小さい。だから見過ごしてしまうことがある。それを反省し次に繋げるか、そうでないかで器が違ってくるのかもしれない』

結局のところ、俺たちの答えは“時期をみて話す”という無難な答えに落ち着いた。いま話したって混乱するだけだろうし、もしかしたらヴィヴィオだつてすぐにスカさんたちが引き取りにくるかもしれない。それにいま話にいったところでヴィヴィオとの生活だつて日が浅い。そんな状態で先方に報告したところで何を言われるかわかったもんじゃないしな。……いや、俺がボコられるのは確定事項なあんだけどさ。

兎にも角にも、これが俺たち三人が決めたことだ。

夕食を食べ終わった俺たちは俺だけを残して女子三名ともども風呂で体の疲れをゆっくり癒している最中だろう。

「それにしても、なのはがハブにされなくてよかったな」

風呂に入ると言い出したとき、ヴィヴィオは若干強張った顔をしたがフェイトの助力となのはの粘りでどうにかこうにか入浴へときぎつけたのだ。それにしてもなのは怖がられ過ぎたる。

洗い物を終えた俺はそのまま、マンガでも読もうと自室へ行く途中、あることに気が付いた。

「……そういえばヴィヴィオの服ってないよな。今晚のパジャマは俺が昔作ったメイド服でなんとかなるけど……さすがにメイド服で外に出すわけにはいかないよな」

そんなことすれば俺がおっさんに捕まってしまう。流石にそれだけは避けたい。

「ちよつとヴィヴィオに聞いてみようかな」

足を180°方向転換させて風呂場へと進むことにした。

風呂場へと訪れた俺を待っていたのは、先程まで衣服とした着用していたブラやパンツ、スカートにシャツ、といった聖骸布であった。ほのかに残る香り、若干嗅ぐことのできる汗、生暖かい感触。

そう 桃源郷は此処にあったのだ。ちらりとすりガラスをみると、三人ともこちらに気付いている様子はない。シルエツトからして、なのはとフェイトがヴィヴィオの体を洗ってあげているようだ。チャンス 到来

すばやくしゃがみこみ、あちらの視界にはいる面積を狭くする。そして自分の中で体内時間の操作を行う。これにより、殺し屋でもないかぎり俺の気配を察知することは難くなる。しかしこれにだって限界はある。だからこそ 最新の注意を払いながら最

高の速度で獲物を　　狩る！

『えへへー！　今度はヴィヴィオがフェイトママを洗ってあげる！
ヴィヴィオこれでも手でコスコスするの上手なんでよ！』

「それならばお兄さんの息子もコスコスしないかヴィヴィオー！」

ドス！

「ぎゃあああああ！　目があああああああああ！」

「まったく……油断も隙もあつたもんじゃないんだから！」

一瞬だけ見えた光景から推測すると、タオルで体を隠していていたのはから目つぶしつを喰らったようだ。指だけならまだいいが、今回は泡までつけてきたので失明しないか心配だ。全身の感覚を研ぎ澄まし心の目でこの場を見る。徐々に浮かび上がってくるシルエツト。前方になのは。横にヴィヴィオとフェイトか。肌がチリチリと焦げるような錯覚を覚えるので、どうやら二人ともかなり怒っているようだ。　フェイソンなんてチェーンソー取り出しときそうである。

しかしながらここは長年付き合ってきた仲だ。　軽いジョークの一つでも飛ばせば許してくれるはず……！

「フェイト、ほんといい体してるよな。　なのはもう少し頑張れ
！」

まさかなのはが風呂場でサマーソルトしてくるとは思わなかったです。

サマーソルトを食らった俺はフルボッコにされながらもなんとか逃げることができた。息子のほうはフルボッキだ。しかし此処には現在ヴィヴィオだっている。紳士として幼女がいる空間で抜くのは斬首に値する行為なのでなんとか我慢する。

しょうがないので自室に引きこもってゲームでもやろうとしたところで風呂場の方からドタドタとした足音が聞こえてきて

「おふるよかったよー！」

ヴィヴィオが飛びついてきた。いったいどうしたんだ？ ちよつとテンション高くない？ お姉さんたちにイケナイことでも教えられたのか？

などなど、思考しているとパジャマ姿のフェイトとなのはがタオルで髪についている水滴を縛りながら困った顔を浮かべていた。

「どしたの、ヴィヴィオ」

「たぶん眠くなってきたからテンション高いんじゃないかな？ ほら、たまにあるじゃない。小さい子特有の」

「ああ、たまに魔法少女（笑）もなるよな」

「ねえ、魔法少女（笑）って私のことかな？ 知ってる？ 乙女ってね、いつまでも少女なんだよ？」

「……ぷっ」

「落ち着いて、なのは！？ 鈍器はダメだって！？」

「離してフェイトちゃん！ こいつに乙女の鉄槌を！」

「お兄ちゃんどいて！ こいつ殺せない！（裏声）」

「バカにしてるでしょ！？ 私のことバカにしてるでしょ！？」

なにをいまさら。

なのはがロヴィータ化している様はみていて面白い。俺がニヤニヤとフェイトがオロオロとしながらなのはを止めていると俺の膝でぐるぐる遊んでいたヴィヴィオが失速し、やがて動きを止めた。その様子に俺たちは動きを止めてヴィヴィオの顔を覗きこむ。

「……寝てるね」

「少女の寝顔ってかわいいな」

「うーんと……今日はもう寝よっか？」

「うん、そうだね」

なのはとフェイトがあらかた拭き終わったタオルを受け取る。二人は洗面台のほうに足早に駆け出してドライヤーをかけるとクシで髪を梳きながら手を差し出してくる。

「はい、ちようだい」

「ごめん、キャットフード手元にないんだ」

「いらないよっ！？ そうじゃなくて、ヴィヴィオを預かるって言ってるの！」

「ああ、ヴィヴィオね。 でも……離さないんだけど」

シツカリとズボンを握ってるヴィヴィオはなかなか離れてくれない。強引にほくことも可能んだけど……それはなんか嫌なので実行には移したくない。

「それじゃ、俊くんの部屋に寝せる？」

「だめだよ、なのは。 俊だよ？ 危ないことになるのは明白だよ」

「あ、そうだね。 やっぱいまの発言取り消しね」

俺の幼馴染たちがこんなにツンしかないわけがない。

といっても、俺はこれからやらなければいけない作業があるわけで部屋にヴィヴィオをいれることはできないんだよな。 さて、どうしたものか。

考えこんでいると、ヴィヴィオが一人で俺の手を離し目が開いていない状態にもかかわらずトコトコと抱きついていく。 もちろん、フェイトのほうに。

「俊くん、齒くいしばって？」

「…………え？」

いや…………うん。　なにかに当たりたい気持ちはわかるんだがな？
そこでサンドバックとして俺を起用するのはどうかと思うぞ？

なのはとフェイトの間に挟まれて寝ているヴィヴィオをみる。

「あんまりジロジロみないでよ。　セクハラだよー」

「俺のセクハラはもつと大々的だから大丈夫なの。　それよりヴィヴィオってトイレいつたつて？　俺のイメージでは小さい子って夜寝る前はトイレに行くイメージがあるんだけど…………」

小さい子どもって夜は一人でトイレに行くのが怖いから、親と一緒にトイレに行ってから寝ると思っていたのだが……。　実際、小さい頃のなのはがそれで漏らしたので強く思ってしまう。　それにヴィヴィオって考えてみれば家にきてから一回もトイレにいつてないよな？　それって健康的にも問題があるんじゃないか？

「うゝん…………どうなんだろう、フェイトちゃん」

「えっ！？　私に振るの？　えゝつと、行くときはなのはか私を起こすんじゃないかな？」

親指で顎を押しながら答えるフェイト。　言われてみれば確かにそうだな。

「それじゃ問題ないか。 んじゃ、おやすみ。 風邪引かないようにな」

「はい、おやすみー」

電気を消して部屋を出る。 今日だけは盗みは勘弁しておこう。

部屋に戻り、電気を点ける。 蛍光灯の人工光が部屋全体を支配して俺の娯楽グッズを起こす。 それらを全部一か所の所にまとめておき、棚からコスプレ衣装用の布を取り出す。 色は青と水色と白。 これでとある人物をモチーフにした衣装を作ることによしようと考えている。 できるだけ可愛く、外を歩く誰もが振り返るようなそんな服を作ろう。

道具一式を近くに置き、いざ開始する。 ヴィヴィオは喜んでくれるかな？

カッチコッチと時計の針だけど聞こえてくる。 何時間もしたような、それでいて何分しか経っていないような、そんな時間の感覚があやふやになった錯覚に陥る。 時刻を確認すると深夜1時を若干過ぎたあたりである。 出来として30%。 本当に終わるのか？ そう一抹の不安がよぎるわけだが、まだまだ時間的には余裕があるしなんとかなるだろう。 立ち上がり、伸びをすると背中からバキバキと固まりをほぐすような音が聞こえる。

「うーん……ヴィヴィオの様子でも見てくるか」

あの笑顔をもう一度みて、英気を養おう。 そう思った瞬間に家中

に響くような声で誰かが泣いた。

『うわああああん！！』

この声はいったい誰だ？

こんな高い声で泣く奴なんて家にいたっけ？

そもそもなんで泣いてるんだ？

疑問が頭を埋め尽くす。 体は勝手に動き出す。

ドアを勢いよく開け、なのはとフェイトの相部屋のドアを蹴り開ける。

「あ、俊くん……起きてたんだ。 というか、起きちゃったのかな……？」

部屋に入ってきた俺を見てなのはは困った笑みを浮かべた。

「えーっと……もしかして？」

「うん。 そのもしかして」

「だいじょーぶだよ、ヴィヴィオ。 こんなこと、誰にでもあることだから」

なのはとフェイトに抱かれたまま、グズグズと泣いているヴィヴィオ。 そして少し視線をずらした先には白いベッドが不自然なほど黄色くなっていた。

早い話が　ヴィヴィオが間に合わなかった、ということである。

考えてみれば当然なことである。　そう、これは当然な結果なんだ。だって、ヴィヴィオは一回も行っていないんだから。　この家に来て、何時間が経った？　かなりの時間が経ったはずだ。　夕食だつて食べた。　お茶だつて飲んだ。　もよおさないほうがおかしいのだ。

ヒックヒックと泣くヴィヴィオ。

なのははそんなヴィヴィオを優しく抱きしめ、背中をトントンと叩く。　安心させるように、落ち着かせるように。

「私、ヴィヴィオをシャワーにつれていくね」

その言葉に俺はただ頷くだけしかできなかった。

ボタンと閉じるドア。　トントンと降りていく一人分の足音と、一人分の話し声。

それを聞きながら、俺はベッドに足を運んだ。

「きづいて……いたんだ。　ちよつと考えればわかることだよな。　だってヴィヴィオは小さい女の子だぜ？　それが突然俺たち大人3人の中に放り込まれてさ、緊張しないほうが無理な話なんだよな。」

主張できないのは当たり前じゃないか。借りてきた猫のようになるのは当然じゃないか。用意周到なス力さんのことだ。『迷惑をかけちゃいけないよ?』そう言い聞かせたんだと思う。だからさ、賢いヴィヴィオはその言いつけを守ってたんだ。ヴィヴィオにとつて、トイレに行く、ということは迷惑行為につながったのかもしれない。誰かが案内しないといけない。誰かが付き添わないといけない。だから、ヴィヴィオは言い出せなかったのかも。しれない。本当は、本当は　もっとわがまま言いたかったのかも。しれない」

俺が渡したお絵かきより、アニメを視たかったのかもしれない。

考え出したら止まらない。あいつが主張したのなんて、“うどんを食べたい”なんてささいなものだけだったんだぞ。

情けない

幼女を泣かせた自分が情けない

黙ろうとしても黙れない。小さい女の子の小さな小さな自己主張を流してしまった自分が情けなくて、ヴィヴィオの泣き顔が頭から離れなくて、ス力さんにウーノさんに申し訳なくて、マシンガンのように喋ることでなんとか保とうとする。

「紳士が聞いて呆れるぜ。だって　」

喋る口が強制的に止められた。

「いまは、後片付けが先でしょ?」

俺の口元に自分の人差し指を置いて、ほほ笑みながら強制終了させるフェイト。

その笑顔でようやくわれにかえることができた。

「……ごめん。 ちよつと取り乱しちゃって……」

「うん、大丈夫。 私だってなのはだって気付かなかったんだもん。 しょうがない、なんて言葉で片付ける気はないけど、優先事項がどれかくらいはわかるよね？」

その言葉に頷く。

そうだ、まずはここを片付けよう。 そうでないと、ヴィヴィオが安心して寝れないじゃないか。

ヴィヴィオのメイド服を脱がした私は、いまだ泣いているヴィヴィオを抱いてシャワーのノズルを回した。 お湯にかわるまで数秒。 この時間がちよつと寒い。

「よつし、お湯にかわったね。 ヴィヴィオ、体流そうね」

「……うん」

下を向いたまま首だけで返事するヴィヴィオ。

まあ、それもそうだね。 よく考えてみれば此処は他人の家だもんね。 ヴィヴィオだって家で生活するようになってできないだろ

うし、ましてそこでもよおしたら……。

借りてきた猫のように黙ったままのヴィヴィオの体をスポンジで丁寧に洗う。するとヴィヴィオが少しだけモジモジしはじめた。

「くすぐりたい？」

「うん……」

「うにゃにゃ！」

「やー！ くすぐりたいよー！」

そこを重点的にこすると、ヴィヴィオは笑いながらこっちにスポンジを押し返してくる。ようやく笑ってくれたのが嬉しくて、ついヴィヴィオで遊んでしまう。

そんな笑いの中で一瞬だけ訪れる無音の空気

「ごめんなさい……おもらししちゃって……」

それはとてもとてもか細い声で

「ううん。 私たちもごめんね、気付いてあげることができなくて」

私はたまらず抱きしめた。

抱擁に嫌がることなく、身を任せるヴィヴィオ。

「あのね……？」

「な〜に？」

「スカさんがいつてたの。『いまから行くところはとつてもいい人がいるから大丈夫』って。 ヴィヴィオのことを守ってくれるって。 だからヴィヴィオ、いい子にしようと思って、迷惑かけちゃいけないって思って」

「そっか。 偉いね、ヴィヴィオ。 その年でいい子にしようなんて。 うちには19歳になってもお子様のままの男性がいるから余計に思っちゃうよ」

「でも…… ヴィヴィオだめだったよ？ いい子にできなかったよ？」

心配そうに不安そうに見上げるヴィヴィオ。 だから私はそれに満面の笑顔で答えることにした。

「いい子になんてしないでいいんだよ。 飾らない言葉で、飾らない行動で、飾らないわがままで、私達を困らせてくれたらいいんだよ」

私だってそうだったんだから。

わがまま言っで、さんざん困らせて生きてきた。 それでも、まわりの大人たちは笑って許してくれた。

大人になるにつれて、わがままなんて言えなくなる。 これも生きてきた中で身につけたことだ。 約数名、それに縛られない人たちもいるけど。 とにかく、こんな子どものときからわがままを言わない人生なんて、言えない人生なんてどこかで破綻するに決まっ

いる。

「だから　もつと甘えていいんだよ？」

「なのは……ママ？」

「ん？　どうしたの？」

「えへへ……なんでもない！　なのはママ！」

その後ヴィヴィオは私に抱きつきながら、“ママ”と連呼し続けた。ようやく言ってくれた言葉。聞きたかった言葉。こんなにもママと呼ばれることが嬉しいなんて思わなかったのが正直なところ、ヴィヴィオをこのまま自分の娘にしたいと思っでしまひ、その考えは心の底にしまっでおくことにした。

もつ……そんなにはしゃいだら眠くなつちゃうよ？

新しいシーツをかけ、ベッドメイキングを完了させる。

これでヴィヴィオが帰ってきたときに不快な印象を抱くことはないはずだ。

「あの……ありがとうフェイト。助かったよ」

「こちらこそ、ありがとう。私一人じゃこんなに早くは終わらなかったよ」

フェイトと二人でペコペコと頭を下げ合う。

これから三人はまた眠るんだろうな。俺は作業の続きをするわけだが

「えっと……俺もういくよ。二人によろしく」

なんとなく居心地が悪く感じ、早々と退散を決め込むことにする。

手をあげてドアノブを回そうとしたところで、腕を引っ張られる感覚。 ついで誰かの胸に顔が当たる感触を感じた。

「えっと……フェイト？ その……胸が当たってるんだけど？」

「当ててるの。 まったく……俊はすぐ思いつめるんだから。 俊の悪い癖だよ、それ」

「そうはいつでも……俺の責任なんだし」

そこまでいったところでデコピンされた。 地味にうまくて痛い

「違うでしょ。 “私達”の責任だよ。 もっと頼ってよ、私となのはを」

いつもは息子が起きるはずなのに、こういうときに限って起きてこない。ほんと拗ねてるよな、こいつ。

ほんとうはいつも通りバカをやりたいのに、作業で疲れて元気がでない

だから、首を縦にも横にも振らなかった。

その後、なのはとヴィヴィオが帰ってくるまでフェイトと俺はこの状態のままでいたのだった。

26・聖水（後書き）

ふる場でサマーソルトはかなり難しいと思う。

27・ターニングポイント

「できた……！」

長かった夜も終え、ついにヴィヴィオの服が完成した。個人的にはなかなかの出来なので、いまからこれをヴィヴィオが着てくれると思うとなんだか頼の緩みが止まらない。

さて、三人が起きてくるまで1時間ちよつとくらい。朝食の用意をしてまっしておこう。

味噌汁を作っていると、二階からトントンと階段を踏む音が三人分聞こえてくる。

『おっはよー！』

「うーい、おはよー。あれからよく眠れた？」

「ばっちりー！」

「ばっちりばっちりー！」

なのはのVサインに合わせてヴィヴィオもVサインを作る。なんだか二人とも一気に距離を詰めたな。うらやましい。

「それじゃ、顔洗ってちょ。もうすぐできるから」

『はい！』

三人娘の姦しい姫様たちは今日も元気なようである。

そんな三人を見送って、俺は最後の仕上げにとりかかった。

いつもの三人の光景にもう一人小さい姿が加わった。いうまでもなくヴィヴィオである。ヴィヴィオはその小さい体を一生懸命使って必死に味噌汁の中にいれたうどんを食べようとしている。ヴィヴィオがうどんを掴むと、うどんはそれをあざ笑うかのようにプツリと音をたてて箸から離れる。

「あう……」

「頑張って、ヴィヴィオ。優しくだよ、優しく」

「大丈夫、ヴィヴィオならできるから！」

両側にいるフェイトとなのはが必死に声援を送る。ヴィヴィオはそれに頷いて、優しくそつと両手で水をすくうように掴みあげ、その大きく開けた口でうどんをすすった。

「うまいか？ ヴィヴィオ」

「うん！」

それはよかった。

両側にいる二人もパチパチと拍手を送る。 ヴィヴィオは照れ隠しのつもりなのか、フェイトやなのはの手をしきりに掴んでは離す。といった謎の行動をしていたりする。 子どもって見とくと面白いよな。

そうしてにぎやかな朝は過ぎていった。

朝食を食べたあとは、仕事にいくのはとフェイトを二人で見送ることにする。

俺が作った弁当を手には二人は元気よく手を振ってくる。

「「いってきまーす！」」

「「いってらっしゃーい！」」

俺とヴィヴィオもそれに負けじと手を振り返す。 世間一般的にこの立ち位置が逆のように感じるのだが、そんなこと俺には関係ないことだ。 というか、無職の俺が元気に外に出ると大抵おっさんと追いかけっこになるのでいただけない。 いまはヴィヴィオだっているわけだし。

「さて、ヴィヴィオ。 君にプレゼントがある！」

「ほえ？ なにに？」

寝間着として渡した予備のメイド服を現在は着ているヴィヴィオだが、流石にご近所さんから変な目でみられそうだし、ヴィヴィオにはまだコスプレとか教えるのは違うような気がする。もう少ししてからのほうがいい……かな。そこらへんはスカさんと相談でもしよう。

「まあまあ、それは見てからの楽しみである。ささ、家に戻るぞ」

ヴィヴィオの背中を抱きながら、俺はいそいそと家に戻るのだった。

「あ、おかあさん？ うん、なのはだけど」

『あら、この時間に電話なんて珍しい……ことでもなかったわ。お仕事はどうしたの？』

「ふっふっふ……もちろん、サボってる」

このドヤ顔を並行世界の高町なのはが見たら頭を抱えるかもしれない。

『ダメよ。お仕事はちゃんとしないと。それで、きょうはどうしたの？ そろそろ海鳴に帰ってくる頃だったかしら？』

「うん、それは少し延期かな。　ちょっと色々とバタバタしてて」

『へ。　なにかあったの?』

「うん。　子どもを預かってね」

そこまで言っ、なのはは昨日三人で決めたことを思い出す。　その内容は　時期をみて両親に話す　ということであった。　そして今日は、預かって二日目。

いくらなんでも早すぎる。

そのことを思い出したなのはだが時既に遅し。

『へ、どんな子かしら?　教育的には大丈夫?　彼がへんなことしない?』

既にマシガンのように喋りだした母を止めれることはできなかった。

30分後

そこには茫然とした表情でトッポをかじっているなのはの姿があった。

そこに沈んだ様子で、フェイトがなのはを訪ねてやってきたのだが

「ああ、なのはもなんだ……」

「……うん。　どうしようか……」

素直な二人には隠し事は難しいようである。

一方その頃、ひよつとはというと

「なあひよつとこ。　近所の通報で此処で夜中小さい子の叫び声が聞こえたらしいのだが……」

「塩でも喰らえ!」

「ちよつ!?!　お前、逮捕するぞ!」

安定の下種であった。

玄関の前で押し問答ともつかない、わけのわからないことを5分ほど繰り返している。

ヴィヴィオを一人にしているのか?　そう疑問を覚えるかもしれないが、様子を見に来たウーノがヴィヴィオのそばにいたのでそこは安心である。

「そんなことないつてば。　だいたい、俺が家にはいるんだぜ?」

「だからこそ警戒してるんだ」

「あゝ、それはわかるかも。ところでさ……飯に家に小さい子どもがいたらどうするの？」

「お前を逮捕するかな」

キラリと光るおっさんの瞳。その瞳にひよつとは冷や汗を流す。

……あかん。ここでヴィヴィオが出てきたら

「ねえねえ！ ウーノがこの服かわいいってよ！」

玄関から勢いよく飛びつくヴィヴィオ。

「おっさん……言い訳をさせてくれ」

「とりあえず手錠かけてからな」

手早く右手に手錠をかけ、近くの鉄柵にもう一方をかけたおっさんは指を鳴らしながらひよつとこの話を聞き始めた。

ちなみにヴィヴィオは

「ウーノ！ あそぼー！」

さっさとウーノのところに遊びにいくのだった。

俺の話を聞き終えたおっさんは、俺を怒るわけでもなく顎に手を当てて考えはじめた。いつもはフルボッコにしてから考えるのに、

この逆順序は珍しい。

「どしたの、おっさん」

「いや、お前らだけで大丈夫かなと思ってな」

「大丈夫大丈夫。きつとうまくしてみせるさ。　　なんたつて、預かっている身なんだからね。　　責任重大だし」

頭をかきながら、肩をすくめてみせる。　　細心の注意を払っているつもりだ。　　なにも問題はないはず。

だけどおっさんは、そんな俺の頭に思いっきりゲンコツを落とした。

「いつつっ！？　　なにすんだよ、おっさん！？」

睨む俺に対して、おっさんはそれよりも怖い顔で睨み返してくる。

「ばかもん。　　そんな“預かっている”なんて感覚捨てる。　　いいか？　　此処の家にいる間はお前たちが親みたいなもんだ。　　絶対にその子の目の前で、“預かっている”なんて口にだすなよ？」

「……………うん。　　ごめんなさい」

おっさんは俺の返答に満足したのか、うんうんと首を縦に何回も振る。

「そついえば……………今日は非番の日だったよな。　　丁度暇だし、俺がお前に子育ての極意を教えてやるっ」

「おっさんの子育てなんて特殊すぎてアテにならねえよ」

おっさんからアップパーが飛んでくる。こいつ……いつか泣かせてやる！

「けどさ……なんか小さい子どもっていいよな。家が明るくなる」

朝の光景をずっと見ていた俺としてはそう感じるよりほかなかった。ヴィヴィオが笑うことで、二人も笑う。その笑顔はとても自然で、たった一つの笑顔だけで家中が明るくなるような。そんな錯覚に陥った。

「ああ、子どもはいいぞ。子どもに会うだけで疲れがぶつとぶ」

おっさんはうんうんと大仰に頷く。流石既婚者、話に重みがあるぜ。

「それにな、子どもがいると姿勢すらかわってくるんだよ。よく言うだろ？ 『子どもは親の背中をみて育つ』って。あんな迷信信じるつもりないけどよ……どうしてもシャンとしてしまっただよな、これが」

「……それほんとう？」

「ああ、本当だ」

「へ……。あ、おっさんここタバコ禁止だから」

「まじか？ すまんすまん」

「一服しようとするおっさんに声をかけると、片手で謝りながらすぐにポケットに戻す。」

「お前、どうすんだ？」

「どうするって……？」

「ここがお前のターニングポイントかもしれないぞ」

おっさんは全てをわかっているかのように、俺に誘導尋問してくる。

「そうだな……ちょっとヴィヴィオに恥ずかしげなく魅せられるような大人になってみようかな」

「まあ、いうのは簡単だがな。いつとくが、お前は一般人なんてもんじゃないからな？ 世間的に言えば犯罪者だ」

うっ……！ このおっさん、ズバズバと言ってくるな。

「まあ、否定しないよ。　　というかできないね」

「うむ。　お前が否定したらぶつとばすところだったぞ。　確かに
お前は犯罪者だよ、でもな犯罪者には良い犯罪者と悪い犯罪者がいる」

「犯罪者に良い悪いなんてあんの？」

「わからん。　なんとなく言ってみただけだ。　でも……俺はそう
思ってる」

「ふうん……それじゃ、良い大人と悪い大人の違いは？」

「さあな。それがわかれば苦労しないぞ。良い大人がなんなのかわかれば、他の奴はそのレールの上を走ればいいだけの話だからな。“良い大人がなんなのか？”それは死ぬ寸前に答えがでるんじゃないのか？」

確かに……そんなものなのかもしれない。

「それじゃ……ヴィヴィオに誇れるような大人になるには俺はなにすればいいと思う？」

「とりあえず変態的なところを治せ」

「それ……俺という個性が死ぬくない？」

致命的だぞ、それ。

それを聞いたおっさんはチツチツと人差し指を左右に振り、頭を振った。正直なところ、この人差し指を折りたいです。

「バカだな、お前。頼み方ってもんがあるだろ。俺の場合嫁さんに土下座すれば大抵のことはしてくれるぞ？」

「……たしかに、俺は頼み方ってものを心得てなかったかもしれない」

神妙にしきりに頷くひよつとこ。

正直、問題点はそこではないのだが、彼ら二人は気付かない。

俺がどうやって頼み込もうと考えていると、横にいたおっさんが首をポキポキとならし、立ち上がった。尻についた草を叩きおとし俺のほうを向いてしゃべる

「まあ、それなりに頑張れよ。ひょっとこらしくな」

そう一言だけ言っておっさんは帰って行った。

おっさん、手錠は？

尿意がそこまできてるんだけど。

27・ターニングポイント（後書き）

ここから少しずつ変わっていく……かもしれないし、そうでないかもしれない。

28・キチガイこそが俺である

ミッド市内の大きな一軒家の外でたつたいま19歳男性の人としての尊厳が失われつつあった。

「やばいってやばいって！ もうすぐそこまできてるぞ、尿意っ！
？ ヴィヴィオが間に合わなかったならまだわかるが、俺が間に合わないって洒落になんねえぞっ！？」

足を気持ち悪いほどにくねらせながらひよつとこは叫ぶ

「だれかー！ー！ 誰か返事してくれー！ー！」

10秒たつてから小さい足音が聞こえたかと思うと、玄関から俺が徹夜で作った不思議の国のアス風衣装を身に纏ったヴィヴィオがチュッパチャップスを口にくわえたまままでてきた。

「うゝ？ どしたの、おにいさん？」

「おおヴィヴィオ！ とりあえずチュッパチャップス食いながら走るなよ、危ないからな。 まあ、それはおいとして いますぐウーノさん呼んできてくれ！」

この手錠を解除できるとしたら、それはもうウーノさんくらいしか残ってない。 ヴィヴィオがなのはやフェイト並みに強ければ話は別だがそんなことありえないわけで、必然的にウーノさんになるわけ……でも俺は信じてる。 ウーノさんは良心の塊だ。 きつと俺を助けてくれるに違いない！

「あ、すみませんひよつとこさん。ドクターから電話がありました……なんでも『過去に戻るマシン作り続けるのも嫌だからメダット作るうと思うんだ。ちょっと手伝ってくれないかね?』とのことなんで、すみませんがこころへんで失礼します。引き続き、ヴィヴィオのことをよろしくお願いしますね」

「まって良心の塊さん!? 俺のメタビーもメダフォース発射寸前なんですけど! というか、暴発寸前なんですけど!」

冗談じゃないっ! いまこの機会を逃したら、大変なことになるぞ。メダフォースでこころいったいアンモニアでマカダミアなことになるぞっ!

「すみません……がんばってください!」

「まってええええええええええええ!」

俺の叫びもむなしく、ウーノさんは帰って行った。あとに残るは隣で座りながら行儀よくチュッパチャップス(プリン味)を舐めているヴィヴィオと、制御棒の制御をしている俺だけである。とうとう俺はヴィヴィオの前で人としての尊厳とかなんとかを失うらしい。

「……いや、まてよ? ヴィヴィオにピッキング道具を持ってきてもらえば、まだ勝機はあるかもしれない。ヴィヴィオ! 俺の部屋からピッキングの道具を取ってきてくれ! あ、ついでにそのチュッパチャップスは置いてけ! 転んだら大変なことになるからな!」

「うん、わかった!」

ヴィヴィオは立ち上がりながら、俺の口にチャップスプスをねじ込む。 いや、そこに置かなくてもいいと思うけどさ。

ヴィヴィオなりのダッシュで玄関に戻る途中

ガッ！

案の定というか、お約束というか、ヴィヴィオは進路上にあった石に躓いてこけてしまった。

「な、泣くなヴィヴィオっ！？ お前は強い子だ！ こんなことで泣いちゃダメだ！ ……でもいたいの？ んじゃ、もう泣いちゃえ！ おにいさんも一分後には漏らして泣いてると思うから！」

だんだん思考がマヒしてくる。 もうなにもかまがどうでもよくなり……背徳感とある種の興奮で頭の中がぐるぐると、世界がぐるぐると回っているような錯覚に陥る。

すべてをぶちまけて楽になろう そう思ったとき、呆れと怒りがミックスされた女性の声が耳に届いた。

「なに……してるのかな、このバカは？」

「ヴィヴィオ。 泣いちゃダメ。 傷もそんなに痛いほどじゃないんだから、大丈夫だよ」

一人は俺の目の前で腕を組みながら仁王立ちで立っている高町なのは。 してもう一人は泣いてるヴィヴィオを抱き上げてあやしているフェイト・T・ハラオウンである。

勝利の女神はまだまだほほ笑んでいた。

絶望的な状況にもかかわらず、自然に息子の波状攻撃を止めることに成功する。このメダフォース、放つ場所はここではないのだ……！

「助けてくれなのは！？ もうすぐくまずい状況なんだっ！ 俺のメタビーからメダフォースが発射されようとしている寸前なんだよ！ お前も嫌だよな、幼馴染が漏らしたところをみるなんて！？」

それまでジト目で“なにしてんだ、このバカ”みたいな眼差しでみていたなのはが『漏らす』という単語を聞いて合点がいった様子で俺のことをみてきた。どうでもいいので早く助けてください！

「べつに？ 私は小さい頃、誰かさんに見られたしね。あの時はと~~~~~っても、恥ずかしかったけど。……誰かさんは笑ってたよね~~~~？」

あ、勝利の女神が俺に中指立ててる。

「だ、誰だ！？ 俺の可愛いなのはを笑うなんて！」

「いや、勝手に恋人みたいな感じにするのやめてくれる？ まあ、それはそれとして……あのときは私も誰かさんも5歳だったよね。でもいまは19歳。この差はかなり大きいとおもうんだよね」

なのはは俺の周辺をくると回りながら、ドSじみた顔で俺のほうをみる。こいつ……絶対楽しんでやがるなっ……！

「く……！ なにが望みなんだ！？ 謝罪か！？ それなら既にし

たはずだろ！？」

「えー？　べつに私は、“君”とは一言もいってないんだけどな。まあ、勝手に謝罪したければどうぞ？　それでね、私ちょっとだけ今日は失敗しちゃったの」

「失敗なんて誰にでもあるさっ！　俺なんて人生が失敗続きだからな！」

「うんうん、やっぱり失敗は誰にでもあるよね？　それじゃ、ほんの些細な失敗んだけど……それで被害が被ったとしても怒らないよね？」

「うんうん！　絶対に怒らないから！　俺がなのはを怒るわけないだろっ！？　だから、早く手錠を解除してください！」

「……ほんとうに怒らない？」

「本当に怒らないってば！」

「それじゃ」

なのはは指を一つ鳴らす。すると、手錠は簡単にその役目を終えたかのように軽く爆発して消えてしまった。ちよつとだけ、なのはがカッコイイと思った。

なにはともあれ、手錠を解除してもらった俺はトイレに向かって全力ダッシュ。無事にメダフォースを発射し、身も心も爽やかになつてなのはたちがいるリビングへと向かうのであった。

「桃子さんと……リンディさんに……バレた……だっ!?」

「うん。おかあさん凄かったんだよ。すぐになのはから情報聞きだしたの」

「うちだって負けないよっ!　なのはより数分くらい早く聞き出したんだから!」

「いや、おかあさんのほうが」

「落ち着け二人とも!　いまは俺の命のほぅが優先だろ!」

「別段どうでもいいかな」

「なんというコンビネーション。鮮やかすぎて涙が出てくるぜ。」

「まあ、ぶっちゃけ桃子さんのほぅはきっちり話をすればわかってくれるはずなんだ。問題は……リンディさんだよ」

「そっいえばリンディさんにはかなり嫌われてるよね」

「16歳のとき、俺とリンディさんの仲をどうにかしようと考えてクロノが色々頑張ってくれたんだけど……俺がリンディさんの顔面にお茶をかけてしまって最悪の関係になってしまった」

「あの後大変だったんだよ?　反省してるの?」

「うん。まさかあんなところにコードがあるとは思わなかったよ。」

家中掃除したのに……」

嫌な思い出でも蘇ってきたのか、苦虫を10ほど嚙んだような顔をするひよつとこ。

「それより、どうするの？ このままじゃ死んじゃうよ？」

「うゝむ……ここまでくると、いつそのこと諦めの境地に達してきた。もうでたとこ勝負でいいや。いまはそれよりも重大なことがあるんだから」

「「重大なこと？」」

「うん。俺さ、まともな大人になってみようと思うんだ」

真剣なまなざしで、なのはとフェイトをみる。二人はそんな俺の様子をみて

「フェイトちゃん。頭の病院の電話番号ってわかる？」

「ちよつとまって。 いますぐ調べるから」

とても失礼な行動をとりはじめた。

「いやいやいや、ちよつとまってよ。 なに？ そんなに俺の発言っておかしいの？」

「おかしいどころじゃないよ。もしかして別人？」

タウンページを取りにいったフェイトを見送ってから、なのはが俺

に懷疑な視線を向けてきた。 大変遺憾におもいます。

「いや、俺だつてな、ちゃんと考えたんだよ？ ヴィヴィオのために良い大人になろうってさ。 それでこうやって答えを出したわけよ」

そりゃあ、俺は犯罪者ですよ？ キチガイですよ？ まったく良い大人とか良い犯罪者とかになれるかどうかわからないけど、それでも俺なりに考えたわけで。

……あれ？ よく考えてみれば、俺みたいな奴が良い大人とか無理じゃね？

「あのねえ…… 良い大人になろうと思つてなれるんだつたら苦労しないよ。 そもそもだよ？ 君は息を吸うように迷惑行為をしてくる人物でしょ？ それが良い大人になんてなれるわけないじゃん」

「……それは一理あるかも」

いや、一理どころじゃなく百理はあるかもしれん。

そもそも、よくよく考えてみれば……俺がいま述べた言葉って一般人が述べるような言葉じゃないか？

俺みたいな奴が述べる言葉じゃないよな？

俺みたいな奴はもっと……ろくでもないようなことをするよな。

例えば日常的な覗き、盗撮。 セクハラ発言にパイタッチ。 うん、ざっと考えてみてもこんなところだ。 さてさて、こんなことをし

ている奴が良い大人を演じる……？

何度も何度もイメージする。想像する。

良い大人を演じてる俺。仕事をして、ヴィヴィオを養って休日には四人で遊びに行く俺。

うん。 実に良い大人だ。 “世間一般的な” 良い大人だよな。

……これって俺的には苦痛じゃないか？ セクハラもできない、なのはやフェイトとイチャイチャもできない。仕事という檻に囲まれて好き勝手にできやしない。 そんなこと、俺に耐えられるか？

答えはNoだ。 そんなことできないのは、俺が一番わかっている。

おっさんが言うように俺は犯罪者。 そんな“世間一般的な” ことなんてできない。

じゃあ……どうすればいい？

「そもそも、君が良い大人になるなんて天地がひっくり返っても無駄だよ。 できっこないよ」

そうそう……俺が良い大人なんて天地がひっくり返っても……ん？ ひっくり返す？

そのとき、俺の頭の中で一つの考えが浮かんでくる。

そうだ。 俺は何を勘違いしていたんだ？ 俺みたいな奴が良い大

人を“演じる”なんて土台無理な話だったんだよ。俺のような男にはもつとふさわしい役職があるだろ。もつとふさわしい席があるだろ。

俺は目の前にいるなのはの肩を思いつきり掴んだ。なのははそれに驚いているがいまの俺にはそんなこと関係ない！

「なのは！俺、ヴィヴィオの反面教師になるよ！」

「……へ？」

そうだ！ そうだよ！ 俺が良い大人なんてできるわけないだろ！？ 俺にふさわしいのは悪い大人だよ！ だって俺は息を吸うように迷惑行為を行う人間なんだぜ！？ これ以上、ふさわしい奴なんて次元世界中探してもいないぞ！

「良い大人を演じるんじゃない！ 悪い大人を演じるんじゃない！ いつも通りに行動して、そんな俺のいつも通りをヴィヴィオに見てもらうんだ！ なのはは言ったよな？ 俺は息を吸うように迷惑行為をする男だって？ だったら、それを実際にやればいいんだよ！ 良い大人じゃなくて、ミッドで一番の迷惑野郎を思う存分みせつけてやればいいんだよ！」

これはいわば発想の逆転だ。 成 堂龍一もビックリだよ！

いい大人なんかになれはしないけど、悪い大人なら演じるまでもない！ だって、それが通常時の俺なんだから！

「あーっはっはっはっは！ あーはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」

「ど、どうしたの……いきなり笑ったりして……!？」

「これが笑わずにいられるかつ!? 俺は肝心なことを忘れていたんだよ! 俺がヴィヴィオを良い方向に導くつ!? はっ! バカも休み休み言えつてもんだろ! 俺の近くには、こんなにも立派な人間がいるんだぜ、それに二人も! 管理局に勤めて、人々の平和を守る、そんな立派で愛嬌のある主人公気質な奴が二人もいるんだ! 俺はなにか勘違いしてたよ! 俺がヴィヴィオを良い方向に導くんじゃない! なのはとフェイトが良い方向に導くんだ! 俺はいつも通りに生活するだけでいい! それだけでヴィヴィオは立派になっていくんだからな!」

おっさんは言った。

『子どもは親の背中をみて育つ』と。 それはなにも良いところばかり魅せるのではないのではないか? 逆に悪いところをみせれば魅せるだけ、子は『こうはなりたくない』そう思って自分とは違う方向を歩むのではないだろうか? 仮にヴィヴィオがそうだとしたのなら……ヴィヴィオは俺の背中をみて『こうはなりたくない』と思ひ、自然になのはとフェイトの道を歩んでいく。 俺が惚れた人達の方へまっすぐに歩いていく。 何も心配なんてしない。 だって、その両側にはなのはとフェイトがいるんだから。

「主人公なんてやめだやめだ!! そんなちっちゃえ器に俺が収まるわけないだろ! 俺は誰の息子だ!? あの世界中を爆笑の渦に巻き込む、上矢^{かみや}一の息子^{はじめ}だろ!? ろくでもねえ男の息子だろ!? このろくでなさはDNAにまで染みついて離れねえだ! だったら、俺だつてろくでなく生きようじゃねえか、ヴィヴィオに見せつけようじゃねえか! 下種を見せつけようじゃねえか! 俺が

ちよつとだけ真面目になればシリ阿斯になるんだからよ!」

俺の中で何かが吹っ切れる。 葛藤とか、責任とかそんなすべてものが泡と消える。

俺はただただ笑い転げる。

なのはがオロオロするのを尻目に笑い転げる。

何事かとフェイトとヴィヴィオが来るのを見ながら笑い転げる。

そして一緒になってヴィヴィオも笑い転げる。

これは 俺こと、ひょつとこが 悲劇 深刻劇 哀話 悲話
悲運 不幸 などなどを無かったことにしてお送りする 非日常が
日常的な 喜劇 気楽 喜話 幸運 幸福 な物語である。

さて、キチガイによる物語 とくにご覧あれ

28・キチガイこそが俺である（後書き）

長かった序章もこれで終わりです。 ノンストップでここまでくる
ことができてよかったです。

さて パン通 スタート！

29・ギャラドスでもわかるリリカル昔話

前回までのあらすじ

19歳無職が幼馴染たちとミッドで暮らしているときに、友人から一人の女の子を預かることに。その女の子のために真面目に良い大人になろうと努力する無職。しかしそんなことできるはずもなく、良い大人は幼馴染たちに任せて、自分は一人だけ好き勝手にするのであつた。

「ねえねえ、むーじゅんってな〜に〜?」

「ほえ? むーじゅん?」

リビングで彼から借りたマンガを読んでいると、彼の部屋で遊んでいたヴィヴィオが2階から降りてきて私の足に飛びつきながら質問してきた。聞き返す間に膝に登って正面向きで座るヴィヴィオ。

「ねえ、フェイトちゃん。 むーじゅん、って誰?」

「え〜っと……ムー大陸の兵士の名前……とか?」

そんな一個人はさすがの私でも特定できないんだけど。

「ねえねえ、なのはママ、フェイトママ、むーじゅんってどついうこと?」

『え〜〜つと……』

頭だけ私とフェイトちゃんの方角に向きながら首をかしげて聞いているヴィヴィオ。私も首をかしげたい気分です。いや、本当にむーじゅんさんって誰なの？

「むーじゅん、じゃなくて矛盾な。ほら、高校のとき勉強しただろ？」

「あ、なんだ。矛盾のことね。一個人のことを聞かれてるのかと思ってビックリしちゃったよ」

2階から降りてきた彼がゲーム機をもちながら台所へ向かう。冷蔵庫からリンゴジュースを取り出しコップに4つ分注ぐと私たちに渡しながら椅子に座る。……ところで、いまのどうやったの？

「ヴィヴィオと弁護士が主人公のゲームしてたんだけどさ。なんか色々と気に入ったみたいで」

「むーじゅん！　なのはママはむーじゅんしてます！」

「と、まあさつきからこんな感じなんだよな。指さすヴィヴィオカワユス。パソコンの中にヴィヴィオフォルダ作っというてよかったぜ」

彼の戯言はいいとして……うーん、ヴィヴィオも色々と影響を受ける年ごろだしねー。私としてはあまり彼の近くにいてほしくないんだけど……。

「ところで、ヴィヴィオ。私のどこが矛盾してるのかな？」

「なのはママはむーじゅんしてるの!」

「ふふんっ。いい、ヴィヴィオ。そついうのはね、証拠品がないと意味ないんだよ?」

「……しょーこーひん?」

ヴィヴィオが首を60°傾けて、頭に?マークを浮かべる。

ちよつとだけからかつちやおうかな。

「そうだよ。証拠品がないとヴィヴィオが言ってることはなにも意味ないの」

「でも、おにいさんがなのはママはむーじゅんしてるって」

……カレが?

「フェイト裁判長! この証拠品をみてください!」

「えっ!? ここで私にふるの!?」

ヴィヴィオと目を合わせている隙に、彼はフェイトちゃんに何かを差し出していた。……ちよつとまって、あれって

「これは、高町なのはの部屋から押収したブラです」

「……で?」

「気付かないんですか？ フェイト裁判長。それ、明らかに矛盾してるんですよ。高町なのはのサイズと。いいですか？」

本来高町なのはサイズはそれよりももう少しダウンしてます。

それなのに、彼女は見栄を張って一段階アップしたブラを引出の中にいれていた。それも、奥深くにですよ？　これが意味すること、それはなのはさん俺の下半身と上半身が分離するからあつい抱擁は勘弁してくださいいいいいいい！？」

「対象ヲ……殲滅スル……」

「ヴィヴィオ、こっちおいで」

上半身と下半身の中心に拳を叩き込み、そこからねじ切るように抱きつくのは。それに悲鳴をあげながらタツプするひよつとこ。

そんな現場にいるにもかかわらず、二人で仲良くリンゴジュースを飲んでるフェイトとヴィヴィオ。

今日も彼らは平和に過ごしているようだ。

「それで……矛盾の説明だつたな。そもそも、二人とも矛盾の由來つて覚えてる？」

「高校のとき、誰かさんのせいで授業がロクにできなかった記憶しかないんだけど」

「右に同じ」

「高校のとき楽しかったよな。教科担当の先生巻き込んでウノし

たり、ポーカー大会やったりして」

「ポーカーじゃアリサちゃん化け物並みの強さを誇ってたよね。君が負けたくらいだし」

「……いまだったら勝てるぞ」

珍しく彼の頬を膨れる。 まったく……負けず嫌いで子どもなんだから。 まあ、勝率としては彼よりアリサちゃんが圧勝だったから気持ちはわからなくもないけど。

「けど、ヴィヴィオに矛盾の由来を教えるのは難しいんじゃないかな？ 5歳だよ？」

フェイトちゃんが手をあげながら話す。 うん、確かに難しいよね。なのはだってチンプンカンブンだったんだから。

彼はフェイトちゃんの疑問にどこからか持ってきた伊達メガネをかけ、軽く笑ったあとに人差し指を立て

「ここで俺の登場ですよ。 ギャラドスでもわかるリリカル昔話でヴィヴィオに説明しようと思う」

あれ……？ ちょっと、不思議な単語がでてきたんだけど。

頬がヒクツと動くのがわかる が、ここは我慢することに。 そんな私の心境など知らずに彼はヴィヴィオに絵本を読み聞かせる要領で話しはじめたのだった。

むかしむかし、大きな大きな大陸に大陸全土を支配しているといつても過言ではない国がありました。その国の名は、パン・ツヌイダと呼ばれる国で男女比 4：6　きれいな水においしい空気、あふれる木々に穏やかな気候。とてもとても過ごしやすい国であったのです。王様の名前は、ひよつとこ王。とつてもカッコイイ王様でモテモテで毎晩毎晩給仕の者とアバンチュールな一夜を過ごすナイスガイでありました。

王の右腕と呼ばれる女が王に唐突にいました。

「なあ、王様。　わたし……胸をおつきくしたいんやけど……」
「諦める」

女は仕事をする王様の背後にまわり、バックドロップをきめます。

「すいません。　調子こいてました。　まじすんません。　ちょっと王様の役割になつたくらいで調子こいてました」

土下座でペコペコと謝るひよつとこ王。　なんとも弱い王様である。

「わたしもきにしてるんやで。　やっぱ女の子は胸が大事やし。　生命力といつてもいいくらいや」

「んじゃお前もうすぐ死ぬな。　セミとどつちが早いかぐばッ!？」
「こんどいつたら歯折るで」

王様の側頭部に回し蹴りをきめる女性は、痙攣する王様を尻目に兵

に命令しました。

「ほなら、その商人とやらを呼んでもええで。 王様の了承はとれたみたいやし」

「いや……主はやて……じゃなくて、はやーて様。 それって了承とったというのですか？」

「ちゃんととってるで。 なあ、王様？」

「……もう、好きにしてください」

いじけてポケットから携帯ゲーム機を取り出すひよっとこ王。

「よーし、それじゃ了承もとれたし……その商人を王間に通すんや！」

ノリノリなはやーてに溜息をつきながら、兵士は商人を通すのであった。

「あーはいはい、商人ね、商人。 ぶっちゃけどうでもよくなってきたから早めに済ませようぜ」

玉座に座りながらも、めちやくちややる気がなくなった王様はどうでもよさそうに、兵士に銘じて商人を自分の前に登場させることにした。

右側にロリっ子の兵士を、左側にポニーテールの兵士が付き従うなか、二人の商人が王様の前に片膝をつきながら話し始めた。

「お会いできて光栄至極にございます。私の名前は、ギャラドスなのはと……ギャラドスなのは あれ？ ちよつとお！ ギャラドスって言おうとするとギャラドスに変換にされるんだけど！ どうなってるの！ これ！」

「お、おちついてなのは！ 王様の前だよ！？ えっと、失礼しました。私の名前は、フェイソンと申します。……フェイソンと……フェイソン……もうフェイソンでいいです」

栗色の髪をツインテールした女性、ギャラドスは一人で空中にむかつて抗議をはじめ、金髪のツインテールの女性、フェイソンはすでに悟りをひらいたように事務的な目をしていた。

そんな二人を目の前にして、はやーてが一步前にでて軽やかな笑顔を浮かべる。

「まあまあ、こっちの王様はすっかりやる気なくしたみたいやし」
「」

「商人、スリーサイズと愛用のパジャマ、シャンプーと石鹸のメーカーにパンツの色とシミの数、周期はどれくらいで訪れるのかを原稿用紙10枚で書いてくること」

「お前だまつとれや」

「ほむッ！？」

王様の顔面にためらいなく膝蹴りをするはやーて。鼻血で床が汚れるが、おつきの者も慣れているのかほんわかおっとりした女性、シャ・マールがモップをもって床に落ちた血を拭きはじめる。それを横目にはやーては話す。

「ほんで、きょうはどんな要件できたん？ 商人なんやろ？」

はやーての声にフェイソンは答える。すでに二人ともちゃんと姿勢を正しているところを見ると、根は真面目なのかもしれない。

「今日は私たちの国に伝わる最強のバストアップブラを是非王様にお見せしたく馳せ参じた次第です」

恭しく頭を下げるフェイソン。

「いや、そんなことどうでもいいから君のパンツが現在シミを作っているのかについて小一時間ほどはなそうじゃ」

「だまつとれ言ったやろ！」

ゴキツと肩を脱臼させるはやーて。王様はあまりの痛さに床を転がり、シャ・マールが置いたバケツをひっくり返す。シャ・マールはにこにこ笑顔でひょっとこ王の顔をモップで綺麗に磨いていく。

「ふむう……個人的にそのバストアップブラはきになるな。どんなものなんや？」

「はい、既に私達は二人とも身に付けております」

『おい、それって……もしかしたら合法的にあの二人のアレをみれるんじゃないか?』

どよどよ……ざわざわ……と王間が揺れる。

「おちつくんやッ！ アホども！　うちかてブラは着けとるで！　うちかて美少女やないか！」

『……………』

「なんで黙るッ!?!」

「ひっこめー！　無乳ー！」

「ぶちのめす！　お前だけはぶちのめす！」

シヤ・マールによってきれいに磨かれたひよつとこ王は、男兵士たちの集まりの中へ紛れ込みながらはやーてに向けて禁句を叫ぶ。

追いかけるはやーてに、逃げるひよつとこ王。

突如現れた魔法の糸に足を絡め捕られ転ぶひよつとこ王に、はやーては馬乗りになって顔を中心に殴っていく。その表情はもはや機械的で思わず男衆が3歩さがるほどであった。

やがて満足したのか、はやーては顔についた血を拭きながらフェイソンに改めて話す。

「それじゃ、いま二人とも最強のバస్తుpブラはつけとるという

ことか。……うん、確かにうちより胸が大きいし、これは買いかもしれへんや」

「まったー!」

思案顔のはやーての後ろにいたひよつとこ王が部屋全体に震えるほどの声で叫んだ。ひよつとこ王は鼻血を垂らしながら、立ち上がりフェイスンをまっすぐみつめる。

「ちよつとまっけてほしい。フェイスン」

「は、はい。……なんですか?」

「一ついいかね。その最強のバストアップブラは、どれくらい最強なんだ?」

射るような視線でフェイスンを見るひよつとこ王。その視線にたじろきながらもフェイスンは答える。

「えーっと……私の見た目どおり、大陸で一番大きくなります」

「……それは誰にでも効果があるのか?」

「はい、間違いなく」

フェイスンの答えを聞いてひよつとこ王は肩をすくめる。

「ふう……。それは嘘だな。だって大陸一の大きさになるのなら、横の女性も君ぐらいの大きさになってなきゃおかしいじゃないか!」

「……ッ!? そ、それは……! たまたまこの女性の胸がブラをつけてもかわらないだけで……!」

「ねえ、フェイトちゃん。 もちろん冗談だよな? ほんとうはそんなこと思っていないよね? どうしていつもこういときはなのはに攻撃が集中砲火で飛んでくるの?」

「異議あり!! フェイソン、それはおかしいよ。 君は先ほどこう証言したじゃないか。 『間違いなく、大陸一の巨乳になれます』と!」

フェイソンに向かって指さすひよっとこ王。

「……ぐッ!」

「さあ、君はこれをどう説明するんだい? 無乳であるはやーてに夢をもたせて罪は重いぞ?」

『ひよっとこ王が恰好よくみえるぞ……、流石王様だな……!』

『でも、はやーて様が釘バットもって素振りはじめたぞ……!』

『……さらばひよっとこ王』

男衆がざわめく中、フェイソンは一言つぶやいた。

“私の負けですね……”と。

こうして世の中に一つの言葉がうまれた。

「と、まあこんなもんかな。 って、どうしたの？ 二人とも
すんごい微妙な顔してるけど」

「いや……そりや微妙な顔にもなるよ。 なに、この茶番」

「いやいや、これはあくまで昔のお話だから俺たちとは一切関係
ないよ。 いや、本当だってば」

必死で首を横に振るひよつとこ。

それでも二人の顔はキツく、いつの間にか膝に座っていたヴィヴィ
オはとても楽しそうにニコニコと笑いながら指さすのであった。

「おにいさんに異議ありー！」

29・ギャラドスでもわかるリリカル昔話（後書き）

正直、なにやりたかったんだろう。書き終わった後に思いました。

30・おそばつくるよ！

三人にわかりやすく矛盾のお話しをしたら、二人からは微妙な顔をされ一人からは異議を申立てられる始末。　　いったいどうなってるんだろうね。

それはそれとして、いまは16:00。　夕方とも呼べずお昼ともいえない時間帯なのだが、俺たちは四人なかよくTVをみていた。　内容はグルメ旅番組でミッドのおいしい料理屋を紹介しているみたいだ。

『このお店のおそばはミッドで一番おいしいと断言できるのでしよう！　それに作る主人も20代後半の天才イケメン主人！　これはお客様が絶えることがないのも頷けます！』

画面内では化粧気の強いリポーターが主人と蕎麦を交互にみながら何やら興奮している最中である。

「な〜にがミッドで一番だ。　蕎麦庵のおやつさんの蕎麦のほうが美味いに決まってんだろ」

「あそこはおいしいよね。　あそこのえび天大好き！」

「私はかきあげとか好きかな。　キャロとエリオにも食べさせたいんだけどな〜……」

蕎麦庵とは俺たち三人が見つけた、蕎麦専門のお食事処だ。　蕎麦一筋30年のおやつさんが一から作る蕎麦は普段料理を作る俺でも

惚れるほどの腕前で、何度か店にお邪魔して習いに行ったほどだ。

「そつえば、あそこの主人って私達と同じ日本出身なんだよね？
なんかいまでも疑問に思っちゃうよ。地球には魔法技術とかな
いのに……よくミッドに来れたよね」

「さあな。俺たちだって全部知ってるわけじゃないからな。
俺たちが知らないだけで、おやつさんめちゃくちゃ凄い人かもしれ
ないぞ？」

「うーん……もしかしたらなのは達の先輩なのかもしれないね」

まあ、おやつさんのことだからそれはないかもしれないけど。

正座してるフェイトの膝の上に座っていたヴィヴィオが、俺の足を
トントンと叩いてくる。いちいち仕草が可愛い子だ。

「ヴィヴィオ、おそば食べたい！」

「え？ このイケメン主人の蕎麦？ 俺が気に入らないから此処に
は絶対いかないけど」

「ちーがーうー！」

「単純にお蕎麦食べたいんじゃないかな？ ヴィヴィオお蕎麦食べ
たことないだろうし」

ヴィヴィオの頭を撫でながらフェイトが喋る。

ああ、なるほどね。そういうことか。

「でも、蕎麦庵って定休日じゃなかった？」

「ふえ……」

「ああ！　だ、大丈夫だよヴィヴィオ！　なのはママがなんとかするから！」

なのはが告げた残酷な答えにヴィヴィオは泣きそうになる。それに慌てたなのははできない約束をすることに。　おいおい……定休日だっていっただろうが。

「あとはこの人がなんとかしてくれるから！」

「投げやりにもほどがあるだろう！？　数秒前の約束どうしたっ！？」

「うう……やっぱ、ダメ？」

ぐはっ！？　上目使いのなのはに思わず吐血する。　やはりというか、可愛い子がこういった仕草をすると効果抜群で死んでもいいとさえ思えてしまう。　それが惚れた相手ならなおさらだ。　なのはの場合、狙ってやってないから余計に刺激が……。　ちなみに狙ってやってるのがはやてだ。　あいつは自分が可愛いのをわかってやってるからタチが悪い。

「まあ、おやつさんに電話して材料だけわけてもらえば、あとは家で作れるだろ。　簡単なものしかできないし、おやつさんの足元にも及ばない出来にはなるけどさ」

「うんうん！ それでもいいよ！ ね、ヴィヴィオ！」

「うん！」

なのはとヴィヴィオが二人してはしゃぐ。それをフェイトと見ながら、肩をすくめたあと携帯でおやっさんの番号にコールした。

「いや、ほんとすんません。定休日なのにお邪魔しちゃって」

「まったくだよ、バカ男が。こちら新しい蕎麦を作るのに忙しいんだぞ。ほら、何人分だ？」

「えーっと」

「いまなら20人特価で安くできるが？」

「……足元みやがって。おいくら？」

おやっさんは手をパーの形にして前に出す。しかたなく持ってきて金額を手のひらに置くことに。

「足りないぞ」

「出世払い」

「お前、死んでも職につかないだろうが」

足りない金額はおっさんに請求させることにした。

蕎麦庵から大通りに移った俺は、大量の荷物を眺めながらどうしようかと頭をひねった。

「それにしても、20人分は重いぞ。流石の俺でも持てない……」
魔法でも使えれば楽なんだろうけど……いかんせん魔法を使えない身なので頼ることはできない。

俺が材料をみながら、どうしようかと悩んでいると奇跡的かつ偶然的に警官ルックスのおっさんが、見回りしながら歩いていた。おっさん、家に請求書くるけど頑張つて！しかしこれは素直に嬉しい。おっさんの超人的パワーなら20人分くらい軽くもてるはず……！

「あゝ！こんなところでミッドの一市民が困ってるぞー!?」

おっさん、こちらを振り向き俺の姿を確認して見回りに戻る。

「うわゝ！20人分の蕎麦の材料を抱え家に帰るなんて無理だよー！だれか助けてくれないかなー？」

おっさん、シカトしてタバコに火を点ける。

「こんな幼気いたいけで可愛い男が困ってるんだけどな？誰か助けてくれないかなー？」

おっさん、笑いながらこちらを指さす。

プチンッ

「学校で制服プレイが大好きな局員とつとこいやボケ！」

「まったく、都合のいいときだけ市民を名乗りおって」

「これぞほんとのご都合主義というやつさ」

「黙れ、ゴミ」

瞬歩できたとは思えないが、俺が言葉を放った瞬間にはおっさんが傍にいて、やれやれ……と頭を抱えていた。ところでさ、いまためらいなく俺のことゴミっていったよな？

「それで、どうしたんだ。かなりの大荷物じゃないか」

「うちの姫が蕎麦をご所望だからさ、たったいま材料買ってきたんだよ」

「それにしても多くないか？ かなりの量あるぞ？」

「ついに子どもができたんだ。可愛い子どもたちが」

「逮捕する」

「いやあああああ！ おっさんが俺の胸を愛撫してるっつっつっつうー！」

「どう考えても手を握ってるだろ!？」

いや、それも聞きようによってはイケナイ場面になっちゃうんだけどな。

閑話休題

「んじゃ、運んでくれ。俺はポケットに手を突っ込んで家まで歩くから」

「お前ももたんか、バカもん。まったく……やはりお前は変わらんかったな」

「やつは俺には、これが合ってるからさ。良い大人はなのはトフエイトに任せることにしたんだ」

「お前が良い大人になってくれればミッドも平和になったんだがな」

「とか言っちゃって、本当はおっさんには分かってたんだろ？」

俺がこの答えを出すことが。

おっさんは何も言わず、肩をすくめるだけにとどめた。

「まあ、それはそれとして。おっさんも食ってかね? 20人分もあるからさ、人呼ばないと食べきれないんだよ」

俺となのはトフエイトとヴィヴィオ。ヴィヴィオが一人分食べれるとは思えないし……。あ、スカさんとかはやてとか呼ぼう

かな。嬢ちゃんとスバルも、なのはを通して呼んでみよう。フ
イトもエリオとキヤロに食べさせたいとかいつてたし。腕は違
うけど、材料は一緒だからなんとかなるだろう。

ここまで考えて、おっさんには家族があることを思い出す。帰っ
たら奥さんと娘さんとイチヤイチヤしながら夕食食べるんだから、
俺が誘っちゃダメじゃん。いまの誘いなしの方向にもっていかな
いと。

「あー、悪い。おっさん家族で夕ご飯食べるよな。やっぱいま
の誘い」

「なあ、ひよつとこ。嫁さんと娘が俺を置いて旅行に行ったんだ
けどよ……。どっかに独りで食べなくて済むところ知らないか…
…?」

「いまの誘い、ありの方向で」

おっさんがどんどん惨めになっている気がしないでもない。

30 おそはしへるよー！(後書き)

おっさん……(、……)ウッ……

31・おそば準備してよ！

「おっさんが後ろからピクミンのようにストーカーのようにヤンデレ彼女のようについてくる。瞳の濁った狂喜の瞳で、紫色に変色した唇を舌なめずりし、凶器をもちながら狂喜に身を包まれながら狂気に体を預けながら俺の後ろをゆっくりとつかず離れずの距離を保ちつつ歩幅を合わせるように、手足を合わせるように呼吸を合わせるように瞬きを合わせる。次第に距離は詰められていく。彼の瞳は心は既に俺にしか向いていなかった」

「なに言ってるんだお前」

「……この人物をなのはとフェイトに変えるだけで俺はすごく幸福になれるのにな。おっさん物語にでてくんなよ」

「お前が唐突に喋りだしたんだろうがッ!？」

「そんなことより、しりとりしようぜ。しりとの“し”」

「しね」

「ネカマ野郎」

「はげろ」 ヒジ打ち

「黙れ、円形脱毛ハゲ野郎」 足の小指踏む

おっさんがローキックを繰り出すので、俺も膝蹴りで応酬する。

ドスッ！ ガスッ！ バキッ！ ゴキッ！

『やんのかてめえ！』

「あのー……家の前でリアルファイトはやめてくれる？」

丁度家の前でリアルファイトしようとする俺たちを、玄関からなのはがめんどくさそうな目でみていた。そんな目で見つめられると素直におしゃべりできなくなるぜ。

「というか、その大量にある材料はなに？　もしかして全部蕎麦？」

「もしかしなくても全部蕎麦」

なのはがサンダルを足にひっかけながら俺のほうに向かってきたので、おっさんとともに材料を置く。なのはは20人分の蕎麦の材料をみながら

「なんでこんなに買ってきたの……？」

とっても怒った顔で俺のほうをみてきた。まあ、当たり前だね。事前になのはから貰ったお金じゃこんなに買えないし、そもそもこんなに食べようとは思わないし。

なので俺は道中考えていた言い訳をすることに。

「違うんだ。灰色の蕎麦の妖精さんが潤んだ瞳でこちらをみてきたのでごめんなさい。　つついおやっさんにのせられました」

なのはさんが頬をヒクつかせながらこちらをみてきたので、即座に

謝ることにした。　なのはさんは基本的に謝ったら許してくれる人だ。　覗きは許してくれないけど。

「まあまあいいじゃん。　また祝賀会のときみたいに人呼ぼうぜ。　ヴィヴィオもウーノさんにスカさんに会いたいだろうし。　というか、スカさんの場合は俺が会いたい。　六課の面々も呼んで盛大に蕎麦パーティーしようぜ」

蕎麦パーティーなんてちょっと年寄くさいかもしれないけど、これははなかなか乙だと思う。　問題は、大喰らいなスバルとエリオだ。　蕎麦は20人分しかないので、全員に渡らせると残り少なくなってしまう。　……うーん、おにぎりでも作るか。

「なのは、おにぎり作るの　やっぱいいや。　はやて先に呼んであいつに手伝いさせよ。　あいつ料理作るのうまいしな」

「ねえ、それって言外に私がおにぎりも作れないっていいたいの？」

「なのはちゃんに問題です！　おにぎりを作る際に手につけるものなんでしょう？　1　お酢　2　胡椒　3　コーンポタージュ！」

「4のお砂糖！」

なにいつてんだこいつ。

荷物を家の中にいれたおっさんは、見回りに戻るといつて早々と来た道に戻ってしまった。　ほんと、仕事好きだな、おっさん。
この周辺は変人奇人が多いから大変だろうに。

ちなみになのははちよつと恥ずかしそうに顔を赤くさせながら、フ
エイトと二人でパソコンを使ってなにか調べていた。砂糖と塩を
間違えるなんてカワイイやつでしょ？ ヴィヴィオを二人の間に座
らせて『おいしそう〜！』なんて言いながら画面をみる二人。な
のはとフエイトもおいしそうです。 あ、よだれが……。

「あぶねえあぶねえ。 まだセツトアップには早い時間だ。 それ
はそうとはやてに連絡取らないと……」

携帯に入れてある電話帳を開く。

携帯の電話帳はフォルダごとに分けてある。 何分、知人が多いも
ので。

「え〜つと…… はやての番号は『おっぱい残念賞リスト』にいれて
たよ〜な。 あ、発見」

携帯のカメラに向かってアイドルばりのスマイルで横ピースをきめ
てるはやての顔写真を眺めながら、俺はコールした。

1コールのあとにはやての声が聞こえてくる。 ん？ ちょっと騒
がしいな。 もしかして、移動中か？

『おー？ どしたん？ いま、ヴィータとイケナイことしてるんや
けど』

「パンツ脱ぎ捨てた」

「きゃあああああああ！？」 なのはの頭に何か温かいものが

！？ フェイトちゃんにとって！ お願いとって！」

「む、無理だよなのはッ！？ これは特A級のロストロギアだよっ
！？」

「パンツであれだけ騒げるなんて可愛いなあ。 あ、あいつら俺
の幼馴染なんすよ！」

『だまつとれ、動くロストロギア』

「私の愛馬は凶暴でね……」

『ちっさ……』

こいついつか絶対泣かす。 ヒイヒイ泣いて懇願させる。

「それはそれとして、ちよいと家にきてくたせえ。 今日大量に蕎
麦買ってきたから六課やス力さんたち呼んで蕎麦パーティーしよう
と思ってるんだ。 でもエリオとスバルいるじゃん？ このままでは
絶対に足りないから、なんか作ってくれ」

『なるほどな。 ほなら今すぐ行くで。 食材も一緒に買ってくる。
蕎麦ってことは和風に仕上げるんやろ？ 今日の夕食は』

「流石はやて、話が早い。 頼めるか？」

『オツケーオツケー』

それだけ聞いて電話を切る。 するとちょうどいいタイミングでヴ
イヴィオが俺の足にしがみついていた。 なにこの可愛い小動物

……あれ？ ヴィヴィオ？

「なあ、なのはにフェイト。六課の面々にヴィヴィオのこといたっけ？」

『……あ』

パソコンの前で固まる二人。

そんな二人と俺の体を使って遊んでるヴィヴィオをみながら俺はあ
ることにきがついた。

ヴィヴィオ金髪だし、フェイトと俺の子どもとかいけるんじゃない？

31・おそは準備してよ！（後書き）

ノリノリなはやて。 可愛いなのフェイ。 思考がアレなひよつと
こ

32・おそばまだ!?

なのは達が固まるのは見ながら俺はヴィヴィオの耳をつまむ。こ
うするとヴィヴィオはこしょくつたいのか肩で耳をさする仕草をと
る。これがなんとも可愛らしい。

さて、そろそろはやてが此処にくる頃合いだと思っただが

ピンポン

「おー、ちょうどいいタイミングじゃねえか。　はいはい!」

足早に玄関に赴く。　ヴィヴィオも来客に興味あるらしくその小さ
い足で俺と一緒に併走しながら玄関までの距離を走る。　玄関のド
アノブをひねり開けた先には、幼馴染にして一番ウマが合うかもし
れない女、八神はやてが片手を上げながらこちらをニコニコとみて
いた。　黒に近い茶で、なのはやフェイトよりも短く揃えられた髪
だからか明朗快活というイメージをもつ。　実際明朗快活なのだが、
なのはやフェイトたちが所属している機動六課の部隊長でありな
がら、一番仕事をサボる女である。

「わるいな、付き合ってもらって」

「ええでー、それくらい」

手に持っていた買い物袋を受け取る。　野菜や肉、魚など色々を買
ってきたようだ。　人数が人数なのでかなりの量であるが……はた
してこれで足りるかな?　足りなかったら買いに行くか。

ドアを全開まで開け、はやてを中に招き入れる　ところではやての視線が俺の下腹部に注目されていることに気が付いた。

「おいおい、はやて。　いくら俺とお前の仲だからって会ってすぐ合体はマズイって。　俺にはなのはとフェイトという心に決めた二人がいるんだからさ。　いや、はやてがどうしてももっていうのならしょうがないんだけどね？　俺もさ、なのはとフェイトのことを考えると心が痛いけど、しょうがないような気がするんだ。　うん。　やろうぜ？」

スマイルを浮かべてはやての手を握る　直前に気付いたのだが、いつの間にから本ともが指が反対方向に曲げられていた。

「うおおおおおおおッ！？　いつの間にか指が大変なことにッ！？」

「え？　どしたん？　あゝ、それ痛いで〜」

「お前だろっ！？　お前がやったんだろ！？　頭おかしいんじゃないかねのかっ！？」

「お前にだけは言われたくないわ」

はやてが溜息を吐きながら、俺の指に自分の手を包み込む。　それから数秒包み込んだあと、はやてがその手を離すと指はすっかり元通りに戻っていた。　おかえり、俺の指。

「……魔法ってすげえな」

「わたしが凄いや」

まあ確かにそうだけどさ。

「それより……さつきから気になってるんやけど……その娘、だれ？」

はやてが俺の下腹部を指さす。正確に言えばその近くにニコニコと俺の手を握りながらはやてを見ているヴィヴィオを指さす。

「ああ、この娘はヴィヴィオ。俺とフェイトの子どもでさ。ついにできたんだ！」

「時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課所属 八神はやて二等陸佐です。拉致監禁の罪で逮捕します。同行してもらえますね？」

「予想通りの反応ありがとう。そういうところ好きだぜ、はやて」
それと冗談だから手錠つけないでくれるかな？

「まあ……なんというか……新しい家族……かな？ ヴィヴィオ、このママたちよりもおっぱいが残念なお姉ちゃんに挨拶は？」

「こんにちは！ ヴィヴィオです！」

「こんにちは。なのはちゃんとフェイトちゃんの幼馴染の八神はやてです。ヴィヴィオちゃん、よろしくな。えらいな。その年であいさつなんてできて。なのはちゃんとフェイトちゃんのお教育がいいんやな。ミジンコ以下のゴミがいる家なのにこんなニコニコした笑顔を浮かべれるなんて……はあ、もらってええ？」

「その前に謝れよ、俺に」

「……え？」

なんでこいつは不思議そうな顔で俺のことは見ることができなんだ。

「残念ながら、ヴィヴィオはうちの天使なのであげられません。
なのは&フェイトとガチで戦う覚悟があればどーぞ」

「うつ……ガチはあかで、ガチは。 アンタとならガチで戦うけど」

「……俺も一応、お前らが守る範囲の中にはいつてるからな？」

「管理局は人々の平和を守ります（ひよっとこは攻撃対象で）」

「どんな方向だよっ!？」

か弱い俺がすぐに負けちゃうじゃないか。

「はっは。まあ、冗談や。 ひよっとこの場合、周りがアレすぎて戦おうとも思わんで。 人外やら化け物やら変態やら魔物やらが攻めてくるかもしれへんしな」

「その内の7割が父さんの知り合いだけだな。 主に人外やら化け物やら魔物やら。 本当にすごいのは俺じゃなくて父さんだよ」

世界は広い。 なんて言葉があるが、あまりにも広すぎる。 そしてその中にはもちろん人じゃないモノたちも多く存在してる。 吸

血鬼や龍。 食人植物や人の姿をしてるけど明らかに人とは異質な存在。 そんな奴らが世界には堂々と跋扈していたりする。 俺が地球からでなければ知らなかったことだ。 そしてもっと知らなかったこと。 それは、父さんがそんな存在とも知り合いで友達だったということである。 色々と規格外だった存在だけど、どこまで規格外なら気が済むんだ……。 というか、父よ。 比喻ではなく本当に魔法使いなんて存在じゃなかったのか？

「ひょっとこより規格外な存在なんてうちには扱えんで……」

「……母は偉大だな」

笑顔を浮かべながら父さんにクラッチをきめていた母さんを思い出す。 もしかしたら母さんSSSランクだったかもしれない。

「まあそれはそうと……ずっと思ってたんやけどな？ そろそろパンツ履けよ」

「あれ？ やっぱズボン越しでもパンツ履いてないのがわかる？」

「当たり前や。 そんなもん一般常識やで」

彼と彼女の常識を世間一般的な常識にされると困るのが大半の意見である。

「いや、でもさ。 ミッドに来て驚いたことの一つだよ。 ズボン履いたままパンツだけ脱ぐ方法をみんなが会得してないってこと。 中学のときに男子は必修だったんだが……」

「わたしはスカートやからな。 そんなスキル必要ないで。 まあ、

習うのは自由だったけど」

「好んで習うほどでもないからなく、女子の場合」

うんうん、とふたりして頷く。

そんなとき、俺の袖をクイクイッと引く娘がいた。言うまでもなくヴィヴィオである。はやてと話し込んだじゃったし……退屈させたかな？

「あゝ、ごめんな。もう中にはいるから」

「ううん、ちがうの。ねえねえ、スカさんたちくるー？」

ああ、そういえばヴィヴィオはスカさんには会ってないもんな。そりゃスカさん達に一番会いたいのはヴィヴィオだよな。

無垢な瞳を見ながら、俺は携帯を取り出しスカさんの番号にかける。ちなみに顔写真は幼女のパンツをとって狂喜乱舞している姿である。

「あ、もしもし？ スカさん？」

『おお、ひよつとこ君か。どうしたのかね？』

「あー、ちよつとまって。いま代わるから。はいヴィヴィオ。スカさんだよ」

スカさんの声がいつも通りなのを確認し、ヴィヴィオに携帯を渡す。ヴィヴィオは携帯を受け取ると？マークを浮かべながらパンツを

もって狂喜乱舞しているスカさんの顔写真をマジマジとみていた。

「いやいや、ヴィヴィオ。あんまり見るとスカさん可哀相だから。ヴィヴィオに見せたくない一面がスカさんにもあるからさ」

例えば幼女のパンツをとって狂喜乱舞している姿とか。

俺はヴィヴィオの耳に携帯を当てる。

『ひょつとこ君？ どうしたんだい？ 返事がないなら私が書いた官能小説をだね 』

「あ！ スカさんの声が聞こえるよ〜！」

『うおっほん！ やあ、ヴィヴィオ君。ちゃんと良い子にしているかな？ 私のほうは偉大な研究のレポートを書いていてね』

スカさん今更遅いよ。偉大なレポート＝官能小説という式が成り立ったよ。

「ほら、ヴィヴィオ。スカさんに、来てくれるか聞こうぜ」

「うん！ ねえねえ、スカさん？」

『なんだい、ヴィヴィオ君。おもちゃが欲しいのかい？ ちよつとまってくれないか。いま幼女が使っても問題ないおもちゃを作るから。大丈夫、ウーノが運んでくれると思うだろうし』

「い〜ら〜な〜い〜！」

スカさん少し黙ってくれよ。そう思った瞬間、俺の願いが届いたのかスカさんの電話口から床に倒れるような音が聞こえてきた。たぶん、ウーノさんあたりが黙らせたんだろうな。

「ほら、ヴィヴィオ。いまがチャンスだよ」

「うん！　ねえねえ、スカさん。おそばたべるー？」

「ん？　蕎麦かい？　いや、今日の夕食で蕎麦は食べないが……。ウーノ、今日の夕食は？」

スカさんが隣にいるであろうウーノさんに献立の内容を聞く。　なんだかヴィヴィオが泣きそうなんだけど……

俺はヴィヴィオの耳に当てていた携帯を自分の耳に当て、スカさんにヴィヴィオの真意を説明することに。

「違うよ、スカさん。　ヴィヴィオが蕎麦を食べたいらしくてね。俺が大量に買ってきたんだ。その量があまりにも多いので知り合い呼んで蕎麦パーティーしようと思ったのさ。それでヴィヴィオは真っ先にスカさん達に来てほしくて電話したのさ」

『ヴィヴィオ君が私に……？』

「そうだよなー、ヴィヴィオ」

「うん！」

そりゃ俺なんかよりもよっぽど会いたいよな。　家族みたいなもんだし。

「それでスカさんの返事は？」

俺の問いに電話越しからは沈黙が返ってくる。と、思った瞬間

『うつほおおおおおおおおおおおお！！行く！
ヴィヴィオ君のお土産もって絶対にいかせてもらおう！！　ウーノ
！　すぐに準備だ！　まずは清潔感を出すために風呂へ！』

「「いつたあゝ……！」」

スカさんの大音量に俺とヴィヴィオは思わずうずくまる。スカさんはしやぎすぎ。　気持ちはとてもわかるけど。

「それじゃスカさん、まってるよ」

『まってるくれたまえ！　最近開発したメ　ロットを颯爽と登場してくるから！』

管理局員がいるのによくやろうと思うな。　押収されて終わるぞ。
それかおっさんが破壊して終わるぞ。

はしゃぐスカさんの声を聞きながら終了ボタンを押す。

「よかったなヴィヴィオ。　スカさんたち来てくれるってよ！」

「わーい！　なのはママー！　フェイトママー！」

なのは達がまつ所へ走っていくヴィヴィオ。　ヴィヴィオの笑顔を見ると、こっちまで嬉しくなってくる。

そんなヴィヴィオの姿を見ながら、はやてをすっぽかしていたことに気が付いたのだが、とくに慌てることもなくはやてのほうに視線を向ける。

「どうだった？ ヴォルケンのみんなは来れるって？」

「もち。 たったいま電話で確認とってきたで。 エリオとキャロも一緒につれてくるから心配なしや。 スバルとティアはなのはちゃんに電話させよ。 面白いことになりそうやし」

ピースするはやてにこちらもピースで返す。 用意がいいはやてのことだから、あの間に電話で確認してると思っていました。 そして同じことを考えてました。

「んじゃ、中にはいつてくれ。 期待してるぜ、はやて」

「まかしときー」

はやての手をとって中へと招く。

さてさて……あまり時間もないので早く作らないとな。

32・おそばまだ！？（後書き）

雲の上の存在

それがひょっとこの父親である

そういえば、みなさん中学時代に習ってないみたいです。 パン
ッだけ脱ぐ方法。 ちよっと驚きました。

33・食べる前にスパイスを

台所にはやてと二人、材料の確認をしながら世間話をする。ちなみにヴィヴィオはなのはとフェイトの元へと一直線に走り、そのまま帰ってこない。大方、二人の間に挟まれながらパソコンでもしてるんだろうな。

「さて……作るものも決まったな。手打ち蕎麦だから蕎麦以外の料理ははやてに任せるけど、よろしくな」

「誰に言ってるんねん。わたしかて腕は落ちてへんよ」

腕まくりしながら力強く答えるはやて。はやてがここまで言うのだから実際に落ちてないんだろうな。むしろ上がってたりして。

はやてが準備する横で俺も蕎麦の準備をすることに。

買ってきた材料を台所にのせ、大きな大きな鉢をもってくる。

昔から蕎麦の基本は、一鉢、二延し、三包丁と呼ばれているそうで、その名前からもわかるとおり蕎麦の手順は大きく分けると3つからなる。1つ目が鉢にそば粉と水をいれ、こねまわって玉にすることだ。なんでも、このはじめの作業で蕎麦の良し悪しは決まってくるそうなので俺も一番気合がはいるところだ。ヴィヴィオなのはとフェイトの喜ぶ顔がみたいしな。次に延しだが、延しは鉢で玉にしたものを麺棒を使って延ばしていく作業にあたる。このときに出来るだけ細くしておくといいみたいだ。しかしここで問題になってくるのが、玉のほうである。玉が均等に綺麗に丸くならないと延しの作業でうまく延ばすことができないみたいだ。

やはりそういった意味でも、1の工程である鉢の作業はかなり重要なものだといえる。そして最後にまっっているのが包丁でのカットである。これは一定の長さ太さになるように計算して切らなければいけない。

総合的にいうと、どれもこれもなかなか難しいわけで、それに加えて20人分をいっぺんに作るわけになるのだから

「こねるのが果てしなく難しい……！」

職人でもなんでもない俺は苦戦するわけですよ。いやはや、ちょっと分量が多すぎたかな……やはり四人分のほうがよかったかも……。

「わたしには視えるでー。みんなが誰かさんの作った蕎麦をおいしそうに食べる姿がなー」

「うつ、うるさいな。ちゃんとやりますよ！ いまのでコツ掴んだから！」

くそっ……今度もう一回習いに行こう。

水はたしながらこねていく。

はやては横で買ってきた魚の身を蒸らしたり、刺身、茶わん蒸し、ナスの山椒焼きに簡単浅漬け、冷奴、なんてもを作ってる最中である。たぶんかき揚げとか天ぷらとかの揚げ物系は食べる寸前で揚げるんだろっな。出来立てが一番うまいし。それにしても……あいかわらず料理の腕前やべえ……。

はやてを横目に必死にこねて玉にしていく。ここを失敗したら後の作業が全てダメになってしまうので流石の俺も真剣にならざるおえない。

「なー、ひよつとこ？」

「後にしてくれ。お兄さん真剣中なんだから」

「真剣に玉なんか転がして……」

やめろ、その表現

「なーなー、暇やから話でもしようや」

足で俺をつついてくる。こいつ……！ 余裕があるからって好き勝手してくれるな。いや、余裕がなくても好き勝手するけどさ。

あくまで目線と意識は玉に集中したままはやてとお喋りすることに。

「なんだよ。片手間で話せるような話題にしるよ？」

「え……。それじゃ、最近どうなん？ なのはちゃんとフェイトちゃんとは」

「子どもも出来て順風満帆な生活を送っております」

「という夢を見たひよつとこであった」

否定できないのが悲しいところだ。

「まあ、ぶつちゃけ進展ないな……。いつも通りにヴィヴィオが加わっただけだよ」

「ふ〜ん……。それにしてもよくもつな。なのはちゃんとフェイトちゃんへの愛情」

「残念ながら、この想いだけは偽りたくないのね」

「それで進展は？」

「……ないです」

「どんだけヘタレなんや」

はやてが溜息を吐く。

「俺だつて困ってるよ、俺の未来予想図では今頃ギャルゲー主人公のようにモテモテで家族公認で周囲公認のカップルになってるはずなんだからさ」

「現状をみると可哀相すぎて涙が出てくるで」

「けど、俺だつて告白してるぜ？」

「TPOって知っとるか？」

「それくらい知ってるよ」

はやてが恐怖するように俺のことをみてくる。いや、TPOくらい知ってるから

「知っててそれなら真正のバカやで。 まったく……そんなことじゃ乙女心もわかってないやろ？」

「ぶっ……はやてが乙女心とかいいと思いますから、その手に持っている包丁をどうかしまってください」

ついつい笑った瞬間はやてが無表情で包丁を俺に向かって投擲しようとした。 なにこの人。 なのはより危ないぞ。

はやてはバカを見るような目で可哀相な目でイケメンの俺に説教でもするかのように指を突き付けて言ってきた。

「ええか？ 女の子ってのはとっても繊細なんやで。 アンタみたいなバカとは違うんや。 もっと女の子の気持ちとかも汲み取らなアカンねん」

「たとえば？」

「え？ えーっと……そうやなあ……例えば、なのはちゃんとフェイトちゃんVS次元世界の全員とかになるとするやろ？ それならどっちの味方をする？」

「勿論、なのはとフェイト」

「そういうことや」

どういうことだよ。

すみません。 乙女心のわからない俺に誰かはやての言いたいこと

を理論的に説明してください。

「そういったことに乙女は弱いんですよ。よく覚えておき」

ふむ……ようはアレか。味方がいないときに助けたら好感度が上がるぞ！　ってことでいいのか？　なるほど、乙女心ってちよるいな。そんなんで落とせるなんて随分と股がゆるい女みたいだな。

「キヤー！　この人私を助けてくれた！　抱いて！」　ってことだろ？　だとしたら乙女心なんてわからなくていいや。まあ、俺自身は当てはまってるかもしれないけどさ。

「けど、自分で考えてなんやけど……次元世界丸々相手取るとなるとかなり大変なことになるな！　これを自分に置き換えるとかかなり苦しくなるで」

ふむ……確かにそうだよな。いくらはやてが強くても流石に次元世界相手はキツイだろ。けど、

「そのときは俺呼べよ」

「……は？」

「いや、だからさ。次元世界相手取るときは俺呼べよ。戦闘なんざできないけど、お前の隣で飯食うくらいはできるだろ？」

ハトが豆鉄砲喰らったような顔でこちらをみてる。

「……なんで？」

「『……なんで？』　ってことはないだろ。なにその反応。ちょ

つとショックなんですけど」

「いや、だって。次元世界やで、次元世界。恐ろしいで?」

「ようはアレだろ? 喧嘩相手が犬とか猫から次元世界にシフトチ
エンジンただけだろ? 言っとくがな、はやて。俺はお前と、相
手が変わったからといって手のひら返すような……そんな薄っぺら
い関係を築いたなんて思ってないぞ」

「……へ、へ。そうなんか……。ふん……次元世界を相手
取るんかー! それは大変やな〜!」

拳動不審でワタワタしてるところ悪いが、戦うのお前だからな?
俺は後方で洗濯物でも干しとくから。

「そ、それは嬉しいな〜! ということはアレやる? 相手になのは
ちゃんとフェイトちゃんがおってもこっち側にいてくれるわけや
ろ?」

はやてが前かがみになりながら、下から見上げる形で聞いてくる。

……あ、そういえばそうだな。そんなことしたらなのはとフェ
イトと敵になるんじゃない。

「あ、やっぱりいまの話なしの方向で」

「ぺらっぺらの関係やんかつ!」

「ほぐうつ!」

はやてのラリアットで俺の頭がカチ割れそうになる。 流石管理局員……生身でも十分強い。

だつてしょうがないじゃん。 なのはとフェイトがあっち側にいるんだもん。

打ちつけた頭をさすりながら、はやてに文句言うことに。

「いつてえーな！ バカ女！」

「バカはそつちやで！ いまの行いは最低や！ 脳みそ引きずり出すぞー！」

怒気のこもった声ではやてが俺を睨みつけてくる。

え？ ちょ、え？ そこまで怒ることなの？ いつもこんな感じのやり取りしてるじゃん！？

怒りが収まらない様子のはやて。 このまま魔力弾でも撃つのか
と思いきや、一度冷静になるためなのかコップに水を汲んで一息で飲みほし、さっきまでの玄関でみたときの表情を浮かべながら近づいてきた。

「まあ……わたしがアンタに乙女心を期待したほうがバカやったで。 うんうん、人間モドキに人間のことを教えるのはとても難しいことやからね。 けどな？ このままじゃ、いかんと思うで。 幼馴染からのありがたい忠告やで？」

「ちょっとまって、人間モドキってどういうことだよ。 ちゃんとした人間だよ、俺は」

「そうやな、うんうん。 ちゃんとした人間やもんな。 でもな？
乙女心は理解できてへんやろ？」

「甘く見るなよ。 ギャルゲーで鍛えたこの力があれば」

座ったまま、左手をグツと握りしめ自分の胸にもっていく。

その拳をはやてがそつと包み込むように握りしめた。

「ゲームだけじゃわからないことがあるんやで……？ たえば
この心臓の鼓動の高鳴りとか」

「……え？」

はやての心臓に俺の手が触れる。 ドクンツドクンツと脈打つ音が
否応なしに聞こえてくる。 心臓の高鳴りが届いてくる。

「はや……て？ ちょっ、おまつ、それは洒落にならないって！？
俺にはなのはとフェイトという心に決めた人がいて」

「ブー。 女の子の前で他の女の名前を出すのも禁止のタブー一つやで？」

はやての腕が俺の首に絡まる。 離そうとしても引き離せない。

そのままはやてはゆっくりと俺に覆いかぶさる。 手は俺の指を恋
人のように一本一本絡ませた状態になっている。

「いやっ！？ ちょっ、まじでダメだってば！？」

「そんなに嫌なら引きはがせばええよ。わたしは魔法なんて使わずにただ乗ってるだけやし」

「いやでも……女性を引きはがすのは紳士じゃないというか……」

「ほんと、都合のいい脳みそやな。いつもは紳士とは逆ベクトルに位置するくせに」

クスクスと蠱惑的に笑うはやて。

「でも、これはわたしを引きはがさないっていう証拠として見てもええんやな？」

「いや……だから！　そもそも、お前のなんかじゃ力不足というやつでな」

「でも　ここはしっかり大きくしとるで？」

恋人絡みの左手を離し、俺の下腹部をなぞり、ふくらんでいる部分を触る。

「ふーん……力不足でも大きくなるんや？　随分と分別のない子やな」

ゆっくりと指を這わせるはやて。それが気持ちよくて、ちょっとだけムラムラしてくる。

おちつけっ！　俺の息子！　そして俺！　お前には好きな人がいるだろっ！

「なあ、俊？ キス してみようか」

「…………え？」

はやての顔がゆっくりと俺の顔におりていく。潤んだ瞳にわずかに震える唇。軽く朱がさしたその顔はいつもより数段可愛くみえて

「へー…………はやてちゃんとキスするんだ。へー…………。ヴィヴィオのことで相談しようと思ったんだけど。へー…………キスするんだ。

へー…………」

「おかしいなー。俊って、はやてと夕食作ってるはずだよね。それがなんで二人して床に倒れ込んで、そんな指の絡め方までしてるんだろう。おかしいね、なのは」

「うん。おかしいよね。わたしはべつに俊くんがだれとキスしても構わないけどさ」

二人の登場に体が強張るのがわかる。

「や、やあ…………なのはにフェイト。いつからそこに…………？」

「さあ？ べつにいつからでもいいんじゃない？」

なのはよりも優しいフェイトから、心なしか冷めた声が発せられる。

「いや、二人ともこれは誤解なんだよっ！？ 俺はべつにやましい気持ちなんかまったくなくて」

「なんでそんなに慌ててるの？　べつに私もフェイトちゃんも俊くんが誰となにしようが構わないよ？　むしろ祝辞を贈っちゃう」

「いや、だから聞いてくれ」

「だけどき、此处にはヴィヴィオがいること忘れてない？　小さい女の子がいるのにそういったことをするのはよくないと思うんだよね。私はべつに構わないけど、あくまでヴィヴィオの教育上問題がでてくるよね？」

「いや」

「ヴィヴィオが悪い子になったら俊は責任取ってくれるの？　とれないよね？　ただでさえ人間的にダメな俊がヴィヴィオの責任なんて取れるわけないよね？　べつに俊がそういうことするのはいいよ？　私もなのはも俊のことなんからうでもいいから」

あくまで機械的になのはとフェイトは淡々と告げる。　俺のことなど、どうでもいいということを強調して。

「あの　二人とも俺の話を聞いてくださ」

「話を聞く？　誰の？」

「いや、だから俺の話を」

「それが話を聞いてほしい人の体勢なのかな？」

そこで気付く。　いまの俺の状態を。　端的かつ客観的にまとめると

はやてに馬乗りの体勢で乗っかられている

「いや、ち、違うんだっ!?　これは　その　」

スルリと抜けてなのはとフェイトの前に立つ。

そんな俺になのはとフェイトは優しくほほ笑み

「「どうぞご勝手に。　私達はヴィヴィオと一緒に風呂に入りますから」」

バシンツ!と平手一発。

それを置き土産に二人はその場を後にした。

二人が去った空間には、ぶたれたところをさすりながら去ったであろう方向を見る俺と

「ふむ……なんか大変なことになったな」

呑気にそんなことを言うはやてだけがいた。

はやての方に歩き、胸倉を掴む。

「どうしてくれんだよツ!?　お前のせいで振り向くどころかそっぽ向いたじゃねえか!?!」

「いや……わたしも二人があそこまで怒るとは思ってなくて……」。

やっぱあれやな。 ヴィヴィオちゃんの教育上よくなかったみたいやで」

「知ってるよ！ そんなこと！ どうすんだよ、下手したら家を追い出されるかもしれないんだぞッ！？」

「まあ……ご愁傷様やな。 でも、それはわたしを断ればよかったわけやしなー。 それができなかったひょつとこが悪いとちゃうか？」

「うぐ……ッ！？」

確かに俺があっさりはやてをどかせることができればよかったのは確かだけど……。

はやての言葉にそれ以上反論できずに俺はただただ手をプルプルと震わすばかりである。

そんな俺をみてはやては小悪魔のように意地悪い笑みを浮かべてニヤニヤしていたのだった。

33・食べる前にスパイスを（後書き）

うんうん。 ヴィヴィオの教育上悪いもんね。

34・彼が此処にいる理由（前書き）

いつになつたら蕎麦食うんだよ

34・彼が此処にいる理由

『この身、この心、すべてをささげよう』

水がタイルを穿つ音が聞こえてくる。大きな家の中にこれまた大きな風呂場。その中に大人二人と、子どもが一人。とても仲好さそうに洗いつこしたりはしゃいだりしていた。大人の二人の名前は、高町なのはとフェイト・T・ハラオウン。表面上はとつてもにこやかだ。そして子どもの名前はヴィヴィオ。碧眼と深紅な瞳のオッドアイが特徴的な天真爛漫な女の子。この家のアイドルである。

「ねえねえなのはママー？」

「なあに？ ヴィヴィオ？」

「どうしてそんなに怒ってるの？」

メキッ！

なのはがもっていたアヒルの人形が深海に放り込まれたかのように圧縮される。

「べ、べつに怒ってないよ？ ねえ、フェイトちゃん？」

「うっ、うん。 なのはと私を怒らせたら大したもんだよね！」

湯船につかっているフェイトに同意を求めるとフェイトも首を縦に動かして、努めて明るく振る舞う。

そんな二人の様子をヴィヴィオはおかしそうにみていた。

なのははヴィヴィオの体を泡で満遍なくコーティングしながら先程の光景を思い出す。

自分の幼馴染が親友である八神はやたとキスする直前までいつていた光景を。

「べつに……なのははアレが誰とキスしても……関係ないからいいもん」

けど、普通に考えておかしくない？ 家にはヴィヴィオがいるんだよ？ これはあくまでヴィヴィオの教育上で問題がでてくることだと思うの。あくまでヴィヴィオの教育上でだよ？ じゃないと、私がこんなに怒るはずないもんね。だって、相手はあの俊くんだよ？ 社会不適合者で人間的に問題があつて、いつも私やフェイトちゃんにちよつかいとかセクハラとかかけてくる。デリカシーの欠片も存在しない男なんだから。まあ、そんな人だからなのはやフェイトちゃんが引き取ってあげようと思つて、一緒に住んでるのに……俊くんつてば、よりによつてはやてちゃんの誘惑にかかつてさ。なに？ いつもの『はやてとか恋愛対象にはいらなないわ』とか言つてるくせに、ちよつと女の子っぽいところ見せたらすぐに落ちるんですか？ 随分と弱い心ですね。なに？ いつも私やフェイトちゃんのこと『好き』とか言つてるくせに、あれも全部ウソつてわけですか？ だって、そうですね。はやてちゃんには

『好き』なんて言葉かけてないもんね。それなのに、あんなことになったってことはそういうことですね？ あー、なんか腹立ってきた。家追い出そうかな……。

メキメキメキツ……！！

ギエピー！ ギエピー！

「な、なのはママ！？ アヒルさんが気持ち悪い声をあげて命乞いしてるよっ！？」

おっと、いけないいけない。なにアレのことで熱くなってるんだが。私としたことが、もっと精神の訓練しないとイケないね。

「ねえー、ねえー。ママ？」

「ん？ どうしたの？」

「お兄さんって、どうして家にいるの？」

とつても答えづらい質問です。

「いや、それは……その……フェイトちゃん！」

「えっ！？ ここで私！？ えーっと、それは……その……ねえ？」

誰もいない空間に同意を向けるフェイトちゃん。そこには誰もいませんよ。

「あのね、ヴィヴィオ。 俊くんは普通の人じゃないの。 だから

家にいるしかないの」

「うゝ、そうなの？」

「うん、そうなの」

「それじゃ、なんで此処にきたの？ ママたちはお仕事なんでしょー？ お兄さんがそう言ってたもん。 それじゃ、お兄さんは？」

「えゝつと……それは……」

ヴィヴィオの質問に答えられない。

そもそも、なんで俊くんって此処にいるんだっけ？

「なのは。 俊が此処にいる理由だったら、アレだよ。 私たちがミッドに行くことになってそのパーティーが開かれたあとに」

ああ、そうだった。 今のいままでずっと忘れてきた。 いや、忘れようとしていた。

フェイトちゃんの言葉で思い出す。

あれは、高校生活も終わりを迎えるときだった

「いやゝ、それにしてもなのはもついにミッドに行くんだねえ。 毎日会えなくなるんだねえ」

「や、やめてよお姉ちゃんっ!? 髪ぐしゃぐしゃするの禁止っ!」

サイドポニーにした髪の毛を乱暴に触る姉を払いのける。 嬉しい気持ちでいっぱいだが、髪の毛をいじるのはやめてほしい。

私こと高町なのはもうすぐ高校生活も終了して、ついに本格的に時空管路局にお勤めになります。 たぶん……高校時代とかわらずそこまで仕事回ってくるとは思いますが。 どうしてか、いつも私の前であらかた片付いてたりするんです。 あとに残ってるのは細々として書類仕事だけ。 これは親友のフェイトちゃんにも言えることみたいです。 うーん……とっても不思議です。

「それにしても良かったわね、なのは。 ミッドのほうで住む家も見つかって。 大きな二階建ての家なんですって?」

「うん! リンディさんが頑張ってくれたの!」

「ほんとありがとうございますリンディさん。 大変だったでしょうに……」

「いえいえ、大事な娘であるフェイトも一緒ですし、なのはちゃんには数々の恩義がありますわ。 私としても、是非二人には立派な家に住んでもらいたかったの」

フェイトちゃんのお義母さんであるリンディさんが、フェイトちゃんの頭を撫でながら言う。 フェイトちゃんはちょっと恥ずかしそうに、でも嬉しそうにしている。

「そつえば、グレアムさんとこのはやてちゃんと他の皆もミッドに一斉に移動するのよね」

「うん、そうだよー。なんでもはやてちゃんが設立した部隊に皆ではいつて頑張るみたい。これから楽しみだねー！」

「でも……そうなると俊君は此処でお留守番かしら？」

「あつ……。そう……なるね……」

いつもふざけた、しかし極稀に真面目な自分の一番付き合いの長い幼馴染を思い出す。

上矢俊。海鳴一の問題児で、小中高と私は散々な被害を被ったことを覚えている。中学はまだ男女別だったけど、共学の高校になつてからがもうすさまじかった。私もどれだけ黒歴史を作ったとか……。

でもなんだかんだて、皆には人気がありクラスの破壊役にしてみとめ役なんてこともしていた。他の生徒たちからも人気はあったみたいだ。先生からも人気があるらしくよく職員室で名前が出ていた。処理対処として。

それはずっと傍にいた私だから胸を張っていえることなんだけど……
…そもそもなんで人気があつたんだろう？

前に、お父さんがお酒の席で『そういう星の元に生まれてるんだよ。上矢という家系の人たちはね。俊君のお父さんなんてもつと凄かったさ。あいつのカリスマ性は誰もが羨んだよ』そう俊くんに聞かせていたのを覚えている。俊くんのお父さんは俊くんが小さいときに飛行機事故で行方不明になった。それ以来、俊くんは高町家と自分の家を行ったりきたりしている。そんな中でもお父さ

んとお兄ちゃんには懐いてた。翠屋でバイトもして、たまに稽古したりして……俊くんは俊くんで人生を謳歌していた。だから……私もフェイトちゃんも皆も俊くんは海鳴に残ると思っていた。俊くんとお別れなのは少しさびしいけど、べつに今生のお別れってわけでもないし……会いたいときはすぐ会えるし。だから、私はずっとミッドの家に住んでからの家事分担とか家事の仕方について頭の中で考えていた。

ヴィータちゃんが呼びに来るまでは。

突然、ヴィータちゃんが念話で私とフェイトちゃんを呼び出した。

呼び出した先は道場で、その道場には既に先客がまっていた。

「あつ……はやてちゃん」

「おー、なのはちゃんにフェイトちゃん。いま面白いところやで」

面白そうにはやてちゃんが笑いながら指さした先には、お父さんと彼が正座で向かい合う形に座っていた。距離はおよそ1mくらいだろうか？

「なんで俊がいるの？」

「まあまあ、フェイトちゃんそれはすぐにわかるで。ほら、そろそろ口にするで。バカのバカなりに考えたバカな答えが」

はやてちゃんが喋った瞬間、彼はお父さんに向かってこういった。

『俺をミッドにいかせてください』

その言葉は耳を疑うような言葉だった。

俺の前には真剣な表情で威圧感たっぷりの土郎さんが正座で俺と対面していた。正直、めちゃくちゃ怖い。学校の先生なんかよりも1000倍怖い。

それでも、どうしても、この学校の先生よりも1000倍怖いこの人に言わなければいけないことがあった。伝えなければいけないことがあった。だからこそ、俺はこうして土郎さんを誘ったんだ。

「俊君。それで、話つてのはなんだい？」

「はい」

心臓の鼓動が嫌になるくらい響いてくる。いまにも口から出そうなほど、吐き出しそうなほど、もう……なんというか心臓が痛い。でも、それでも、それだからこそ、この痛みを抑えて俺は土郎さんに言わなければいけない。

「俺をミッドにいかせてください」

「ミッド……というと、なのは達がこれから行く新天地だね」

「はい。俺も二人についていきたいんです」

その俺の懇願を

「それはできない、俊君。 残念だけだね」

士郎さんは跳ね除けた。 それもあっさりと迷うことなく。 『なにをいつてるんだ、こいつ』とでも言いたげに。

「やっぱり……ダメ……ですか？」

「当たり前だよ。 君をそんなところへは行かせることはできない」

「ッ……！ ど、どうしてですか？」

「^{はっめ}一との約束で俺は君を頼まれたんだ。 そう簡単に頷くことはできないよ」

「で、でも」

なおも食い下がろうとする俺に、士郎さんは問う。

「では逆に俊君はどうしてそんなにミッドにいきたいんだ？ べつに友達がいらないわけじゃないだろう。 勉強がついていけないということはない。 君の成績だって親代りである俺が確認してるんだからね。 それに君は翠屋でバイトだってしてる。 大学だって、友人であるアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にいるみたいだし、一人で寂しい思いなんてしないはずだ。 なのに、どうしてそこまでして君は行きたがる？」

士郎さんの問いはもつともであった。 普通に考えてみればそうだろう。 バイトもして、友達関係も交友も広い。 大学ではアリサとすずかと一緒になって色々と大学生らしい生活を送ることだって

できる。でも　それじゃダメなんだ。　そんな“普通”じゃダメなんだ。

「それにミッドは魔法があると聞いた。　なのはやフェイトちゃん、それにその他の友人の人たちも魔法があるから行くのだろう？」

「たしかに……なのはやフェイト、はやてやヴォルケンの皆は自分の力を世界に役立てたい。　世界を平和にしたい、という志と信念でミッドに行くみたいです」

「それで？　君は？　世界の平和とか、世界の役に立つためにミッドに行くのかい？」

「いえ……それは……その……」

世界の平和。　それはとっても素晴らしいことで、できるなら俺もやりたいものだ。　なんせそこには親父が見てきた世界が広がってるだろうから。　規模は違つかもしれないけど。

でも、俺の力ではそんなことできるはずもない。

だから俺は口ごもる。　　土郎さんに言えなくて口ごもる。

「職はあるのかい？　住む家は？　お金は？　まさか、その全てをなのはやフェイトちゃんに出してもらわなければならないだろう。　だとしたら、それは男として最低の行為だぞ。　俊君」

「なっ、なんとかします！　職も家も金も！　なんとかしてみせますから！」

「言うは易し行うは難し。君にそんなことができるのか？ たしか、君は学校からこんな評価を受けているようだね。『いざというときにはやる男』。大層な信頼されっぷりだね。でもな、それは裏を返せば『いざ、というときがくるまでやらない男』なんだよ。そんな一本竹の橋を渡るような男をどう信じればいいんだ？俺は君のことは大抵知っているつもりだ。でもね だからこそ、君をミッドにやることはできないよ」

「……」

「俺は君には真つ当な人生を歩んでほしいと思っているし、願っている。そして望んでいる」

ああ……この人に言っていることは痛いほどよくわかる。

「なのはたまたま魔法の素質があつて、魔法と出会い、自分の道を決めた」

体の奥底まで土郎さんの心配している声が届いてくる。『君も自分のために人生を歩んでみてはどうだ？』そう聞こえてくる。

「君はたぶん、後悔しているのかもしれない。悔やんでいるのかもしれない。適当な言葉でなのはの味方をしたことを。でも、俺はそうは思わない。君の言葉がなくなるとも、なのははこの道を歩むと決めていたはずだ」

いつもいつもそうだった。肝心な時に、ふらつと横にきて俺に助言をしてくれたのはこの人だ。だからこそ、この人はこんなにも心を押し込めて冷徹に機械のように話しているんだろう。

「もう……いいんじゃないか？ 誰かのためじゃなく、自分のために生きてみても……いいのではないか？ 俊君。誰も君に何も言わないだろう。それに、なのは達は言ったじゃないか。『休みの日や、時間が空いたときは帰ってくる』と。何も離れ離れになるわけじゃないんだ。知っているだろう？ なのはのことは。君が一番よく知っているはずだ。なのはは約束を破らない。こ
と、君も関係ある約束ならなおさら。もう、休んでもいいんじゃないか？」

もう休め

その言葉が俺の体を支配する。

ああ……確かにそれもそうだ。もともと、俺が勝手に決めた誓いと約束なんだから。誰も困ることなんてないじゃないか。そう
誰も困らない。

いや、一人だけ 困る男がいたな。確かそいつの名前は上矢俊
なんていったつけ？ ストーカーのように犯罪者のように執拗に高
町なのはとフェイト・T・ハラOWNに引っ付く輩だったな。

けどまてよ？ 上矢俊なんて奴は死んだんじゃないか？ 確
か小学校に上がるまえに両親の飛行機事故と同じタイミングで死
んだだよな。人から人形へと成り下がったんだよな。

いや、思い出した。そんな出来損ないの奴を救ってくれた少女が
いたんだ。たしか名前は高町なのはだったような気がする。そ
いつが上矢俊という人物を立ち上がらせ、背中を押したんだ。け
ど上矢俊はそれでも道に迷っているかのように、フラフラと亡者の
ように自分のやるべきことを見つけれないでいた。いや、それ

が本当に正しいのかわからなかったんだ。そして、そんな上矢俊に答えをくれた少女がいた。それが、フェイト・テストロッサだったな。そうだ、道を示してくれたんだ。決して迷うことのない道を。フェイト・テストロッサは示してくれたんだ。

そんな彼女達をみて、俺はどんな想いを抱いたんだっけ？

憧れ？ 羨望？ 嫉妬？ 憎しみ？ 憎悪？ 嫌悪？ 愛？ 羞恥？

彼女達に何を見た？

理想？ 絶望？ 未来？ 過去？ 妄想？ 願望？

彼女達の何が見たい？

悲しみの顔？ 羞恥に悶える顔？ 泣いてる顔？ 恋人のような笑顔？

「士郎さん……。男って、脆い生き物ですね。バカな生き物ですね」

「……？」

「本当に、自分でも怖いんですけど あの子のためなら死んでもいいと思えるんです」

士郎さんの目がキツくなる

「一度は死んだこの身を、絶望の淵に堕ちたこの身を掬い取って、救い上げてくれたのは高町なのはです。死ぬしかなかったときに、

人間から人形へと堕ちていくときにその手をしっかりと握ってくれたのが高町なのはなんです。震える背中を、怖くて疎みそうになる足を手を、そつと握ってくれたのが高町なのはなんです。あいつは俺に生きる希望をくれました。だけど俺は、ビビりで臆病で弱虫だから……それでも自分の歩む道が正しいのかわからなかった。そんなとき、フェイトに会い、進む道をもらいました。進む道を示してくれました。なにもできなかった自分に、お荷物だった自分に、あいつはそれでも進む道を示してくれたんです。あいつだって、大変だったはずなのに」

口が自分の制御下を外れて喋りだす。

「いま、あいつらは前に進もうとしています。新しい一步を踏み出しています。本当は……本当は俺もあの中に混ざりたい！なのはやフェイトやはやての横で肩を並べて歩きたい！二人のために戦って、二人を戦闘から守りたい！その身に降りかかる火の粉を全て払いたい！嫌われても！疎まれても！蔑まれても！あいつらを守りたい！……でも、俺には魔法の才能なんてなかった。ほんのかすかな使い物にならない魔力しかなかった。だから俺は、魔法で戦って守ることを諦めた。それと同時にあいつらの横を歩くのを止めました。だって、あいつらは前だけ向いて歩いていればいいから。その横列に俺がいたら皆心配して前に進むことができないから。だから俺は一番後ろにすることにしました。誰よりも後ろの最下位に、誰よりもみんなをみることが出来る最後方に行くことにしました。悔しくないわけじゃなかった。泣きたかった。嘆いたりもした。どうして俺には魔力がなかったのか。魔力があつたら、マンガやゲームのような主人公になれたかもしれないのに。そう思いました。でも俺はそんなことよりもなのはとフェイトの笑顔を見たかった。結局、俺の中にはそれしかなかったんです。自尊心なんてものは存在しなくて、

ただただ、笑顔にしたい、という意味のない醜く自己中心的な答えしか残っていなかったんです。でも、俺にはそれだけあればよかった、十分だった。その答えがあれば俺は堂々と自信をもって後ろにいられた。なのはとフェイトが困ってれば、いつかされたように優しく背中を押して導けるように。なのはとフェイトが泣きそうなときは、後ろから叩いて振り向きざまに指をほつぺたに押し付けることができるように。なのはとフェイトが無意識に手を握る動作をすれば必ず握り返すことができるように。なのはとフェイトが膝を抱えてしゃがんだときは、後ろから声をかけることができるように。俺は後ろにしようと思いました」

なにも、戦って守ることはしなくていいんだ。

「あいつらのためだったら、神でも悪魔でも魔王でも妖怪でも天使でも女神でも管理局でも相手になります。あいつらがいるなら、なんだってします。できることなら、全てやることができます。ただ あいつらのいなくなった世界になんてなんの興味もありません。その時は、1秒でも二人に会えるように舌を噛み千切って死ぬでしょう」

ああ……こりや士郎さん引いてるな。まあ、そりやそうか。こんな奴、はたからみれば頭のおかしい奴だからな。でも、それでもない。それだつてかまわない。

だから宣言しよう。士郎さんの前だけでは素直になれるから

「あいつらが死んだとき！俺の命はそこまで構わない！！」

長い長い、俺の独壇場のスピーチが終わる。気持ち悪い、犯罪者予備軍まっしぐら。訴えられたら勝ち目なしのスピーチが終わる。

士郎さんはなにも言わない。黙ったまま、目をつぶるだけだ。

やがて口を開く。その答えは

「やはり許可はできない」

先程と変わらないものだった。

けど、俺には落胆もなにもなかった。

「そうですか。だったら俺は」

「ただし。当人たちからの許可が下りればそれは仕方がないことだ。こちらとしては止めようがないからね」

「……は？」

「せいぜい、頑張るんだぞ。俊君。しっかりな」

士郎さんは謎の言葉を残して、俺の肩を2・3叩くと道場を後にした。

そんな中、俺は一人ポツンと残された道場で呟いた。

「……許可……下りるわけないじゃん……」

八神はやてはおもむろに口を開いた。それは関心なのか、感嘆な

のか嘲笑なのか落胆なのかわからなかったが、とにかく口を開いた。

「自分の恋愛面のことになると、性能とかその他もろもろ一気に落ちていくヘタレキング代表のくせに二人がいないときにはこんなに見えるんやな……。まあ、二人ともいたわけなんやけど。それで？　なのはちゃんとフェイトちゃんはどうすんの？　まあ、もちろんあいつを連れていくなんて選択肢はないと思うけど」

こんな気持ち悪い男のストーカー気味で危ない発言をした後で、ついてきていいよ、なんてことはいくらなんでも言わないだろう……。そう思いながら二人のほうを見たのだが、

「ま、まあ……。あそこまでいうなら……。連れて行ってあげてもいいかな？」

「そ、そうだね……。幼馴染が死ぬのもなんか嫌だしね！」

「そ、そうそう！　私たちのせいで死なれちゃ困るもんね！　うん、これはいわば人命救助だよ！　時空管理局の局員としては当たり前前のことだよな！」

「……………え？」

二人の親友の反応はとても予想外なものだった。

視線はまったく定まっておらず、あちらこちらに目を移し顔は若干先程よりも赤く、手なんか指を絡ませている始末。

どこかよかったのか？　先ほどの男の独りよがりのスピーチのどこが良かったのか？　あいつの気持ちは知っている。だけど、正直

言つてあそこまで言い切つてしまつと一般人の常人の感覚からすればちよつと引いてしまつわけなのだが……

「る、留守番の犬くらいはできるだろうしね！」

「そ、そうそう！ 留守番の犬くらいはできるね！ あくまで犬だけどー！」

二人はまったく引かずにいた。

どうしてこつなつた？

そんなとき、はやての腕をヴィータがちょんちょんとつつく。首をひねるはやてにヴィータは全てをわかつているような顔で言つた。

「やっぱり女の子はうれしいもんだぞ。 あそこまで言つてくれると。 若干犯罪チックだけど」

そのヴィータの答えに、はやては首をひねるだけであつた。

そして隣で打ち合わせをしてる二人を見て思う。

またミッドでもあいつの世話をすることになるのか……と。

当日、私たちは高町家に集まつてからミッドにいくことになった。

アリサちゃんにすずかちゃんも駆けつけてくれた。 もつべき者は友達である。

私達はそれぞれ言葉を交わしながら、楽しく喋っていた。

その傍らで、彼だけがぎこちない笑みを浮かべていた。

「どうしたの？ 俊くん」

「いや、なんでもないよ。 これから新天地では大変だろうな……と思つてさ」

確かに彼の言うとおりにこれからとても忙しくなるだろう。 panse、仕事と同時進行で家事もしていかなければならないのだから。 けど、それはとっても難しいことで、仕事で疲れたフェイトちゃんと私ではできないかもしれない。

「確かに家事は大変だよ。 手だってただれるだろうし、洗濯だって毎日しないといけないんだから。 仕事と同時進行はきつそうだね。 ねえ、フェイトちゃん？」

「うん、きつそうだよ」

そばにいたフェイトちゃんが同意する形で頷く。

「でも……しょうがないだろ。 家事だって洗濯だって誰かがやらないといけないんだからさ。 頑張つて二人で分担しながらやるしかないだろ」

「え……でもなんか嫌だー」

「うん、私も家事とかしたくないかな。 お仕事だけに専念したい」

「まあ、その気持ちはわかるけど」

「だから」

さらになにか言おうとする彼の手をフェイトちゃんと二人、握りしめながら言った。

「私達と一緒にきてくれない？」

「……………ほわい？」

「だーからー、一緒にきてもいいよ、ってこと！」

状況を呑み込めてない彼に、私とフェイトちゃんは若干声を大きくして言った。

「……………ほんとに？　ほんとにきてもいいの……………？」

「ま、まあ……………死なれても困るしね。　あくまで死なれたら困るから、私とフェイトちゃんは連れて行くことにしたんだからね！　そこ勘違いしちゃダメだよ！」

「う、うん……………」

「絶対だよ？　私やフェイトちゃんが違う理由で連れていく、なんてことありえないからね！」

「お、おう……………」

そしてその30分後、私達はミッドの家に行くことになったのだ。

これが、彼が家にいる理由である。

「なのはママ!? フェイトママ!? タイルに頭打ち付けたらとつても痛いよ!?!」

「うわあああああああああ! 今まで封印していた私の黒歴史がああああ!」

どうしてあのとき、あんな発言をしてしまったのだろうか? いや、べつに彼が来るのはよかったのだが……それにしてもあんまりなセリフではなかったか? これでは、まるで

「私が俊くんのこと好き、みたいなことになっちゃうじゃん!?!? いま流行のツンデレみたいじゃん?!?!」

「うー……なんであるとき、もうちょっと考えて発言しなかったんだろうね……」

あの時、あの場所で、あの場面を見なければ、彼が此処にくることはなかっただろう。いつもはダメダメでも極稀に真面目になって、日常的にセクハラ発言するのは、肝心なときには全くといっていいほど言ってくれない。魔導師じゃなく、魔法使いの彼。あの場面はいまにもレイジングハートの中に入っている。フェイトちゃんもバルディッシュの中に入っているらしい。あんなことを言ってくれた彼だから、私もフェイトちゃんもまだ家に置いてあげてるんだよ? 本当なら追い出しているのに。でも

だからこそ、鼻の下伸ばしてはやてちゃん
の誘惑に耐えれなかった
罪は重いよね？

34・彼が此処にいる理由（後書き）

笑顔にする方向性が間違っているとしかいえない。

そして掘り下げれば掘り下げるだけ犯罪者へと近づいていく。ど

うしてこうなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663y/>

パンツ脱いだら通報された

2011年12月25日12時58分発行